

第二十三條第二項第四項ノ規則ニ從フ

第三百三十三條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查ハ被告人其家宅若クハ他人ノ家宅ニ潛匿シタルト思料シタル時ハ其地ノ戶長又其差支アル時ハ隣依二名以上ノ立會ヲ求メ之ヲ搜索ス可シ

巡查ハ被告人ヲ發見シタルト否トニ拘ハラヌ搜索調書ヲ作り立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

家宅搜索ハ日出前日没後之ヲ爲スヲ得ス

第三百三十四條 豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ潛匿シタルヲ知リ又ハ潛匿シタルト思料シタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スル時ハ巡查ニ令狀ヲ帶行セシムルヲ得

巡查ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ令狀ヲ示シテ即時ニ執行ヲ求ム可シ

第三百三十五條 豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スルヲ能ハサル時ハ各控訴裁判所檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ搜查及ヒ逮捕ヲ爲ス可キヲ請求スルヲ得

請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地内ノ檢事ヲシテ搜查及ヒ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ

第三百三十六條 陸海軍在營ノ軍人軍屬ニ對シ令狀ヲ發シタル時ハ所屬長官ニ令狀ヲ示

ス可シ長官ハ己ムヲ得サル差支アルニ非サレハ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應セシム可シ其行軍ノ際亦同シ

第三百三十七條 拘留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其令狀ニ記載シタル監倉ニ引致ス可シ若シ其監倉ニ引致スルヲ能ハサル時ハ假ニ最近ノ監倉ニ引致スルヲ得

何レノ場合ニ於テモ監倉長ハ令狀ヲ檢閲シテ被告人ヲ受取り其證書ヲ渡ス可シ

第三百三十八條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查ハ之ヲ執行シタルヲ又執行スルヲ能ハサル時ハ其事由ヲ令狀ノ正本ニ記載ス可シ

巡查ハ令狀執行ニ關スル書類ヲ書記局ニ差出シ書記ハ其受取證書ヲ渡ス可シ

第三百三十九條 拘留狀又ハ收監狀ヲ受ク可キ被告人既ニ監倉若クハ獄舎ニ在ル時ハ書記ヨリ之ヲ本人ニ送達シ其旨ヲ正本及ヒ謄本ニ記載ス可シ

第四百十條 密室監禁ノ場合ヲ除クノ外被告人ハ監獄則ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ其親屬故舊又ハ代言人ニ接見スルヲ得

書翰書籍其他ノ書類ハ豫審判事ノ檢閲ヲ經タル後ニ非サレハ被告人ト外人ト之ヲ授受スルヲ許サス但豫審判事ハ其書類ヲ留置クヲ得

第四百十一條 豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非スト思料シタル時ハ豫審中何時ニテモ拘留狀又ハ收監狀ヲ取消ス可シ但收監狀ヲ取消ス時ハ豫メ檢察

官ノ意見ヲ聽ク可シ

第四百二十二條 監倉ニハ刑法治罪法ヲ備置キ被告人ノ請求ニ從ヒ之ヲ貸與ス可シ

第二節 密室監禁

第四百二十三條 豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト思料シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ拘留狀若クハ收監狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スルノ言渡ヲ爲ス事ヲ得

第四百二十四條 密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接見シ又ハ書類貨幣其他ノ物品ヲ授受スルコトヲ許サス

食物飲料藥餌其他監倉ヨリ給ス可キ物品ト雖モ監倉長ノ特ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與セシム

第四百二十五條 密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カラズ但十日毎ニ其言渡ヲ更改スルコトヲ得言渡ヲ更改スル時ハ其事由ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問シ通常ノ規則ニ從ヒ調書ヲ作ル可シ

第三節 證據

第四百二十六條 法律ニ於テハ被告事件ノ摸樣ニ因リ有罪ナルノ推測ヲ定ムルコトナシ

被告人ノ白狀官吏ノ檢證調書證據物件證人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸般ノ徵憑ハ裁判官ノ判定ニ任ス

第四百二十七條 豫審判事ハ檢察官民事原告人被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據徵憑ヲ集取ス可シ

第四百十八條 豫審判事臨檢家宅搜索物件差押又ハ被告人證人ノ訊問ヲ爲スニハ書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作り豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルコト能ハサル時ハ立會人二人アルヲ要ス但監倉ニ就テ被告人ヲ訊問スル時ハ其監倉ノ官吏一名ヲシテ立會ハシム可シ

前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作り之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

書記又ハ立會人ナクシテ爲シタル處分ハ其効ナカル可シ

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

第四百十九條 豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ但檢證ヲ爲シ又ハ證人ヲ訊問スルニ付キ急速ヲ要スル時ハ此限ニ在ラス

第四百五十條 豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ白狀セシムル爲メ恐嚇又ハ詐言ヲ用フ可カラズ

第五百一十一條 書記ハ訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀聞カス可シ

豫審判事ハ被告人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシム可シ若シ署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

書記ハ本條ノ式ヲ履行シタルコトヲ記載シ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

第五百一十二條 被告人其陳述ニ付キ變更増減ス可キコトヲ申立タル時ハ更ニ訊問ヲ爲シ

前條ノ規則ニ從ヒ其訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印ス可シ

第五百一十三條 被告人ハ陳述書ノ謄本ヲ求ムルコトヲ得

第五百一十四條 豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルコト人違ナキト其他事實ヲ發見ス可キ一切

ノ模様ヲ證スル爲メ必要ナリトスル時ハ被告人ト他ノ被告人證人又ハ其他ノ者ト對

質セシムルコトヲ得

第五百一十五條 書記ハ對質人ノ陳述及ヒ對質ニ因リ生スル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人

ニ其對質ニ關スル部分ヲ讀聞カス可シ

第五百一十六條 被告人又ハ對質人違ナル時ハ書面ヲ以テ問ヒ咄ナル時ハ書面ヲ以テ答

ヘシム若シ譯者啞者文字ヲ知ラサル時ハ通事ヲ命ス可シ

被告人又ハ對質人國語ニ通セサル時亦同シ

第五百十七條 通事ハ正實ニ通譯ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ

書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ

第五百十九條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日時場所及ヒ被告人ノ人違ナキコトヲ證明ス

可キ模様ニ付キ調書ヲ作ル可シ

第五百十八條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所ニ臨ミ

檢證ヲ爲ス可シ

又檢事ノ請求アリタル時ハ如何ナル場合ト雖モ臨檢ス可シ

第五百十九條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日時場所及ヒ被告人ノ人違ナキコトヲ證明ス

可キ模様ニ付キ調書ヲ作ル可シ

又被告人ノ利益ト爲ル可キ模様ヲモ記載ス可シ

第六十條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ發見シタル物件其出所及ヒ模様ニ因リ被告

人ノ人違ナキコト又ハ犯罪ノ模様ヲ知ルニ足ル可シト思料シタル時ハ之ヲ差押ヘテ認

印ヲ爲シ目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監視シ又ハ遞送スルハ書記之ヲ擔任ス可シ

第六十一條 豫審判事ハ臨檢家宅搜索物件差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ラサル時ハ場

所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置ク事ヲ得

第六十二條 豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スルノ疑ア

ル者ノ住所ニ臨檢スル事ヲ得
被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住所ニ在ラサル時ハ同居ノ親屬若シ其在ラサル時ハ
戸長ノ立會アルヲ要ス

第三百三十三條第三項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第三百六十三條 被告人ハ臨檢家宅搜索ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會ハシムルヲ
得

若シ被告人拘留ヲ受ケタル時ハ自ラ立會フヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナ
リトスル時ハ此限ニ在ラス

民事原告人及ヒ其代人ハ前ニ記載シタル處分ニ立會フヲ得但豫審判事ハ其立會ノ
爲メ豫審ヲ遅延ス可カラズ

第三百六十四條 家宅搜索ノ場合ニ於テ豫審判事ハ第三百六十條ノ規則ニ從ヒ物件ヲ差押
フ可シ

物件ヲ差押ヘタル時ハ其目錄ノ謄本ヲ立會人ニ渡ス可シ

第三百六十五條 豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハス其物件
ヲ被告人ニ示シ辨解ヲ爲サシム可シ

其訊問及ヒ陳述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

第三百六十六條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ證人ノ陳述ヲ聽クヲ必要ナリトスルハ
ハ書記ノ立會ニ依リ各別ニ之ヲ訊問ス可シ

第三百七十條以下ノ規則ハ本條ニテモ亦之ヲ適用ス

第三百六十七條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラヌ允許ヲ得シテ其
場所ニ出入スルヲ禁スルヲ得

若シ其禁ヲ犯ス者アルハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルヲ得

第三百六十八條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ臨檢家宅搜索ノ事ヲ其地ノ治
安判事ニ囑託スルヲ得

第三百六十九條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスルハ驛遞電信鐵道ノ官署諸

會社ニ其事山ヲ通知シ被告人又ハ豫審ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ是等ノ者ニ對シ
發シタル書類電報又ハ物件ヲ受取開披スルヲ得但受取證書ヲ渡ス可シ

前項ノ書類物件不用ニ屬シタルハ其官署又ハ會社ニ還付ス可シ

第六節 證人訊問

第三百七十條 豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ證人トシテ指名シタル者ヲ呼
出ス可シ

原告證人被告證人ノ員數夥多ナルハ指名ノ順序ニ從ヒ又ハ最モ事實ヲ知ル可シト

思料シタル者輕罪事件ニ付テハ各五名重罪事件ニ付テハ各十名ヲ限リ先ツ之ヲ呼出ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスルモ此限ニ在ラス
又原被ノ指名セサル者ト雖モ豫審判事ノ職權ヲ以テ證人トシテ之ヲ呼出スヨヲ得
第七十一條 證人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ但其呼出狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ之ヲ送達ス可シ

若シ證人管轄地外ニ在ル片ハ其所在ノ地ノ輕罪裁判所書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ
第七十二條 豫審判事ハ證人裁判所々在ノ地ニ住セサル時ハ其住所ノ地ノ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヲ得

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヲ得
本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ名ヲ以テ其裁判所ノ書記局ヨリ之ヲ送達ス可シ

第七十三條 呼出狀ニハ證人ノ氏名住所及ヒ職業ヲ記載ス可シ
又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡シ且拘引スルヲアル可キ旨ヲ記載スヘシ
呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

第七十四條 證人疾病公務其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルヲ證明シタル時ハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

第七十五條 證人ト爲ル可キ者陸海軍在營ノ軍人軍屬ナル時ハ其所屬長官ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官ハ即時ニ出廷セシム可キヲ認可シ又ハ職務上已ムヲ得サル差支アル時ハ其事由ヲ付シテ出廷ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ

第七十六條 豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除クノ外證人呼出ニ應セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ貳圓以上拾圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直ニ拘引狀ヲ發スルヲ得但其費用ハ證人ヲシテ之ヲ擔當セシム
若シ證人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡シ且拘引狀ヲ發スルヲアルヘシ

第七十七條 豫審判事ハ證人初度又ハ再度ノ呼出狀ヲ受ケサルヲ其呼出狀第七十三條ノ規則ニ背キタルヲ又ハ豫知シ難キ正當ノ事故アリテ出廷スル能ハサリシヲ證明シタル片ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金ノ言渡ヲ取消スヘシ

第七十八條 證人呼出狀ニ因リ出廷シタル片ハ其呼出狀ヲ書記ニ差出ス可シ若シ之

ヲ遺失シタル時ハ其人進ナキヲ証明スヘシ
第七十九條 豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名年齢職業住所及ヒ第
百八十一條ニ記載シタル者ナリヤ否ヲ問フ可シ
第八十條 豫審判事ハ證人ヲシテ愛憎畏懼ノ心ナク正實ニ陳述ヲ爲ス可キヲ宣誓
セシム可シ

豫審判事ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサ
ル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

宣誓書ハ訴訟書類ニ添置ク可シ

第八十一條 左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルコトヲ許サス但事實參考ノ爲其陳述ヲ聽
クコトヲ得

- 一 民事原告人
- 二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬
- 三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見ヲ受クル者
- 四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人
- 第八十二條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ
- 一 十六歳未満ノ幼者

- 二 知覺精神ノ不充分ナル者
- 三 瘖啞者
- 四 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者
- 五 重罪事件ニ付重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事
件ニ付公判ニ付セラレタル者
- 六 現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付曾テ訴ヲ受ケ其證憑充分ナラサルニ因リ免訴ノ言
渡ヲ受ケタル者
- 第八十三條 證人宣誓ヲ肯セヌ又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セカル時ハ豫審判事檢事ノ意
見ヲ聽キ刑法第八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴
ヲ許サス
- 醫師藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人公證人若クハ神官僧侶其身分職業ニ關スル秘
密ノ事件ニ付委託ヲ受ケタル者ハ前項ノ例ニ在ラス
- 第八十四條 證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ
必要ナリトスル時ハ證人ト他ノ證人又ハ被告人ト對質セシムルコトヲ得
- 第八十五條 豫審判事ハ證人ノ陳述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリトスル時ハ重罪
輕罪ノ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルコトヲ得

若シ證人同行スルコト肯セサル時ハ第七十六條ノ規則ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ
第八十六條 第五十六條第五十七條ノ規則ハ證人ニ付テモ亦之ヲ適用ス
第八十七條 皇族又ハ勅任官證人ナル時ハ豫審判事書記ト共ニ其所在ニ就テ陳述ヲ
聽ク可シ

第八十八條 書記ハ證人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書ヲ作ル可シ
其調書ニハ證人宣誓ヲ爲シタルコト又ハ爲ササルノ事由ヲ記載スヘシ

第八十九條 豫審判事ハ證人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ知ラシムル爲メ書記ヲシテ
調書ヲ讀聞カセシム可シ

證人ハ其陳述ヲ變更増減セシコトヲ請求スルヲ得書記ハ其請求アリタルコト及ヒ變更増
減ノ條件ヲ調書ニ記載シ豫審判事及ヒ證人ト共ニ署名捺印ス可シ若シ證人署名捺印
スル事能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

第九十條 證人ハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルコトヲ得
若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日稼高二等シキ賃金ヲ要ムルコ
トヲ得

本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其金額ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ

第七節 鑑定

第九十一條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ必
要ナリトスル時ハ學術職業ニ因リ鑑定スルコトヲ得可キ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ
爲サシム可シ

第九十二條 鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ其呼出狀ニハ犯罪事
件ニ付キ鑑定ヲ命スルコト及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡ス可キコトヲ記載ス可シ
鑑定人呼出ニ應セサル時ハ第七十六條ノ規則ニ從ヒ所分ス可シ但勾引狀ヲ發スル
コトヲ得ス

第七十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第九十三條 鑑定人ハ正實ニ鑑定スヘキノ宣誓ヲ爲ス可シ其宣誓ハ第八十條ノ式
ニ從フ

書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルコトヲ鑑定命令書ノ紙尾ニ記載シ之ニ宣誓書ヲ添置ク可シ
第九十四條 鑑定人宣誓ヲ肯セヌ又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ
意見ヲ聽キ刑法第七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ
控訴ヲ許サス

第九十五條 第八十一條第八十二條ニ記載シタル者ニハ鑑定ヲ命スルコトヲ得ス
但急遽ノ際正當ノ鑑定人ト爲ル可キ者ナキ時ハ事實參考ノ爲メ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第九十六條 豫審判事ハ成ル可ク鑑定ニ立會フ可シ

第九十七條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルコトヲ得

第九十八條 鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其手續結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ

若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ

鑑定人意見ヲ異ニスル時ハ各自鑑定書ヲ作り又ハ各自ノ意見ヲ一個ノ鑑定書ニ記載ス可シ

第九十九條 鑑定人ハ鑑定書ニ年月日ヲ記載シ署名捺印及ヒ契印ス可シ

又鑑定書ニハ豫審判事之ヲ受取リタル年月日ヲ記載シ書記ト共ニ捺印ス可シ
鑑定書ハ鑑定命令書ニ添附シ可シ

外國人鑑定ヲ爲シタル時ハ其鑑定書ニ裁判所ヨリ命シタル通事ノ作りタル譯本ヲ添置シ可シ

第二百條 鑑定人及ヒ通事ニハ旅費給料其他相當ノ費用ヲ給與ス可シ

第八節 現行犯ノ豫審

第二百一條 豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其

事件急速ヲ要スル時ハ檢事ノ請求ヲ待タス直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルコトヲ得
豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ニ定メタル規則ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第二百二條 前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナント雖モ豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタル者トス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルコトヲ記載ス可シ
豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キ者ニ非サルノ意見アリト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ

第二百三條 檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルコトヲ知リタル時ハ豫審判事ヲ待ツコトナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得但罰金ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ス
證人及ヒ鑑定人ノ陳述ハ宣誓ヲ用フルコトナク之ヲ聽ク可シ

第二百四條 前條ノ場合ニ於テ檢事ハ證憑書類ニ意見書ヲ添へ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第二百五條 第二百三條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フコトヲ得但令狀ヲ發スルコトヲ得ス
司法警察官ハ證憑書類ニ意見書ヲ添へ被告人ト共ニ速ニ之ヲ檢事ニ送致ス可シ

第二百六條 檢事被告人ヲ受取リタル時ハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ調書ヲ作り勾留狀ヲ發スルト否トヲ問ハヌ一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ
若シ起訴ヲ爲ス可カラサル者ト認メタル時ハ直ニ被告人ヲ放免ス可シ

第二百七條 豫審判事ハ二十四時内ニ被告人ヲ訊問ス可シ此場合ニ於テハ檢事ノ發シタル勾留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルヲ得

第二百八條 豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ付キ更ニ其取調ヲ爲スコトヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作リタル調書ハ之ヲ訴訟書類ニ添置ク可シ

第二百九條 檢事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ拘留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラヌ被告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ及ハヌト思料シタル時ハ直チニ輕罪裁判所ニ呼出スコトヲ得

第九節 保釋

第二百十條 豫審判事ハ豫審中拘留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應ジ出廷ス可キノ證書ヲ差出サレバ保釋ヲ許スコトヲ得

被告人無能力ナル時ハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ムルコトヲ得
第二百十一條 前條ノ證書ハ書記局ニ差出ス可シ

保釋中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲ス可シ

第二百十二條 保釋ヲ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保證セシムヘシ但豫審判事其金額ヲ定メ保釋ヲ許スノ言渡書ニ記載スヘシ

第二百十三條 保證ヲ爲スニハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ保證金若クハ貯金預所又ハ銀行ノ預證書ヲ書記局ニ差出ス可シ

又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スコトヲ得

第二百十四條 保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ保證金ノ全部又ハ幾分ヲ沒入ス可シ

第二百十五條 保證金ヲ沒入スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲ス可シ若シ他人ノ保證ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徵収ス可シ

第二百十六條 豫審判事保證金ヲ沒入シタル時ハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スコトヲ必要ナリトスル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

第二百十七條 豫審判事保證金ヲ沒入シタル後免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ前ニ沒入シタル金額ヲ還付ス可シ

第二百十八條 豫審判事免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ若クハ保釋ノ言渡ヲ取消シタル時ハ保證金ヲ還付ス可シ

第二百十九條 豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルコトヲ得

第十章 豫審終結

第二百二十條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタル時ハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ一切ノ訴訟書類ヲ送致ス可シ

檢事ハ訴訟書類ニ意見ヲ付シ三日内ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十一條 檢事ハ豫審充分ナラスト思料シタル時ハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルコトヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサル時ハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ付シ二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十二條 豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス後ニ記載シタル言渡ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

第二百二十三條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルコトヲ認メタル時ハ其旨ヲ言渡ス

可シ若シ勾留ヲ要スル者ト認メタル時ハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

第二百二十四條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

- 一 犯罪ノ證據充分ナラサル時
 - 二 被告事件罪ト爲ラサル時
 - 三 公訴ノ期滿免除ト爲リタル時
 - 四 確定裁判ヲ經タル時
 - 五 大赦アリタル時
 - 六 法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時
- 本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サレハ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス
- 第二百二十五條 被告事件違警罪ナリト思料シタル時ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ
- 第二百二十六條 被告事件輕罪ナリト思料シタル時ハ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ
- 被告人拘留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ釋放ノ言

渡ヲ爲ス可シ

禁錮ノ刑ニ該ルヘキ者ト思料シタル時ハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲ス可シ得
若シ被告人未タ拘留ヲ受ケサル時ハ令狀ヲ發スル可シ得

第二百二十七條 被告事件重罪ナリト思料シタル時ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス
ヘシ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタル時ハ其言渡ヲ取消スヘシ

重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニハ控訴裁判所檢事長ノ指揮アルマテ豫審ヲ爲シタル裁
判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置スヘキヲ記載スヘシ

第二百二十八條 豫審終結ノ言渡ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付スヘシ
管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲スニハ其理由ヲ明示シ若シ被告人ヲ拘留スヘキ時ハ其理由
ヲ明示スヘシ

免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルコト公訴受理スヘカラサルコト及ヒ其理由
又犯罪ノ証憑充分ナラサル時ハ其旨ヲ明示スヘシ

違警罪裁判所輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質摸樣證
憑ノ充分ナルコト及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ

第二百二十九條 前條ノ言渡書ニハ第三百三十條ノ規則ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示ス
可シ

第二百三十條 書記ハ速ニ豫審終結ノ言渡書ノ原本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送
達ス可シ但是等ノ者ハ第二百四十六條以下ノ規則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障ヲ爲ス可
シ得

第二百三十一條 被告人ヲ逮捕スルコト能ハサル場合ニ於テ重罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ
該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ其旨ヲ言渡書ニ記載ス
可シ但被告人ハ現ニ拘留ヲ受ケルニ非ザレバ其言渡ニ對シ上訴ヲ爲ス可シ得ス

第二百三十二條 前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原告人ハ假ニ被告人ノ財産ヲ差押フ
可キコト民事裁判所ニ請求スルヲ得ス

第二百三十三條 豫審終結ノ言渡ヲ爲シタル時ハ豫審判事ヨリ速ニ其旨ヲ裁判所長ニ
報告ス可シ

又十五日毎ニ未決ノ豫審事件ニ付キ簡答ナル報告書ヲ差出ス可シ

第四章 豫審上訴

第二百三十四條 左ノ場合ニ於テハ檢事又ハ被告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ何時ニテ
モ故障ヲ爲ス可シ得

一 管轄違フ申立ヲ棄却シタル時

二 法律ニ背キ令狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セサル時

三 法律ニ背キ保釋責付ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サ、ル時
 四 越權ノ處分アル時
 民事原告人ハ私訴ニ付キ第四ノ場合ニ於テ故障ヲ爲スヲ得
 第二百三十五條 故障ヲ爲サントスル者ハ其裁判所ノ書記局ニ趣意書ヲ差出スヘシ
 故障アリタル時ハ書記其趣意書ノ謄本ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ
 差出スヲ得
 故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セス但保釋責付ヲ爲シタルニ付キ檢事ヨリ故障
 アリタル時ハ其執行ヲ停止ス
 第二百三十六條 故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判事三名以上ニテ趣意書答辨書其他
 訴訟書類及ヒ檢事ノ意見書ニ依リ之ヲ判決ス可シ
 會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ對シテハ豫審終結ノ言渡アリタル後上告
 ナ爲スヲ得
 第二百三十七條 左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原告人ヨリ豫審終結ニ至ルマ
 テ豫審判事ヲ忌避スルヲ得
 一 豫審判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナル時
 二 豫審判事被告人又ハ民事原告人ノ後見人ナル時

三 豫審判事又ハ其配偶者ニ於テ民事原告人被告人又ハ是等ノ者ノ親屬ヨリ賄賂ニ
 非スト雖モ贈物ヲ收受シ若クハ聽許シタル時
 第二百三十八條 忌避ノ申立ハ豫審判事ニ之ヲ爲ス可シ但其申立ヲ爲スニハ趣意書ニ
 通テ書記局ニ差出スヘシ
 書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其送致ヲ受ケタルヨリ二十四時内ニ其
 申立ヲ認可シ又ハ棄却スルヲ趣意書ノ紙尾ニ記載シ一通ヲ書記局ニ藏置シ一通ヲ
 本人ニ送達ス可シ
 第二百三十九條 豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ其申立人ヨリ故障ヲ爲スヲ得
 會議局ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辨明書ニ依リ判決ヲ爲スヘシ
 第二百四十條 豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又ハ其申立ヲ棄却シタルニ付故障ア
 リタル時ト雖モ豫審ノ手續ヲ繼續ス可シ但終結ノ言渡ヲ爲スヲ得ス又急速ヲ要セ
 サル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スルヲ得
 第二百四十一條 會議局ニ於テ忌避ニ付テノ故障ヲ棄却シタル時ハ上告ヲ爲スヲ得
 但豫審終結ノ言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ス
 第二百四十二條 豫審判事自ラ第二百三十七條ニ定メタル原由アルヲ認メ又ハ回避

ス可キ者ト思料シタル時ハ會議局ニ回避ノ申立ヲ爲ス可シ
回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第二百四十三條 會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタル時ハ裁判所長更ニ他
ノ判事ヲシテ豫審ヲ爲ルシム可シ

其判事ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ前豫審判事ノ爲シタル處
分ト雖モ更ニ取調ヲ爲ス可キヲ得

第二百四十四條 書記ハ自ラ回避シ又ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ會議局ニ申立テ之ヲ
忌避スルヲ得

第二百四十五條 檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之ヲ忌避スルヲ得ス若シ自ラ
回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ會議局ニ申立ツルヲ得

檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申立ツ可シ檢事ハ其申立テ
許否ス可シ

第二百四十六條 檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲ス可キヲ得

民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アルニ因リ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲ス可
キヲ得

被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ爲ス可キヲ得

輕罪裁判所又ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シテハ豫審判事ノ管轄違越權又ハ其
事件ヲ移ス可キ裁判所ノ管轄違ニ非ザレバ故障ヲ爲ス可キヲ得ス

第二百四十七條 故障ノ期限ハ一日ナリトス但言渡書ノ送達アリタルヨリ之ヲ起算ス

第二百四十八條 檢事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ爲スニハ申立書ヲ書記局ニ差出ス
ヘシ書記ハ速ニ其旨ヲ對手人ニ通知スヘシ

故障申立人ハ三日内ニ趣意書ヲ書記局ニ差出スヘシ

書記ハ速ニ趣意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出ス可キヲ得

第二百四十九條 故障アリタル時ハ對手人ヨリ其判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ故障
ヲ爲ス可キヲ得

附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ
答辨書ヲ差出ス可キヲ得

第二百五十條 豫審終結ノ言渡ハ故障ノ期限内又故障アリタル時ハ其判決アルマテ執
行ヲ停止ス但被告人ヲ拘留シ又ハ保釋責付ヲ取消スノ言渡ハ其執行ヲ停止セス

第二百五十一條 書記ハ故障趣意書答辨書其他訴訟書類ヲ會議局ニ差出ス可シ

第二百五十二條 會議局ニ於テハ第二百三十六條ノ規則ニ從ヒ故障ノ判決ヲ爲スヘシ
豫審判事ノ言渡ヲ認可シタル時ハ其旨ヲ言渡シ若シ其全部又ハ幾分ヲ取消シタル時

ハ全部ニ付キ更ニ言渡ヲ爲スヘシ

又被告人ヲ保釋責付シ又ハ拘留スルノ言渡ヲ爲スヘシ

第二百五十三條 會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ判事一名ヲシテ更ニ豫審ヲ爲シ又

ハ其指示スル所ノ條件ニ付キ更ニ取調ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ

第二百五十四條 會議局ニ於テ故障ノ取調中管轄越權又ハ公訴受理ス可カラサルト

テ發見シタル時ハ職權ヲ以テ豫審判事ノ言渡ヲ取消スヘシ

第二百五十五條 會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ起訴ヲ受ケサル者アルト附帶ノ犯

罪ニ付キ豫審ヲ受ケサル者アルトテ發見シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以

テ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ

檢事ハ意見書ヲ差出ス可シ

會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト共ニ之ヲ判決ス可シ

第二百五十六條 故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ

被告人ニ送達ス可シ

第二百五十七條 檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言渡ニ對シ上告ヲ爲スヘシ

第二百五十八條 被告人ニ送達ス可キ言渡書ニハ其言渡ニ對シ上訴スルヲ得ヘキト及

ヒ其期限ヲ記載ス可シ其記載ナキ時ハ規則ニ從ヒ更ニ言渡書ノ送達アルマテ被告人

上訴ノ權ヲ失フヘシ

第二百五十九條 第三百十一條ヨリ第三百十三條マテノ規則ハ豫審ノ上訴ニ付テモ亦

之ヲ適用ス

第二百六十條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事其言渡書ニ一切ノ書類ヲ

添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致ス可シ

檢事長ハ一切ノ書類證據物件及ヒ被告人ヲ重罪裁判所ニ移スノ處分ヲ檢事ニ命ス可

シ

重罪裁判所以外ノ裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事速ニ其執行ヲ爲ス可シ

第二百六十一條 豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其言渡確定シタル時ハ罪名ノ變

更アルモ同一ノ事件ニ付キ更ニ訴ヲ受クルコトナカルヘシ但新ナル証憑アル時ハ此

限ニ在ラス

新ナル証憑アル時ハ檢事ヨリ之ヲ會議局ニ差出シ會議局ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キ

ヤ否ヲ判決スヘシ

第四編 公判

第一章 通則

第三百六十二條 訴訟事件ハ書記局ノ簿冊ニ登記シタル順序ニ從ヒ之ヲ公判ニ付ス可

裁判所長ハ未決拘留ノ日數ヲ減縮スル爲メ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヲ得
又重要ナル事由ノ爲メ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時モ亦順序ヲ變更スル
ヲ得

第二百六十三條 重罪輕罪違警罪ノ訊問辨論及ヒ裁判言渡ハ之ヲ公行ス否ヲサル時ハ
其言渡ノ効ナカルヘシ

第二百六十四條 被告事件公安ヲ害シ又ハ猥褻ニ涉リ風俗ヲ害スルノ恐アル時ハ裁判
所ニ於テ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訊問及ヒ辨論ノ傍聽ヲ禁スルヲ得
其裁判言渡ヲ爲スニ當テハ傍聽ヲ許スヘシ

第二百六十五條 被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルヲナシ但守卒ヲ置クヲアル
ヘシ

禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病アルニ非スシテ出廷ヲ肯セサル時ハ之ヲ引致ス
ルヲ得若シ出廷シテ辨論スルヲ肯セサル時ハ對審トシテ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十六條 被告人ハ辨論ノ爲メ辨護人ヲ用フルヲ得

辨護人ハ裁判所々屬ノ代官中ヨリ之ヲ選任ス可シ但裁判所ノ允許ヲ得タル片ハ代
言人ニ非サル者ト雖モ辨護人ト爲スヲ得

第二百六十七條 被告人公廷ニ於テ暴行又ハ喧噪ヲ爲シ辨論ヲ妨礙スル時ハ裁判長ヨ
リ再度告戒ヲ爲シ仍ホ之ニ從ハサル時ハ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ被告人
ヲ退廷セシメ若クハ拘留スルヲ得

前項ノ場合ニ於テハ對審トシテ引續キ辨論及ヒ裁判言渡ヲ爲スヲ得若シ辨論二日
ニ渉ル時ハ更ニ被告人ヲ出廷セシムヘシ

第二百六十八條 被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出廷スルヲ能ハサル時ハ痊癒ニ至ル
マテ辨論ヲ停止ス

辨論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタル時ハ其痊癒ノ後新ニ辨論ヲ爲スヘシ其他
ノ疾病ニ罹ル時ハ痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ヲ爲スヘシ但五日間辨論
ヲ停止シ又ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時ハ新ニ辨論ヲ爲ス可シ

若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辨論ヲ終リタル時ハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ
爲スヲ得裁判言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十九條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人公判ノ日時ニ出廷セスト雖モ豫審終
結シ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達シタルノ證アリニ非サレハ闕席裁判ヲ爲ス可カ
ラス

豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達スルヲ能ハサル場合ニ於テハ裁判所ニテ

猶豫ノ期限ヲ定メ其期限内ニ被告人出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可キノ告知書ヲ親屬若シハ戸長ニ送達ス可シ

第二百七十條 闕席シタル被告人ニ付テハ辯護人ヲ用フルコトヲ許サス

但其親屬故舊ハ被告人ノ出廷スルコト能ハサルノ事由ヲ証明スルコトヲ得

裁判所ニ於テ其事由ヲ正當ナリトスル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判ヲ延期スルコトヲ得

第二百七十一條 被告人中ノ一名又ハ數名出廷セスト雖モ出廷シタル者ニ付テハ通常ノ規則ニ從ヒ對審裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十二條 裁判長ハ公廷ニ於テ諸般ノ取締ノ爲メ相當ノ處置ヲ爲ス可シ

稱讚誹謗其他辯論ヲ妨礙スル者アル時ハ之ヲ制止シ又ハ退廷セシムルコトヲ得

第二百七十三條 公廷ニ於テ輕罪違警罪ヲ犯シタル者アル時ハ其身分ノ如何ニ拘ハラ

ス裁判長ノ命令ニ因リ之ヲ取押ヘ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ裁判ヲ爲シ又ハ次ノ公判ニ付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

書記ハ犯罪ノ事件及ヒ裁判長ノ處分ニ付キ即時ニ調書ヲ作ル可シ

第二百七十四條 前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲

シ輕罪ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲ス可シ

輕罪裁判所其他上等ノ裁判所ニテハ輕罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲スヘシ

第二百七十五條 公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告人及ヒ證人ヲ訊問

シ調書ヲ作リ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スル爲メ豫審

判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲スヘシ

第二百七十六條 裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可ラス但辯論ニ

因リ發見シタル附帶ノ事件及ヒ公廷内ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス

若シ附帶ノ事件ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスル時ハ本案ノ裁判ヲ停止スルコトヲ得

第二百七十七條 檢察官被告人及ヒ民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス本案ノ裁判言渡

ルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ申立ヲ爲スコトヲ得

裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ言渡ヲ爲スコトヲ得

第二百七十八條 裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ本案ノ裁判言渡ヲ待タス

直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百七十九條 檢察官其他訴訟關係人ハ第二百三十七條ニ定メタル原由アル時ハ違

警罪裁判所輕罪裁判所控訴裁判所又ハ重罪裁判所ノ裁判官及ヒ書記ニ對シ忌避ノ申

立ヲ爲スコトヲ得

豫審ヲ爲シタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ始審裁判ヲ爲シタル裁判官其終審裁判ニ

第二百八十條 忌避ノ申立ハ本案ノ裁判言渡ニ至ルマテ何時ニテモ之ヲ爲スヲ得
 忌避ノ申立アリタル時ハ本案ノ辨論ヲ停止ス
 第二百八十一條 忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其判決ヲ爲スニハ第二百三十八條ヨリ第二
 百四十五條マテニ定メタル規則ニ從フ
 第二百八十二條 忌避又ハ回避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ前ニ停止シタルヨリ以後ノ手
 續ニ取掛ル可シ但五日間辨論ヲ停止シタル時ハ新ニ辨論ヲ爲ス可シ
 變災厄難ノ爲メ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同シ
 第二百八十三條 公判ニ於テ用フ可キ證據ハ豫審ニ於テ用フ可キ證據ニ同シ
 第二百八十四條 裁判長ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ豫審中
 管轄官吏ノ作リタル調書及ヒ檢證書類ヲ朗讀セシムルヲ得
 是等ノ書類ハ原被證人ノ陳述ト同一ノ効チ有ス
 第二百八十五條 調書ヲ作リタル司法警察官ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ證人トシテ
 之ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ呼出スヲ得
 豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ其裁判所ノ允許ヲ得
 テ調書說明ノ爲メ之ヲ呼出スヲ得
 第二百八十六條 豫審ニ於テ訊問シタル證人ハ更ニ之ヲ呼出スヲ得

豫審ニ於テ錄取シタル證人ノ陳述書ハ更ニ其證人ヲ呼出サ、ル時證人呼出ヲ受ケ出
 廷セサル時又ハ豫審及ヒ公判ニ於テノ陳述ヲ比較ス可キ時ハ檢察官其他訴訟關係人
 ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルヲ得
 第二百八十七條 第七十八條以下ノ規則ハ公判ノ證人ニモ亦之ヲ適用ス
 第二百八十八條 證人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラヌ又陳述前辯論ニ立會フ可カラヌ
 第二百八十九條 證人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問ス可シ
 一 檢察官ノ請求ニ因リ呼出シタル證人
 二 民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人
 三 被告人及ヒ民事擔當人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人
 第二百九十條 證人數名アル時ハ氏名目錄ノ順序ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ但裁判長ハ證
 人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聽キ其順序ヲ變更スルヲ得
 第二百九十一條 證人及ヒ被告人ハ裁判長ニ非サレハ之ヲ訊問スルヲ得ス
 陪席判事及ヒ檢察官ハ裁判長ニ告テ證人及ヒ被告人ヲ訊問スルヲ得
 訴訟關係人ハ辯論ニ必用ナリトスル條件ヲ分明ナラシムル爲メ證人ヲ訊問ス可キ
 テ裁判長ニ求ムルヲ得
 第二百九十二條 證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料

シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ依リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取
 押ヘ拘引狀ヲ以テ豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ
 其證人ノ陳述ハ書記之ヲ録取シ豫審判事ニ送致ス可シ
 本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ
 本案ノ事件ニ付キ裁判ノ延期ヲ言渡スヲ得

第二百九十三條 證人呼出ニ應セサル時ハ裁判所ニ於テ即時ニ檢察官ノ意見ヲ聽キ左
 ノ科料罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

一 違警罪事件ニ付テハ五拾錢以上壹圓九拾五錢以下ノ科料
 二 輕罪以上ノ事件ニ付テハ貳圓以上拾圓以下ノ罰金

被告人闕席シタル時ハ其呼出シタル證人出廷セスト雖モ科料罰金ヲ言渡ス可カラズ

第二百九十四條 前條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ送達スヘシ

其言渡ヲ受ケタル者三日内ニ出廷スルヲ能ハサリシ正當ノ事由ヲ證明シタル時ハ裁
 判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ科料又ハ罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ但重罪裁判所閉廳
 ノ後ハ其開廳シタル裁判所ニ其申立ヲ爲ス可シ

第二百九十五條 證人呼出ニ應セサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁
 判所ノ職權ヲ以テ公判ヲ延期スルノ言渡ヲ爲スヲ得

檢察官自ラ其請求ヲ爲サ、ル時ハ公判ノ延期ニ付キ意見ヲ陳述スヘシ

第二百九十六條 證人再度ノ呼出ヲ受ケ仍ホ出廷セサル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ前ニ
 定メタル科料罰金ノ二倍及ヒ再度ノ呼出ノ費用ヲ言渡スヘシ此場合ニ於テモ亦前條
 ニ從ヒ再ヒ公判ヲ延期スルヲ得但延期シタル時ハ其證人ニ對シ拘引狀ヲ發ス可シ

第二百九十七條 第九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ新ニ命シタル鑑定人ニモ亦之
 ナ適用ス但呼出ニ應セサル時ハ第二百九十三條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ説明ノ爲メ更ニ之ヲ呼出ス時ハ証人ニ付キ定メタル
 前數條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

第二百九十八條 被告人聾者啞者又ハ國語ニ通セサル者ナル時ハ第二百五十六條第百五
 十七條ノ規則ニ從フ

第二百九十九條 被告人數名アル時ハ裁判長其意見ヲ述ヘ且檢察官其他訴訟關係人ノ
 意見ヲ聽キ訊問ノ順序ヲ定ムヘシ

裁判長ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヲ得

第三百條 証憑調濟ノ後檢察官民事原告人被告人其辨護人及ヒ民事擔當人ハ順次發言
 ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ノ陳述ハ他ヨリ妨礙スルヲ得ス

檢察官其他訴訟關係人ハ迭ヒニ辨論ヲ爲スヲ得但辨論ノ最終ニハ被告人又ハ辨護人ヲシテ發言セシム可シ

第三百一條 檢察官公訴ヲ拋棄スト雖モ裁判所ニ於テハ本案ニ付キ相當ノ裁判ヲ爲ス可シ
第三百二條 辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ之ヲ判決スヘシ但其判決ニ對スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判言渡アリタル後ニ非ザレハ之ヲ爲スヲ得ス

第三百三條 民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス何時ニテモ其訴訟ニ關係スルヲ得又民事原告人ハ民事擔當人ヲシテ其訴訟ニ關係セシムルヲ得

若シ異議ノ申立アリタル時ハ其裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ其判決ニ對シテハ本案ノ裁判言渡ヲ待タズ直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第三百四條 裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示シ且一切ノ証憑ヲ明示ス可シ
免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦同シ

第三百五條 無罪ノ言渡ヲ爲スニハ其理由トシテ被告人ニ對シ犯罪ノ証憑ナキヲ明示ス可シ

第三百六條 裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判ト同時ニ私訴ノ裁判言渡ヲ爲ス可シ
私訴ニ付キ取調未タ充分ナラサル時ハ公訴ノ裁判アリタル後其裁判言渡ヲ爲スヲ得

第三百七條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴裁判費用ノ全部又ハ幾分ヲ擔當ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官ニテ之ヲ擔當ス可シ
私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴シタル者之ヲ擔當ス可シ

第三百八條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否トヲ問ハス沒収ニ係ラサル差押物品ハ所有主ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百九條 本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ期限内又上訴アリタル時ハ其判決アルマテ裁判執行ヲ停止ス

第三百十條 禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡シタル時ハ現ニ捕ニ就クニ非ザレハ上訴ヲ爲スヲ得ス

第三百十一條 拘留ヲ受ケタル者上訴ヲ爲シ又ハ保釋ヲ求ムル時ハ其申立書ヲ監獄長ニ差出シ監獄長ヨリ之ヲ其裁判所ノ書記ニ差出スヘシ

第三百十二條 訴訟關係人又ハ其代人非常ノ變災厄難ニ因リ上訴期限ヲ經過シタル場

合ニ於テ其旨ヲ證明シタル時ハ期限ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルコトヲ得但變災厄難ヲ免カレタルニヨリ通常ノ期限内ニ其證據ヲ申立書ニ添ヘ上訴ヲ爲スヘシ
第三百十三條 書記ハ速ニ前條ノ申立書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

上訴ヲ判決ス可キ裁判所ニ於テハ會議局ニテ檢察官ノ意見ヲ聽キ先ツ其上訴ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

上訴ヲ受理スヘキ者ト判決シタル時ハ書記ヲシテ其旨ヲ訴訟關係人ニ通知セシメ通常ノ規則ニ從ヒ本案ノ裁判ヲ爲ス可シ

上訴ヲ受理ス可カラサル者ト判決シタル時ハ他ノ原由アルニ非サレハ即時ニ裁判執行ヲ爲サシム可シ

第三百十四條 裁判言渡ハ辯論ヲ終リタル後公廷ニ於テ即時ニ之ヲ爲シ又ハ次日ニ之ヲ爲ス可シ

裁判言渡書ハ其言渡前裁判官之ヲ作り書記ト共ニ署名捺印ス可シ裁判言渡書ニハ其言渡ヲ爲シタル裁判所年月日其事件ニ干預シタル檢察官ノ氏名ヲ記載ス可シ

第三百十五條 訴訟關係人ハ其費用ヲ以裁判言渡書ノ原本又ハ其拔書ヲ求めルコトヲ得但上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタル時ハ書記ヨリ二十四時内ニ之ヲ下付ス可シ

第三百十六條 對審裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ裁判長ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ請求及ヒ其言渡ニ對シ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得可キコト及ヒ其期限ヲ告知シ又闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得可キコト及ヒ其期限ヲ言渡書ニ記載ス可シ
若シ其告知又ハ記載ナキ時ハ通常ノ規則ニ從ヒ其告知アルマテ上訴期限ノ經過ヲ停止ス

第三百十七條 書記ハ各事件ニ付キ各別ニ公判始末書ヲ作り左ノ條件其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ

一 裁判ヲ公行シタルコト又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡アリタルコト及ヒ其事由

二 被告人ノ訊問及ヒ其陳述

三 證人鑑定人ノ陳述及ヒ宣誓ヲ爲シタルコト若シ宣誓ヲ爲サレ時ハ其事由

四 原被ノ證據物件

五 辯論中異議ノ申立アリタルコト後日ヲ期シテ申立ツ可キ事件ヲ申立タルコト是等ノ

事件ニ付キ檢察官其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ判決

六 辯論ノ順序及ヒ被告人ヲシテ最終ニ發言セシメタル事

第三百十八條 公判始末書ニハ前條ニ記載シタル條件ノ外言渡ヲ爲シタル裁判所年月

日裁判長陪席判事檢察官及ヒ書記ノ氏名ヲ記載ス可シ
辯論數日ニ渉ル時ハ其旨及ヒ同一ノ裁判官出席シタルコトヲ記載ス可シ
辯論中豫備判事ヲシテ代ラシメタル時ハ其旨ヲ記載ス可シ檢察官及ヒ書記ニ付テモ
亦同シ

第三百十九條 公判始末書ハ裁判言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整頓シ裁判長及ヒ書記署名捺
印ス可シ

裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意見アル時ハ其紙尾ニ記載
ス可シ

第三百二十條 裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ正本ハ其裁判所ノ書記局ニ保存ス可シ
上訴アリタル時ハ裁判長及ヒ書記裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ謄本ニ認印シ之ヲ上
訴書類ニ添フ可シ

第二章 違警罪公判

第三百二十一條 違警罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

- 一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀
 - 二 豫審判事又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡
- 第三百二十二條 呼出狀ニハ呼出ヲ受クヘキ者ノ氏名職業住所出廷ノ日時被告事件及

ヒ代人ヲシテ出廷セシムルコトヲ得可キ旨ヲ記載ス可シ若シ被告事件ノ記載ナキ場合
ニ於テ被告人未ク其證人ヲ呼出サレタル時ハ公廷ニテ其事件ノ告知ヲ受ケタル後其呼
出及ヒ辨護ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムルコトヲ得

第三百二十三條 呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

第三百二十四條 違警罪裁判官ハ被告事件急速ヲ要スル時ハ公判ニ取掛ル前檢察官其
他訴訟關係人ノ請求ニ依リ又ハ職權ヲ以テ對手人ノ立會ヲ要セシメテ檢証處分ヲ爲
スコトヲ得

第三百二十五條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之
ヲ呼出ス可シ

又呼出ヲ受ケヌシテ出廷シタル者ト雖モ訊問前其名刺ヲ書記ニ差出シタル時ハ裁判
所ニ於テ證人トシテ其陳述ヲ聽クコトヲ得

第三百二十六條 書記ハ各事件毎ニ訴訟關係人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ若シ其呼立ニ應セ
サル時ハ他ノ事件ノ裁判ヲ終リタル後其事件ヲ裁判ス可シ

第三百二十七條 違警罪裁判官ハ最初ニ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ
官吏ノ作リタル調書又ハ申立書アル時ハ書記之ヲ朗讀ス可シ
檢察官ハ被告事件ヲ陳述ス可シ

第三百二十八條 違警罪裁判官ハ被告人ニ被告事件ヲ承認スルヤ否ヲ訊問ス可シ

若シ被告人代人ヲ以テ白狀ヲ爲ス時ハ其署名捺印シタル書面ヲ差出ス可シ

第三百二十九條 被告人ノ白狀アリタル時ハ他ノ証憑ヲ差出スニ及ハス

但裁判所ニ於テハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ差出サシムルイテ得

若シ白狀ナキ時ハ原被ノ證人ヲ訊問シ其他証憑アル時ハ之ヲ差出ス可シ

第三百三十條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被害事件ヲ證明シ及ヒ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

被告人民事擔當人又ハ其代人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第三百三十一條 呼出テ受ケタル被告人民事擔當人又ハ其代人出廷セサル時ハ警察官

及ヒ民事原告人ノ請求スル所ヲ聽キ闕席裁判ヲ爲ス可シ

民事原告人出廷セサル時亦同シ

第三百三十二條 闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ依リ闕席シタル者

又ハ其住所ニ之ヲ送達ス可シ

闕席裁判ヲ受ケタル者故障ヲ爲サントスル時ハ言渡書ノ送達アリタルヨリ三日内ニ

其中立書ヲ書記局ニ差出ス可シ

第三百三十三條 裁判所ニ於テハ先ツ故障ノ申立ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ若シ

受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヨリ故障アリタルト及ヒ其事件ヲ公判ニ付ス可

キ日時ヲ故障ノ對手人ニ通知スル爲メ呼出狀ヲ送達スヘシ但其送達ト出廷トノ間少

クトモ二日ノ猶豫アル可シ

又公判ニ付ス可キ日時ヲ其前日ニ故障ノ申立人ニ報知ス可シ

第三百三十四條 故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ第三百二十六條ヨリ第三百三

十條迄ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

其裁判ニ闕席シタル者ハ故障ヲ爲ス可キヲ得ス

第三百三十五條 犯罪ノ証憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第三百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十六條 被告事件違警罪ニシテ且証憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲

ス可シ

第三百三十七條 被告事件重罪又ハ輕罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其事件ヲ輕罪裁

判所檢事ニ送致ス可シ但被告人ニ對シ拘留狀ヲ發スルイテ得

第三百三十八條 違警罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ニ控

訴スルイテ得

一 被告人ハ拘留ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時
 二 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上治安裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時
 三 檢察官其他訴訟關係人ハ上ニ記載シタル原因アラサル時ト雖モ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時
 第三百三十九條 控訴ヲ爲サントスル者ハ原裁判所ノ書記局ニ其申立書ヲ差出ス可シ但其申立ノ期限ハ對審裁判ニ付テハ言渡ヨリ三日内又闕席裁判ニ付キ故障アラサル時ハ本人又ハ其住所ニ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス
 控訴ヲ爲スノ申立アリタル時ハ書記ヨリ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ
 第三百四十條 訴訟ニ關スル一切ノ書類ハ檢察官ヨリ控訴ヲ受リ可キ裁判所ノ書記局ニ之ヲ送達ス可シ
 若シ檢察官控訴ノ申立人又ハ對手人ナル時ハ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ檢察官ニ其意見書ヲ差出ス可シ
 第三百四十一條 控訴ヲ受ク可キ裁判所ニ於テハ書記局ヨリ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シタル後其裁判ニ取掛ル可シ
 呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

証人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ
 第三百四十二條 控訴ノ對手人ハ其裁判言渡アルマテ何時ニテモ附帶ノ控訴ヲ爲ス可シ得但附帶ノ控訴ハ公廷ニ於テ直チニ之ヲ申立ルイテ得
 第三百四十三條 控訴ニ係ル事件ハ輕罪ノ裁判ヲ爲スニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判ス可シ
 檢察官其他訴訟關係人ハ裁判長ノ允許ヲ得ルニ非サレハ新ナル證人又ハ始審ニ於テ陳述シタル証人ヲ呼出ス可シ得ス
 第三百四十四條 控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ原裁判言渡ヲ認可スルノ言渡ヲ爲シ又ハ之ヲ取消シ更ニ裁判言渡ヲ爲ス可シ
 被告人ノニ控訴ヲ爲シタル時ハ原裁判言渡ヨリ重キ刑ヲ言渡ス可シ得ス
 私訴ニ付テノ控訴ノ裁判ハ通常民事ノ規則ニ從フ
 第三百四十五條 第三百三十一條以下ノ規則ハ控訴ノ闕席裁判ニ付テモ亦之ヲ適用ス
 第三百四十六條 檢察官其他訴訟關係人ハ違警罪事件ノ終審ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲ス可シ得
 第三章 輕罪公判

第三百四十七條 輕罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

- 一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀
 - 二 豫審判事輕罪裁判所會議局又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡
- 第三百四十八條 呼出狀ニ付テハ第三百二十二條第三百二十三條ノ規則ニ從フ
- 第三百四十九條 被告事件罰金ノ刑ニ該ル可キ時ハ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得可キ旨ヲ呼出狀ニ記載ス可シ

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得

第三百五十條 証人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百五十一條 第三百二十四條ノ規則ハ豫審ヲ經サル輕罪事件ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十二條 檢察官ハ裁判長ヨリ被告人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地ヲ問ヒタル後被告事件ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被害事件ヲ證明ス可シ

調書又ハ申立書アル時ハ書記ヲシテ之ヲ朗讀セシメ次ニ原被證人ノ陳述ヲ聽キ且證據物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第三百五十三條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ其意見ヲ陳述スヘシ

民事原告人ハ要領ニ付其意見ヲ陳述スヘシ

被告人及ヒ民事擔當人ハ更ニ答辯ヲ爲スヲ得

第三百五十四條 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ第二百六十九條ノ規則ニ從ヒ闕席裁判ヲ爲スコヲ得ヘキ被告人其呼出ノ日時ニ出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可シ

第三百五十五條 闕席裁判ニ關スル第三百三十一條ヨリ第三百三十四條マテノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十六條 闕席裁判ニ因リ禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ左ノ場合ヲ除ク

ノ外刑ノ期滿免除ニ至ルマテ故障ヲ爲スコヲ得

一 被告人本案ノ裁判前豫メ裁判ス可キ事件ヲ申立タル時

二 裁判言渡書ヲ本人ニ送達シタル時

三 被告人裁判執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルヲ知リタル證アル時

第一ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ第二第三ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヲ知リタルヨリ三日内ニ故障ヲ爲スコヲ得

第三百五十七條 裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ新ナル證人ヲ呼出シ鑑定人ヲ命シ若クハ臨檢ヲ爲

ス一ヲ得但是等ノ處分ヲ爲スニ付テハ第三編第三章ニ定メタル規則ニ從フ
又豫審ヲ經サル事件ニ付テハ豫審判事ヲシテ其指示スル所ノ條件ニ付キ取調ヲ爲シ
且其報告書ヲ差出サシムルヲ得

第三百五十八條 犯罪ノ証憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ
又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

本條ノ場合ニ於テ被告人拘留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百五十九條 被告事件違警罪ナル時ハ終審ノ裁判言渡ヲ爲シ且被告人拘留ヲ受ケ
タル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十條 被告事件重罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ若シ豫審ヲ經サル時ハ豫審
判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ但被告人拘留ヲ受ケタル時ハ拘引狀ヲ發ス可シ

訴訟書類及ヒ証據物件ハ檢察官ヨリ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第三百六十一條 被告事件豫審ヲ經タル時ハ之ヲ其裁判所ノ會議局ニ送付スルノ言渡
ヲ爲ス可シ

會議局ニ於テハ第二百五十三條第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ爲シ被告人ヲ管
轄裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十二條 會議局ノ言渡ニ因リ事件ヲ受理シタル場合ニ於テ新ナル證憑ヲ發見

スルヲナクシテ其事件ヲ重罪ナリトスル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ

檢事ハ大審院ニ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ

第三百六十三條 前二條ノ場合ニ於テハ會議局又ハ大審院ノ判決アルマテ檢察官ノ請
求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ被告人ヲ其裁判所ノ監倉ニ留置スルノ言渡ヲ爲ス
可シ

又第二百十條以下ノ規則ニ從ヒ保釋ニ付キ判決ヲ爲ス可シ

第三百六十四條 被告事件輕罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス
可シ

被告人禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ當然保釋責付ヲ取消シタル者トス但上訴中更
ニ保釋ヲ求ムルヲ得

第三百六十五條 檢察官其他訴訟關係人ハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ノ裁判言渡ニ對
シ控訴裁判所ニ控訴スルヲ得

- 一 檢察官ハ無罪免訴又ハ刑ノ言渡アリタル時但違警罪事件トシテ言渡アリタル場
合ニ於テハ其事件ヲ輕罪ナリトスル時
- 二 被告人ハ違警罪ニ付テノ言渡ヲ除ク外刑ノ言渡ヲ受ケタル時
- 三 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上始審裁判所ノ終審

ノ金額ヲ超過シタル時

四 檢察官其他訴訟關係人ハ管轄逾越權擬律ノ錯誤又ハ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百六十六條 控訴ハ裁判言渡アリタルヨリ五日以内ニ之ヲ爲ス可キ得

闕席裁判ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴ヲ爲ス可キ得但第三百五十六條ノ場合ニ於テハ五日以内ニ之ヲ爲ス可シ

第三百六十七條 公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴アリタル場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ檢察官ヨリ之ヲ控訴裁判所ノ監倉ニ移ス可シ

第三百六十八條 第三百三十九條ヨリ第三百四十二條マテ及ヒ第三百四十四條ノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百六十九條 輕罪裁判所檢事ノ控訴又ハ檢事長ノ附帶ノ控訴アリタル場合ニ於テ被告事件ヲ重罪ナリトスル時ハ第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ會議局ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百七十條 控訴ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付テハ始審ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付キ定メタル規則ニ從フ

第三百七十一條 檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判所ノ終審ノ對審裁判言渡及ヒ控訴

裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲ス可キ得

第四章 重罪公判

第三百七十二條 重罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一 豫審判事又ハ輕罪裁判所會議局ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

二 控訴裁判所又ハ大審院ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百七十三條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ左ノ區別ニ從ヒ公訴狀ヲ作ル可シ

控訴裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作ル可シ

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作り又ハ重罪裁判所檢察官ノ職務ヲ行フ可キ檢事ヲシテ之ヲ作ラシム可シ

第三百七十四條 公訴狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一 被告事件ノ始末及ヒ加重減輕ノ標

二 被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地

三 豫審ニ於テ集取シタル原被ノ證據

四 罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡ノ概略

第三百七十五條 公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ記載シタルヨリ以外ノ事件

又ハ被告人ヲ記載ス可カラス

第三百七十六條 重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一ノ被告人ニ對シ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ檢察官ハ各別ニ公訴狀ヲ作リタル上ニテ各別ニ辨論ヲ爲スヲ裁判所長ニ請求スルヲ得

裁判所長ハ同一ノ公訴狀ニ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ其職權ヲ以テ各別ニ辨論ヲ爲サシムルヲ得又數箇公訴狀ニ記載シタル事件ニ付キ同時ニ辨論ヲ爲サシムルヲ得

第三百七十七條 書記ハ被告人出廷ヨリ少クトモ五日前ニ公訴狀ノ謄本ヲ被告人ニ送達スヘシ

被告人數名アル時ハ各別ニ其謄本ヲ送達スヘシ

第三百七十八條 重罪裁判所長又ハ其委任ヲ受ケタル陪席判事ハ公訴狀ノ送達アリタルヨリ二十四時ノ後書記ノ立會ニ依リ被告事件ニ付キ被告人ヲ訊問シ且辯護人ヲ選任シタリヤ否ヲ問フ可シ

若シ辯護人ヲ選任セサル時ハ裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所々屬ノ代官人中ヨリ之ヲ選任スヘシ

被告人及ヒ代官人ヨリ異議ノ申立ナキ時ハ代官人一名ヲシテ被告人數名ノ辯護ヲ爲

サシムルヲ得

辯護人ヲ選任シタルヨリ三日ノ後ニ非サレハ辯論ニ取掛ルヲ得ス

第三百七十九條 辯護人差支アル時若クハ被告人ヨリ之ヲ改選スヘキ正當ノ事由ヲ申立タル時被告人自ラ辯護人ヲ選任スルニ非サレハ前條ノ規則ニ從ヒ裁判所長ヨリ之ヲ選任ス可シ但辯護人ヲ改選シタル時ハ三日間辯論ヲ停止スヘシ

第三百八十條 書記ハ第三百七十八條ノ場合ニ於テ訊問ノ調書ヲ作り辯護人ヲ選任スルニ付其式ヲ履行シタルヲ記載ス可シ

辯論中辯護人ヲ改選シ及ヒ辯論ヲ停止シタル時ハ公判始末書ニ其旨ヲ記載ス可シ

第三百八十一條 辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ効ナカル可シ

第三百七十七條ヨリ第三百七十九條マテノ規則ニ背キタルヲアリト雖モ辯論ニ取掛ル前ニ非サレハ被告人ヨリ異議ノ申立ヲ爲スヲ得ス

第三百八十二條 辯護人ハ第三百七十八條ノ處分アリタル後被告人ト接見スルヲ得又書記局ニ於テ一切ノ訴訟書類ヲ閱讀シ且之ヲ抄寫スルヲ得
辯護人ヲ除クノ外何人ト雖モ重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルヨリ裁判言渡アルマテ被告人ト接見スルヲ得ス但被告人現ニ拘留ヲ受クル地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

第三百八十三條 檢察官及ヒ民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ開廷ヨリ一日前之ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ同上ノ期限内ニ書記ヨリ之ヲ檢察官ニ送致シ民事ニ付キ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ之ヲ民事原告人ニ送達ス可シ

第三百八十四條 前條ノ規則ニ從ヒ豫メ氏名ヲ通知セサル證人ノ陳述ハ事實參考ノ爲メニ非サレハ之ヲ聽クコトヲ得ス但對手人ヨリ異議ナキコトヲ申立タル時ハ證人トシテ其陳述ヲ聽クコトヲ得

第三百八十五條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百八十六條 裁判長ハ開庭ノ日ニ當リ公廷ニ於テ陪席判事檢察官ノ面前ニテ開庭ス可キコトヲ陳述スヘシ但被告人ヲ呼出ス可カラス

第三百八十七條 裁判長辯論二日以上ニ渉ルヘシト思料シタル時ハ重罪裁判所々在ノ地ノ裁判所判事一名ヲ以テ豫備陪席判事ト爲スコトヲ得

第三百八十八條 裁判官檢察官及ヒ書記各其席ニ就キタル後即時ニ訊問及ヒ辯論ニ取掛ル可シ

裁判長ハ先ツ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フヘシ若シ其答辭ト豫審

中ノ陳述ト齟齬アリト雖モ公訴狀ニ記載シタル被告人ニ相違ナキ時ハ引續キ辯論ヲ爲ス可シ

第三百八十九條 書記ハ呼出シタル證人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ

其呼立ニ應シタル證人ハ扣席ニ退カンメ陳述ヲ爲スニ當リ順次ニ之ヲ呼入ル可シ

第三百九十條 裁判長ハ書記ヲシテ公訴狀ヲ朗讀セシムルニ付キ注意シテ聽ク可キコトヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十一條 裁判長ハ書記前條ノ朗讀ヲ終リタル後被告人ヲ訊問ス可シ

被告人豫審中ニ白狀シタル事件ヲ確認セス又ハ之ヲ取消サントスル時ハ其事由ヲ辯明セシム可シ

被告ノ白狀アリト雖モ仍ホ其取調ヲ爲サ、ル可カラス

第三百九十二條 裁判長ハ前條ノ訊問ヲ終リタル後證憑ヲ差出スニ從ヒ其證憑ニ付キ辯解ヲ爲シ且自己ノ利益ト爲ル可キ反證ヲ差出スヲ得可キコトヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十三條 裁判長ハ原告證人陳述ヲ終リタル毎ニ被告人ニ意見アリヤ否ヲ問フ可シ

第三百九十四條 證人ハ陳述ヲ爲シタル後其扣席ニ留ル可シ但裁判長ヨリ退廷ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

陪席判事檢察官被告人及ヒ民事原告人ハ更ニ証人ヲ訊問スルコト又證人ヲシテ他ノ證

人ト對質セシムルヲ請求スルヲ得

裁判長ハ職權ヲ以テ前項ノ處分ヲ爲スヲ得

第三百九十五條

裁判長ハ證人愛憎畏懼ノ念ヲ生シ被告人ノ面前ニ於テ充分ナル陳述ヲ爲スヲ得サル可シト思料シタル時ハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其證人ノ陳述中被告人ヲ退席セシムルヲ得

裁判長ハ証人陳述ヲ終リタル後再ヒ被告人ヲ公廷ニ呼入レ其陳述シタル條件ヲ告知シ且被告人ニ意見アル時ハ之ヲ申立シム可シ

第三百九十六條

裁判長ハ第三百條ニ定メタル手續ノ終リタル後公訴ニ付キ辯論ノ終結シタルヲ言渡ス可シ

第三百九十七條

檢察官及ヒ被告人ハ辯論中ニ發見シタル條件ニ付キ豫審ヲ求ムルヲ得裁判所ニ於テ其請求ヲ認可シタル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシム可シ

第三百五十七條第一項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第三百九十八條

辯論終結ノ言渡アリタル時ハ檢察官法律適用ノ爲メ其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ辯護人ハ檢察官ノ意見其當ヲ得サルヲ辯論スルヲ得

第三百九十九條

前條ノ辯論ヲ終リタル後民事原告人ハ私訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ被告人辯護人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲スヲ得

檢察官ハ私訴ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

裁判所ニ於テハ私訴ノ辯論ヲ延期スルヲ得但閉廳前之ヲ判決ス可シ

第四百條

被告事件重罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲スヘシ又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

第四百一條

犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ無罪ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ又原被ノ要償ニ付キ第三百九十九條ノ規則ニ從ヒ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百二條

辯論中公訴狀ニ記載シタル事件ニ附帶セサル他ノ重罪輕罪ヲ發見シタル場合ニ於テ檢察官ノ請求アル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲サシメ本會又ハ次會ニ於テ本案ノ事件ト共ニ之ヲ裁判ス可シ

第四百三條

檢察官其他訴訟關係人ハ重罪裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得

第四百四條

闕席裁判ヲ爲スニハ裁判長書記ヲシテ公訴狀及ヒ必要ナリトスル豫審書類ヲ朗讀セシメ又原被證人ノ陳述ヲ聽クヘシ

檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述シ民事原告人ハ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事擔當人ハ答辯スルヲ得

第四百五條 闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ本人又ハ其住所ニ送達ス可シ

第四百六條 闕席裁判ニ係ル刑ノ言渡ニ對シテハ檢察官ニ非サレハ上告ヲ爲スヲ得ス

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ノ裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得

第四百七條 闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スヲ得但捕ニ就キタル時ハ十日内ニ故障ヲナス可シ

第四百八條 故障ノ申立ハ闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ之ヲ爲ス可シ
重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ
其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

第四百九條 闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲スヘシ
控訴裁判所ニ於テ其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ重罪裁判所ノ裁判ヲ受ケ可キノ言渡ヲ爲ス可シ

第五編 大審院ノ職務

第一章 上告

第四百十條 檢察官及ヒ被告人ハ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ左ノ場合ニ於テ上告ヲ爲スヲ得

- 一 法律ニ背キ忌避ノ申立ヲ認可セサル時
- 二 裁判所ノ構成規則ニ背キタル時
- 三 法律ニ背キ管轄違又ハ管轄ナリトノ言渡若クハ管轄ニ非サル裁判所ニ事件ヲ移スノ言渡アリタル時
- 四 法律ニ於テ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時又ハ無効ノ記載ナキ規則ニ背キタルニ因リ異議ノ申立アリタル場合ニ於テ之ヲ認可セサル時
- 五 法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサル時
- 六 法律ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カサル時
- 七 裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サヌ又ハ職權ヲ以テ判決スルヲ得ヘキ場合ヲ除クノ外請求ヲ受ケサル事件ニ付キ判決ヲ爲シタル時
- 八 裁判言渡ヲ公行セス又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡ナクシテ訊問及ヒ辯論ヲ公行セサル時

九 事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ付セス又ハ其理由ノ齟齬アル時

十 擬律ノ錯誤アル時

十一 越權ノ處分アル時

第四百十一條 免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被告人ノ利益ノ爲メ定メタル規則ニ背キタルト又ハ犯罪ノ場所ニ因リ管轄違アリト雖モ上告ヲ爲スコト得ス

第四百十二條 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ニ關スル豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ第四百十條ニ定メタル理由ニ付キ上告ヲ爲スコト得

第四百十三條 上告ノ對手人ハ大審院ノ判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ上告ヲ爲スコト得

大審院檢事長モ亦附帶ノ上告ヲ爲スコト得

第四百十四條 上告ノ期限ハ三日ナリトス但豫審ニ付テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ起算シ公判ニ付テハ言渡アリタルヨリ起算ス

第四百十五條 豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上告アリタル時ハ拘留保釋責付釋放及ヒ放免ノ言渡ヲ除クノ外其執行ヲ停止ス

第四百十六條 上告ヲ爲サントスル者ハ其申立書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ
上告ノ申立書ハ其申立アリタルヨリ二十四時内ニ書記ヨリ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十七條 上告申立人ハ其申立ヲ爲シタルヨリ五日内ニ趣意書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

第四百十八條 對手人ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ五日内ニ答辯書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ其答辯書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ上告申立人ニ送達ス可シ

第四百十九條 檢察官ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ハ二通ヲ作リ一通ヲ大審院ニ差出シ一通ヲ對手人ニ送達ス可シ

私訴ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ニ付テモ亦同シ

第四百二十條 書記ハ前數條ニ定メタル期限經過シタル後速ニ訴訟書類及ヒ上告書類ヲ其裁判所ノ檢察官ニ差出ス可シ

檢察官ハ其書類ヲ五日内ニ大審院檢事長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ添フ可シ
檢事長ハ上告事件ヲ刑事局ノ簿冊ニ登記ス可キコト院長ニ請求ス可シ

第四百二十一條 上告申立人及ヒ對手人ハ代理人ヲ差出スコト得
重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢察官ヨリ重罪ノ刑ニ該ル可キ者トシ

テ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ代言人ヲ選任セサル時ハ院長ノ職權ヲ以テ其院所屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

第四百二十二條 院長ハ刑事局判事ニテ專任判事一名ヲ命ス可シ專任判事ハ一切ノ書類ヲ檢閲シ其報告書ヲ作ル可シ但自己ノ意見ヲ付ス可カラズ

第四百二十三條 上告申立人及ヒ對手人ハ專任判事ノ報告書ヲ差出スマテハ大審院書記局ヲ經由シテ其趣意ヲ擴張ス可キ辯明書ヲ差出ストナ得

第四百二十四條 書記ハ開廷ヨリ三日前ニ開廷ノ日時ヲ上告申立人及ヒ對手人ノ代言人ニ報知ス可シ

第四百二十五條 開廷ノ日ニハ公廷ニ於テ專任判事其報告書ヲ朗讀ス可シ
檢事長及ヒ代言人ハ各其趣意ヲ辯明ス可シ

第四百二十六條 上告申立人又ハ對手人ヨリ代言人ヲ差出サ、ル時ハ其儘ニテ判決ヲ爲ス可シ

第四百二十七條 大審院ニ於テ上告ノ理由ナシトスル時ハ之ヲ棄却スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第四百二十八條 大審院ニ於テ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對スル上告ニ付キ破毀ノ理由アリトスル時ハ其言渡ノ全部ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ但後ノ數條ニ記載シタル場合ハ此限ニ在ラズ

第四百二十九條 擬律ノ錯誤若クハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサルトニ因リ原裁判言渡ヲ破毀シタル時ハ其事件ヲ移ストナシ大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十條 豫審又ハ公判ノ手續規則ニ背キタルトアリト雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ボサ、ル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ストナク止タ其手續ヲ破毀ス可シ

第四百三十一條 豫審又ハ公判ノ言渡ノ幾分ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係アラサル時ハ大審院ニ於テ其上告ニ係ル部分ヲ破毀シ法律ニ從ヒ直チニ相當ノ裁判言渡ヲ爲シ又ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス可シ

第四百三十二條 大審院ニ於テ原裁判言渡ヲ破毀シ直チニ裁判言渡ヲ爲シタル時ハ原裁判所又ハ他ノ裁判所ヲシテ其執行ヲ爲サシム可シ

第四百三十三條 大審院ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可キ時ハ原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ定示ス可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ民事裁判所ニ移ス可シ

第四百三十四條 法律ニ係ル大審院ノ判決ハ確定ノ者トス

大審院ヨリ送付ヲ受ケタル裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ上告ヲ爲スコトヲ得

第四百三十五條 法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル場合ニ於テ定期内ニ上訴スル者ナクシテ其裁判言渡確定シタル時ハ大審院檢事長ヨリ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ非常上告ヲ爲スコトヲ得非常上告アリタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ大審院ニ於テ直ニ裁判言渡ヲ爲スコトヲ得

第四百三十六條 左ノ場合ニ於テハ大審院ノ裁判言渡ニ對シ檢事長其他訴訟關係人ヨリ其院ニ哀訴スルコトヲ得

- 一 大審院ニ於テ前數條ニ定メタル式ヲ履行セサル時
- 二 訴訟關係人ヨリ申立タル條件ニ付キ判決ヲ爲サ、ル時
- 三 同一ノ裁判言渡ニ付キ二箇ノ條件齟齬シタル時

第四百三十七條 哀訴ヲ爲サントスル者ハ裁判言渡アリタルヨリ三日内ニ書記局ニ其申立ヲ爲スコトヲ得
書記ハ申立書ヲ受取リタルヨリ三日内ニ之ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ同一ノ期限内ニ其答辯書ヲ差出スコトヲ得

大審院ニ於テハ通常上告ノ規則ニ從ヒ哀訴ノ判決ヲ爲スコトヲ得

第四百三十八條 大審院ノ裁判言渡ハ其言渡アリタルヨリ三日間又哀訴アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス

第二章 再審ノ訴

第四百三十九條 再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ爲スコトヲ得但裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

- 一 人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタル後其言渡ノ日ニ當リ殺サレタリト認メラレシ者現ニ生存シ又ハ犯罪前既ニ死去シタルノ確證アリタル時
- 二 同一ノ事件ニ付キ共犯ニ非スニテ別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時
- 三 犯罪アル以前ニ作リタル公正ノ証書ヲ以テ當時其場所ニ在ラサルコトヲ證明シタル時

四 被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時

五 公正ノ証書ヲ以テ訴訟書類ニ偽造又ハ錯誤アルコトヲ證明シタル時

第四百四十條 再審ノ訴ヲ爲スコトヲ得可キ者左ノ如シ

- 一 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官
- 二 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢事長

三 大審院檢察長但司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲ス可シ
 四 刑ノ言渡ヲ受ケタル者
 五 刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬

第四百四十一條 再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラズ何時ニテモ之ヲ爲ス可シ得
 第四百四十二條 再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ原裁判言渡書ノ謄本及ヒ證
 憑書類ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ
 原裁判所ノ檢察官ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ大審院檢察長ニ差出ス可シ
 原裁判所ノ檢察官及ヒ控訴裁判所檢察長自ラ再審ノ訴ヲ爲サントスル時ハ前項ノ手
 續ニ從ヒ其書類ヲ差出ス可シ

第四百四十三條 大審院ニ於テハ檢察長ノ請求ニ因リ速ニ專任判事一名ヲシテ其取調
 ナ爲シ報告書ヲ差出サシム可シ

第四百四十四條 大審院ニ於テハ他ノ事件ヲ關キ刑事局判事全員會議局ニ集會シ專任
 判事ノ報告書及ヒ檢察長ノ意見書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第四百四十五條 大審院ニ於テ再審ノ理由アルコトヲ認メタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ
 公訴及ヒ私訴ニ付キ再審ヲ爲ス可キコトヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他ノ裁
 判所ニ移ス可シ其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規則ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ

第四百四十六條 死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場合ニ於テ大審院ニテ再審ノ原
 由アルコトヲ認メタル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトヲ原裁判言渡ヲ破毀ス可シ

第四百四十七條 再審ノ裁判ニ因リ無罪ノ言渡アリタル時又ハ前條ノ場合ニ於テ破毀
 ノ言渡アリタル時ハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其言渡書ヲ揭示公告ス可シ

第三章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴

第四百四十八條 通常裁判所ト特別裁判所トナ問ハス管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲シ其言
 渡確定シタル時又忌避ノ理由若クハ非常ノ事變ニ因リ訴訟事件ヲ管理スルコト能ハサ
 ル時ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ裁判管理ヲ定ムルノ訴ヲ爲スコトヲ得

大審院檢察長ハ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲スコトヲ得

第四百四十九條 裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ訴訟書類ヲ添
 ヘ之ヲ大審院ノ書記局ニ差出ス可シ

第四百五十條 大審院ニ於テハ刑事局判事五名以上會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書
 及ヒ檢察長ノ意見書ニ依リ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ判決シ其事件ヲ管理ス可キ裁判
 所ヲ定示ス可シ

第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第四百五十一條 犯罪ノ性質被告人ノ身分員數地方ノ民心其他重大ナル事情ニ因リ裁

判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スルノ恐アル時ハ公安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可ク得

第四百五十二條 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ司法卿ノ命ニ因リ大審院檢事長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ

第四百五十三條 大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人ノ申立ヲ聽クコトナク速ニ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十四條 被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ模様ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルコト能ハサルノ恐アル時ハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可ク得

第四百五十五條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ管轄裁判所ノ檢察官其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲ス可ク得

民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付辯論ヲ爲シタル時ハ前項ノ訴ヲ爲ス可ク得

第四百五十六條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ヲ爲スニハ其趣意書ニ通テ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ速ニ一通ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ其送達アリタルヨリ三日内ニ答辯書ヲ差出ス可ク得

第四百五十七條 大審院ニ於テハ第四百五十條ノ規則ニ從ヒ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十八條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴アリタル時ハ裁判所ニ於テ其訴訟手續ヲ停止ス

第六編 裁判執行復權及ヒ特赦

第一章 裁判執行

第四百五十九條 重罪輕罪違警罪ノ刑ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行ス可カラズ

第四百六十條 死刑ノ言渡確定シタル時ハ檢察官ヨリ速ニ訴訟書類ヲ司法卿ニ差出ス可シ

司法卿ヨリ死刑ヲ執行ス可キノ命令アリタル時ハ三日内ニ其執行ヲ爲ス可シ

第四百六十一條 死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタル時ハ直チニ之ヲ執行ス可シ

第四百六十二條 刑ノ執行ハ原裁判所ノ檢察官又ハ大審院ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ

罰金科料裁判費用及ヒ沒收物品ハ檢察官ノ命令書ニ依リ之ヲ徴収ス可シ

破壞又ハ廢棄スヘキ沒收物品ハ檢察官之ヲ處分ス可シ

第四百六十三條 死刑ノ執行ニ付テハ書記其始末書ヲ作り刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ

其他刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第四百六十四條 裁所言渡確定シ又ハ闕席裁判アリタル時ハ其刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記既決犯罪表ヲ作り左ノ條件ヲ記載ス可シ但大審院ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其執行ヲ爲シタル裁判所ノ書記之ヲ作ル可シ

一 犯人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地

二 罪名刑名

三 再犯

四 裁判言渡ヲ爲シタル年月日

五 對審裁判又ハ闕席裁判

第四百六十五條 既決犯罪表ハ二通ヲ造リ一通ヲ司法省ニ送致シ一通ヲ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

違警罪ノ既決犯罪表ハ一通ヲ作り其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

第四百六十六條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ノ條件ニ付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第四百六十七條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就キタル場合ニ於テ人違ノ申立アリタル時ハ之ヲ認定スル爲メ前ニ其罪ヲ認メタル裁判所ニ送致ス可シ

裁判所ニ於テ本犯ナルコトヲ認定スルト能ハサル時ハ事實參考ノ爲メ曾テ其事件ニ干預シタル裁判官檢察官書記又ハ原被告ノ證人ヲ呼出スコトヲ得

第四百六十八條 前二條ノ場合ニ於テハ公廷ニテ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ申立及ヒ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判言渡ヲ爲ス可シ

但其言渡ニ對シテハ上訴ヲ許サス

第四百六十九條 賠償及ヒ訴訟關係人ニ償還ス可キ裁判費用ニ付キ其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第二章 復權

第四百七十條 復權ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限經過シタル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法卿ニ之ヲ爲ス可シ

復權ノ願書ニハ本人署名捺印シ現ニ住スル地ノ始審裁判所檢察官ニ之ヲ差出ス可シ

第四百七十一條 復權ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ

- 一 裁判言渡書ノ謄本
- 二 主刑ノ滿期特赦又ハ期滿免除ト爲リタルコトヲ證明スル書類
- 三 假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタルノ證書
- 四 賠償及ヒ裁判費用ヲ辨濟シ又ハ其義務ヲ免カレタルノ證書

五 過去現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類

第四百七十二條 檢事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ爲シ前條ノ書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ

第四百七十三條 檢事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復權ノ願ニ關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ司法卿ニ差出ス可シ

第四百七十四條 司法卿ハ復權ノ願ニ關スル書類ヲ檢閲シ其願ヲ允許ス可キ者ト認メタル時ハ速ニ上奏ス可シ

第四百七十五條 勅裁又ハ司法卿ノ意見ニ依リ復權ノ願ヲ棄却シタル時ハ司法卿ヨリ其旨ヲ控訴裁判所檢事長ニ通知シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ニ通知ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期限ノ半ヲ經過スルニ非サレハ更ニ其願ヲ爲スコトヲ得ス

更ニ復權ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規則ニ從フ

第四百七十六條 復權ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ其裁可狀ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ニ送致ス可シ
檢事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ

又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致シ其裁判所ニ於テハ之ヲ裁判言渡書ニ記入ス可シ

第三章 特赦

第四百七十七條 特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ檢察官又ハ監獄長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法卿ニ申立ルコトヲ得

監獄長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ス時ハ檢察官ヲ經由ス可シ但檢察官ハ意見書ヲ添フ可シ
特赦ノ申立アリタル時ハ司法卿ヨリ其書類ニ意見書ヲ添ヘ上奏ス可シ

第四百七十八條 司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ特赦ノ申立ヲ爲スコトヲ得死刑ヲ除クノ外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セス

第四百七十九條 特赦ノ申立棄却アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第四百八十條 特赦ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ特赦狀ヲ送致ス可シ此場合ニ於テハ第四百七十六條ノ規則ニ從フ

○第二款 治罪法中當分實施セサル條件 明治十四年九月 第四十六號布告

書類送達ニ付治罪法第二十四條ノ制限有之候ヘトモ當分ノ内ハ不及其儀候事

治罪法第四十條ニ犯罪ノ地ヲ以テ裁判管轄ト規定有之候處當分ノ内犯罪ノ地分明ナル被告人ト雖モ管轄裁判所ヨリ囑托アリタル時ハ其被告人逮捕ノ地ノ裁判所之ヲ管轄スヘシ

治罪法第七十三條第二項ニ陪席判事四名ト有之候ヘトモ當分ノ内二名ト相定候事
治罪法第一百條ニ准現行犯ノ場合列記有之候處其舉動犯人ト思料ス可キ者アル時ハ當分ノ内現行犯ニ准シ處分スルコトヲ得

治罪法第三百三十三條第三項ニ家宅搜索ノ制限有之候ヘトモ芝居人寄席飲食店湯屋遊船宿待合茶屋ノ類ハ日出前日没後ト雖モ其營業ヲ爲ス時間又ハ旅籠屋貸座敷ハ日出前日没後ニ拘ハラヌ搜索致シ苦シカラス

治罪法第六十八條第七十二條ニ於テ治安判事ニ囑托スルコトヲ許シタル處分ハ當分ノ内其地ノ司法警察官ニモ囑托スルコトヲ得
治罪法第二百五條第一項但書ニ司法警察官ハ令狀ヲ發スルコトヲ得サル旨記載有之候ヘトモ當分ノ内現行犯ノ場合ニ限リ令狀ヲ發シ苦シカラス

○第三款 治罪法交渉件處分法 明治十八年五月第十二號布告

普通治罪法陸軍治罪法海軍治罪法交渉ノ件處分法左ノ通制定ス但從前ノ成規中本則ニ

抵觸スルモノハ當分施行セム

第一條 常人ニシテ陸軍刑法若クハ海軍刑法ノ罪ヲ犯シタル者ハ普通裁判所ニ於テ之ヲ審判ス但刑ノ執行ハ普通ノ規則ニ從フ

第二條 軍人常人共ニ重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ軍人ハ軍法會議ノ判決ニ付シ常人ハ普通裁判所ノ公判ニ付ス軍術ニ於テ共犯人ヲ逮捕シタルトキハ常人ハ審問ノ上證據書類ト共ニ之ヲ管轄ノ普通裁判所檢事ニ送致シ普通裁判所ニ於テ共犯人ヲ逮捕シタルトキハ軍人ハ審問ノ上證據書類ト共ニ之ヲ被告人ノ所屬長若クハ陸海軍檢察官ニ送致スヘシ

第三條 敵前軍中臨戰合圍ノ地若クハ海軍諸用ニ供スル船舶ニ在テ重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ常人ト雖モ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スルコトヲ得但戒嚴令第十一條第十二條ニ掲クルモノハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スヘシ

第四條 軍法會議ト普通裁判所トノ管轄違ニ付テハ軍法會議又ハ普通裁判所ノ言渡ニ對シ普通治罪法ニ定メタル手續ニ從ヒ大審院ニ上告スルコトヲ得但軍法會議ノ言渡ニ對シ上告スルハ被告人ニ限ルヘシ

第五條 多衆ノ軍人常人闘毆殺傷其他疑讞ニ係ル罪ヲ犯シタルトキハ軍官法司會同審問スルコトヲ得

第六條 軍法會議ト普通裁判所トヲ問ハス既ニ確定シタル裁判ノ効力ハ互ニ之ヲ侵ス
コトヲ得ス

右奉 勅旨布告候事

○第四款 被告人責付手續 明治十四年九月
第四十七號布告

刑事裁判所ニ於テ被告人ヲ責付スルハ左ノ手續ニ從フヘシ此旨布告候事

第一條 被告人ヲ責付スルニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷セシムヘ
キノ證書ヲ其裁判所書記局ニ差出サシムヘシ

第二條 責付中被告人ヲ呼出ストキハ出廷ヨリ二十四時前ニ其通知ヲ爲スヘシ

第三條 被告人呼出ヲ受テ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付
ヲ取消スヘシ

○第五款 保釋責付中被告人取締法 明治十六年十一月
司法省丙第八號達

保釋責付中ノ被告人取締方心得ノ儀ニ付左ノ通各裁判所ヘ相達候條此旨爲心得相達候
事

丁第三十一號

保釋責付ヲ得タル被告人ハ左ノ取締條件ニ服從セシム可キ儀ニ付保釋責付ヲ爲ス際其

旨ヲ被告人ニ豫知セシム可シ但其言渡書ノ紙尾ニ記載印刷スルモ妨ケナシ

第一條 治罪法第二十一條ニ從ヒ假住所ヲ定メ居置ク可キトハ言ヲ俟タス其裁判所ノ
管轄地外ニ旅行スルコトヲ得ス

若シ已ムヲ得サル事由アルキハ其旨ヲ檢事ニ申立テ許可ヲ受ク可シ

第二條 裁判所ノ管轄地内ト雖モ住所外ニ於テ一泊以上滞在スルキハ滞在ノ場所ヲ其
家族又ハ同居人ニ通知シ置ク可シ若シ同居人アラサルキハ其住所ノ地ノ戸長ニ居置
ク可シ

第三條 代言人辨護人又ハ代人トシテ法廷ニ出頭シ其他議會集會等公然ノ場所ニ參會
スルコトヲ得ス

第四條 治罪法第二百一十一條ニ適當スル者及ヒ前數條ノ規則ニ背キタル者ハ治罪法第
二百十六條第二項ニ從ヒ保釋ヲ取消ス可シ其責付ヲ受ケタル者モ亦同シ

○第六款 輕罪控訴規則 明治十八年一月
第二號布告

明治十四年(十二月)第七十四號布告ヲ廢シ自今輕罪ニ係ル控訴ハ左ノ規則ニ從ヒ之ヲ
爲スコトヲ得但治罪法中此規則ニ抵觸スル條件ハ當分ノ内施行セス

第一條 控訴ハ治罪法中本案ノ裁判言渡前ニ許シタルモノト雖モ總テ本案ノ裁判言渡

アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二條 控訴ノ期限内ハ控訴ヲ爲サスシテ直チニ上告ヲ爲スコトヲ得但對手人控訴ヲ爲シタルトキハ此限ニ在ラス

控訴ヲ爲サスシテ直チニ上告ヲ爲シタルトキハ原裁判言渡ニ對シ更ニ控訴ヲ爲スコトヲ得ス

第三條 被告人公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴ヲ爲サントスルトキハ裁判費用ノ保證トシテ金拾圓ヲ豫納スヘシ

第四條 被告人ニ於テ證人鑑定人ノ呼出ヲ請求スルトキ前條保證金ニテ不足ト認ムル場合ニ於テハ別段其費用ヲ豫納セムヘシ

第五條 治安裁判所ニ於テ爲シタル輕罪ノ裁判言渡ニ對スル控訴ハ管轄輕罪裁判所ニ之ヲ爲スヘシ其控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ治罪法中輕罪ノ控訴ニ付定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判スヘシ

右奉 勅旨布告候事

(參看)

明治十四年十二月第七十四號布告

治罪法中刑事ノ控訴ニ關スル條件ハ當分ノ内實施セス

○第七款 輕罪裁判管轄

明治十五年六月司法省丙第二十一號

大審院裁判所警視廳府縣(東京府 東京憲兵本部ヲ除ク)

被告事件重罪ナル時ト雖モ法律上ノ減輕ニ因リ輕罪以下ノ刑ニ處ス可キ者ハ總テ輕罪裁判所ノ管轄ニ屬スル儀ト心得可シ此旨相達候事

○第八款 證人及鑑定人

明治十七年六月第五十七號達

官吏職務上ニ係リ刑事裁判ノ證人トシテ裁判所ニ出頭スル時ハ治罪法ニ依リ旅費日當ヲ請求スルコトヲ得ルト雖トモ被告事件無罪又ハ免訴トナリタル時ハ請求セサル儀ト心得可シ

但旅費日當ヲ請求シタル時其金額ハ雜收入トシテ大藏省ヘ納付ス可シ

右相達候事

△明治十五年三月司法省丙第十號

(大審院裁判所警視廳) 府縣(東京府ヲ除ク) 達

治罪法第二百八十五條ニ從ヒ調書ヲ作リタル司法警察官ヲ證人トスル片ハ書記局ヨリ報知書ヲ以テ出廷セシメ宣誓セシムルニ及ハス書記ノ次席ニ着テ陳述セシム可シ此旨相達候事

△明治十五年六月司法省丙第二十二號

(大審院裁判所警視廳府縣(東) 達) 京府ヲ除ク(東京憲兵本部)

治罪法第九十六條ニ從ヒ告發シタル官吏ヲ證人トシテ公廷へ呼出ス時ハ本年本省丙第十號達ニ準シ處分スル儀ト心得可シ此旨相達候事

△(同年十月同省丙第三十一號ヲ以テ但書改正)

但巡查及等外吏ノ着席ハ此限ニアラス

△明治十五年十月司法省丙第三十二號(大審院裁判所警視廳府縣(東)達(京府ヲ除ク)東京憲兵本部)

總テ官吏ヲシテ職務ニ關スル事件ニ付キ證明セシムル爲メ其呼出ヲ要スル片ハ本年當省丙第十號達ニ準シ取扱フ可シ此旨相達候事

但巡查及ヒ等外吏ノ着席ハ此限ニアラス

△明治十五年六月司法省丙第二十五號(大審院裁判所警視廳)達(府縣(東京府ヲ除ク))

刑法治罪法實施以來刑事ニ付出廷セシメタル證人鑑定人等ノ旅費日當等一時官廳ニ於テ立換渡ヲ爲シ候儀モ有之候處該旅費日當等ハ則裁判費用ニシテ總テ被告人ノ擔當スヘキモノナルハ勿論ノ儀ニ付自今右立換渡ヲ爲スニ不及ル儀ト心得ヘシ此旨相達候事

但從前ノ指令及ヒ内訓本文ニ牴觸スル件々ハ都テ取消候事

○第九款 違警罪審判便宜取計方 明治十四年十月

違警罪ノ審判ニ關スル一切ノ手續ハ治罪法ニ從フヘシト雖モ實際己ムヲ得サル場合ニ於テハ當分ノ内便宜取計ヒ其裁判言渡ニ付テハ總テ上訴ヲ許サス此旨布告候事

○第十款 違警罪裁判方 明治十四年十二月

本年九月第四十八號布告左ノ通改正ス

違警罪ノ儀ハ本年第三十六號布告ニ據リ明治十五年一月一日ヨリ治安裁判所ニ於テ裁判スヘキ處當分ノ内府縣警察署及ヒ其分署ニ於テ裁判セシムヘシ

○第十一款 警部檢事ノ職務代理 明治十四年十二月

治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開ク時ハ當分ノ内其所在ノ地警部ヲシテ檢事ノ職務ヲ代理セシム

○第十二款 告訴及告發 明治十四年一月

是迄吟味願ト稱スル訴ヲ受理致來リシ處右ハ廢止候條自今被害者ヨリ犯罪ヲ訴フルモノハ糾問判事檢事又ハ警察官ニ告訴可致此旨布達候事

△明治十四年三月司法省甲第三號布達

刑事民事ノ裁判上ニ係リ司法省へ對シ歎願或ハ再審願ト唱ヘ書面差出候者往々有之候處右ハ固ヨリ法律ニ戻リタルモノニ付自今指令ニ及ハサルハ勿論却下ノ手續ヲモ不致候條此旨布達候事

○第十三款 檢證及物件差押 明治十四年十二月

明治十四年十二月司 法省丙第十五號達

警視廳府縣(東京府ヲ除ク)

治罪法實施ノ上ハ豫審判事檢證及ヒ物件差押ノ事件ニ付急速ヲ要スル場合直ニ巡查ヲ同行シ又ハ所在ノ巡查ヲ使用スル儀モ可有之候條豫テ可達置此旨相達候事

△明治十七年五月司法省丙第一號(大審院裁判所警視廳府縣)達

(東京府ヲ除ク)憲兵本部

犯罪證據物トシテ戸長役場備置ノ書類ヲ差押フル儀ニ付甲號福井縣上申ニ對シ乙號ノ通及指令候條爾後戸籍帳等ノ差押ニ付テハ右ノ手續ニ依リ取扱フ可キ儀ト心得可シ此旨相達候事

甲號

裁判所ニ於テ犯罪證據物トシテ戸長役場備置ノ要書差押タル節還附方ノ儀ニ付上申

犯罪證據物トシテ裁判所ニ於テ戸長役場備置ノ戸籍帳又ハ土地建物船舶賣買讓渡質入書入與書割印簿等ヲ差押ヘ數日間還附セサルコアリ然ルニ戸長役場ニ於テハ部下ノ人民生死送入籍其他ノ異動加除ヲ要シ又ハ陸續公證ヲ請ヒ就中質入書入契約ノ如キ義務消盡ニ據リ公證取消ノ儀申出ル者アルモ本簿ヘ照較消印スル能ハサルヲ以テ其旨ヲ具ヘ簿冊下戻方裁判所ヘ照會スルモ某事件ニ付差押ヘタル證據物ナル故一件落着迄還附シ難キ旨回答有之取扱上願フル差支候趣ヲ以テ伺出候向アリ右ハ犯罪證據物トシテ

差押ヲ要スルハ其一部分ニ止ルヘクシテ而シテ該簿冊ニ登載セル其他ノ事件全体ニ關シ行政上取扱ニ支障ヲ來シ不都合不抄就テハ斯場合ニ於テハ其必要ノ廉ハ裁判所ニ於テ騰寫シ本書加除スルヲ得サル様掛紙契印等ヲ爲シ而シテ簿冊ハ直ニ還付スヘク様致度御詮議ノ上何分ノ御指揮相成度此段上申候也

明治十七年一月二十九日

福井縣令 石黒 務

内務卿山縣有朋殿

司法卿山田顯義殿

乙號

書面上申之趣聞届候尤モ裁判所ニ於テ騰寫セシ該書ヘハ戸長之レニ調印スヘシ若シ其騰寫ニ拘ハル内ニ加除等ヲ要スル時ハ其都度裁判所ノ許否ヲ得ヘキ儀ト心得事

明治十七年五月二十八日

○第十四款 罰金禁錮及監視 明治十七年七月内務省

乙第三十四號達

警視廳府縣(東京府ヲ除ク)

罰金ヲ輕禁錮ニ換ヘタル場合ニ於テ其日數十日以下ナル時ハ拘留ノ例ニ依リ警察署附屬ノ留置場ニ於テ執行スルコトヲ得ル儀ト心得シ此旨相達候事

△明治十七年三月内務省乙第十九號(警視廳府縣(東京府ヲ除ク)ヘ達)

監視ニ付セラレタル者他ノ地方ニ旅行スルハ必ス監視票ヲ携帯セシメ其滞留數日ニ
涉ル者ハ滞留地ノ警察署ニ到リ謹慎ヲ表シ官吏ノ認印ヲ受ケシム可シ此旨相達候事
但官吏ノ認印ハ監視票ノ裏面旅行中欄内ニ捺印スヘシ

△明治十七年七月内務省乙第三十二號(警視廳府縣(東京府ヲ除ク)ヘ)達
刑法附則ニ從ヒ監視假免ハ警察官假出獄ハ典獄ヨリ其實事ヲ具シ直ニ上申致來候處自
今其所屬長官ヲ經由スル儀ト心得ヘシ此旨相達候事

○第十五款 徒刑流刑禁獄囚送致方
明治十七年八月内務
省乙第三十五號達

警視廳府縣 東京府沖繩縣北
海道三縣ヲ除ク 各假留監

舊刑法ニテ處斷セラレタル懲役終身ノ囚徒刑期限内更ニ罪ヲ犯シ地方監獄ニ拘禁中ノ
者其裁判確定ノ上ハ本年當省乙第卅號達ニ準シ直ニ假留監ニ押送スヘシ此旨相達候事
但新舊比照例ニ依リ新ニ懲役終身ノ刑ニ處セラレタル者モ本文ニ準スヘシ

△明治十七年七月内務省乙第三十號(警視廳府縣 東京府沖繩縣北
海道三縣ヲ除ク)達

今般各假留監設置セラレ候ニ付徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒送致方及ヒ
聯合地方ノ區分左ノ通相定候條此旨相達候事

徒刑流刑禁獄送致方

一 徒刑流刑禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒裁判確定セシ時ハ之ヲ管束セシ地方ヨリ警察
遞傳ヲ以テ直ニ其聯合假留監ヘ押送スヘシ
但本監ノ都合ニヨリ典獄ヨリ其聯合地方ヘ囚徒押送ノ延期ヲ通知スルコトアルヘシ
聯合地方區分

一 兵庫假留監

京都府 大阪府 兵庫縣 滋賀縣 石川縣 富山縣

福井縣 島根縣 鳥取縣 岡山縣 廣島縣 山口縣

和歌山縣 徳島縣 高知縣 愛媛縣

一 東京假留監

警視廳 神奈川縣 埼玉縣 群馬縣 千葉縣 茨木縣

栃木縣 三重縣 愛知縣 静岡縣 山梨縣 岐阜縣

長野縣

一 宮城假留監

新瀉縣 福島縣 宮城縣 岩手縣 青森縣 秋田縣

山形縣

一 三池假留監

第六類 治罪法 徒刑流刑禁獄囚送致方

長崎縣 福岡縣 大分縣 佐賀縣 熊本縣 宮崎縣
鹿兒島縣

△明治十七年七月内務省乙第三十一號(警視廳府縣 東京府沖繩縣北 海道三縣ヲ除ク)達
今般各所ニ假留監設置相成條徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒ハ府縣監獄
ヨリ直ニ同監ヘ遞送可致旨相達候處該囚徒宣告ノ都度當省ヘ報告ノ儀ハ監獄則第五十
八條ニ依リ従前ノ通可取計此旨相達候事

○第十六款 被告人送致方 明治十五年五月司
法省丙第十八號

大審院裁判所警視廳府縣(東京府)達
ヲ除ク

治罪法第二百六十條ノ場合ニ於テ被告人ヲ重罪裁判所開廳ノ地ノ監倉ニ移ス時ハ檢事
ハ前令狀ニ檢事長ノ命令書ノ寫ヲ添ヘテ重罪裁判所檢察官ニ送致シ其檢察官ハ是等ノ
書類ヲ其地ノ監倉長ニ示シテ被告人ヲ收監セシムルノ處分ヲ爲ス可シ其他法律ニ從ヒ
被告人ヲ他ノ監倉ニ移ス場合ニ於テモ此例ニ準スル儀ト心得可シ此旨相達候事
△明治十五年三月司法省丙第八號 大審院裁判所警視廳府縣(東京府)達
ヲ除ク
處刑宣告ノ後犯人ヲ司獄官ヘ護送セシムル際ニ於テハ監獄則ニ從ヒ檢察官ヨリ右宣告
書ノ謄本ヲ司獄官ヘ送達スル儀ト心得ヘシ此旨相達候事

○第十七款 逮捕及令狀發送手續 明治十五年二月司
法省丙第六號達

大審院裁判所警視廳府縣(東京府)達
ヲ除ク
始審裁判所檢事ヨリ既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ逮捕狀ヲ發スル手續ハ左ノ通心得可
シ此旨相達候事

第一條 逮捕狀ニハ典獄ノ報知書ニ依リ第二號書式ニ準シ逃走シタル囚徒ノ本籍身分
氏名人相等ヲ詳記スヘシ

但管轄地ノ内外ニ拘ハラヌ急遽ノ際巡查ヲシテ令狀ヲ帶行セシムル時ハ人相ヲ記
載セサルモ妨ケナシ

第二條 管轄地内ハ令狀ヲ警察署又ハ警察分署ニ送致シテ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ
第三條 管轄地外ハ第一號書式ニ準シ人相書ヲ作り之ヲ始審裁判所檢事ニ送致シテ逮
捕ノ處分ヲ囑託スルコト得

囑託ヲ受ケタル檢事ハ該人相書ニ依リ自己ノ氏名ヲ以テ更ニ逮捕狀ヲ作り之ヲ管轄
地内ノ警察署又ハ警察分署ニ配付シテ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ

第四條 司法警察官ニ於テ逮捕シタル囚徒ヲ受取タル時ハ之ヲ管轄檢事ニ送致シ檢事
ハ其旨ヲ囑託ヲ爲シタル檢事ニ照會シ別段ノ事由アルニ非サレハ逮捕ノ地ニ於テ刑
ノ執行ヲ爲ス可シ

(人相書逮捕狀書式畧ス)

△明治十五年二月司法省丁第十四號(大審院裁判所)達

治罪法第百三十五條ニ從ヒ豫審判事ヨリ各控訴裁判所檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ若クハ其檢事長ヨリ管轄地内ノ檢事ニ捜査及ヒ逮捕ノ處分ヲ命スル時ハ本年本省丙第六號達第一號書式ニ照依シテ人相書ヲ作り其命ヲ受ケタル檢事ハ第二號書式ニ照依シテ逮捕狀ヲ作ル可シ此旨相達候事

△明治十四年十二月司法省丙第二十號(大審院裁判所警視廳)達

新法實施後ハ既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ發スル刑法第六十二條ノ令狀ハ總テ其刑ノ執行ヲ爲ス地ノ始審裁判所檢事ヨリ發スル儀ト可心得此旨相達候事

△明治十五年四月司法省丙第十四號(大審院裁判所警視廳府縣)達

既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ發スル令狀ノ儀ニ付テハ昨明治十四年丙第二十號ヲ以テ相達置候處始審裁判所々在ノ地ヲ除クノ外ハ現ニ其刑ノ執行ヲ爲ス地ノ警部ニ於テ令狀ヲ發スル儀ト可心得此旨更ニ相達候事

△明治十五年二月司法省丙第四號(裁判所警視廳府縣)達

治罪法ニ定メタル拘引狀ノ期限ニハ總テ休暇ノ日ヲ算入ス可カラズ但平常休暇ナキ官署ニ付テハ此例ヲ用ササル儀ト可心得此旨相達候事

○第十八款 已決囚犯罪處分方 明治十七年六月 司法省丙第二號

大審院裁判所警視廳府縣(東京府)達

已決囚ノ犯罪ニ付之ヲ裁判所ニ呼出シ審理ノ末刑ノ言渡ヲ爲ス場合ニ於テハ明治十五年當省丙第八號達ニ依リ檢察官ヨリ其宣告書ノ謄本ヲ司獄官ニ送達スルハ勿論自今己決囚ニ對スル其他ノ宣告ニ付テモ其豫審ニ係ルト公判ニ係ルトヲ問ハス書記ヨリ宣告書ノ謄本ヲ司獄官ニ送致シ又證人トシテ出廷セシメタル己決囚用濟ニ至リタル時ハ亦書記ヨリ其旨ヲ司獄官ニ報知ス可キ儀ト心得ヘシ此旨相達候事

○第十九款 犯人及證人押印方法 明治十四年十二月 司法省丙第十六號

大審院裁判所警視廳府縣(東京府)達

治罪法中犯人証人等押印ノ條々實印無之者ニ限リ從來ノ慣例ニ依リ摺印爲致候儀ト心得ヘシ此旨相達候事

○第二十款 贓物ニ關スル諸件 明治十五年五月 司法省丙第廿號

大審院裁判所警視廳府縣(東京府)達

犯罪ノ用ニ供シタル物件及ヒ犯罪ニ因テ得タル物件ハ本案ノ裁判ヲ言渡ス迄ニ所有主ヲ發見セサル時ハ刑法第四十三條第四十四條ニ從ヒ其本案ノ裁判ト共ニ沒收ノ言渡ヲ

爲スヘント雖モ右ノ物件ハ之ヲ其裁判所々在ノ地及ヒ犯罪ノ地ニ公告シ一年間（公告シタル日ヨリ起算ス）ニ所有主ヲ發見シタル時ハ檢察官ヨリ直ニ之ヲ還付スヘシ此旨爲心得相達候事

但檢察官ニ於テ保存ス可カラサル物件又ハ保存スルニ付費用ヲ要スヘキ者ト思料スル時ハ公賣ノ處分ヲ爲シタル上其代金ヲ保存シ置クヘシ

△明治十五年六月司法省丙第二十四號達

大審院裁判所警視廳府縣東京府東京憲兵本部

犯罪ノ用ニ供シ又ハ犯罪ニ因リ得タル物件ハ轉讓シテ他人ノ手ニ在リ及ヒ沒收スヘキモノ若クハ証憑ノ爲メ官ニ保存シ置クヲ必要トスルモノヲ除クノ外ハ裁判官檢察官司法警察官ニ於テ實際ノ便宜ニ因リ裁判官渡アルマテ其所有主ヘ假ニ之ヲ下渡シ置クヲ得ヘシ此旨爲心得相達候事

△明治十四年三月司法省丙第六號達

大審院諸裁判所各檢事警視廳檢事ア各縣

贓物等官ニ於テ送致途中又ハ領置中遺失及ヒ盜難ニ罹リタル片賠償處分ノ儀ニ付甲號ノ通岩手縣ヨリ伺出太政官ヘ伺ノ上乙號ノ通及指令候條之レニ牴觸スル從前ノ指令ハ取消候爲心得此旨相達候事

甲號

領置中ノ金品盜難等ニ罹リタル處分方ノ付伺

一竊盜等ノ贓金品及罪囚ノ所持金ヲ官廳ニテ領置中盜難ニ罹リ其盜犯捕ニ就クモ資力ナキ時ハ固ヨリ事主ノ損失ニ歸ス可キ筋無之ニ付官之ヲ辨償ス可キ哉

一前條盜難ニ罹リタルノ形跡明瞭ニシテ盜犯未タ捕ニ就カス又ハ該金品ヲ送致途中遺失シタルニ其証據顯然シテ未タ得者ノ無之如キハ其監守者ハ相當ノ處分ニ及ヒ事主ヘハ官ヨリ之ヲ辨償ス可キ哉

右處分方ニ疑議ヲ生シ候ニ付至急御指令有之度此段相伺候也

明治十三年十月十九日

岩手縣令 島 惟 精

司法卿田中不二磨殿

乙號 指令

兩條共同ノ通

明治十四年三月三日

△明治十四年四月司法省丙第七號達

大審院諸裁判所檢事警視廳府縣（東京府ヲ除ク）

事主ノ有無ニ因テ贓物ヲ區處スル儀ニ付舊兵庫縣大書記官原安太郎ヨリ甲號ノ通伺出

候ニ付乙號ノ通太政官へ相伺候處丙號ノ通御裁令相成候條爲心得此旨相達候事
甲號

贓金ヲ以テ購求セシ物品處分之儀伺

爰ニ盜犯甲某捕拿所持物品出所ヲ尋問スルニ事主乙某方ニ於テ盜ミシ贓金ヲ以テ購求
セシ品ナリト明供シ該犯拘置中逃走百方搜索スルモ踪跡ヲ不得然ル片ハ贓金ニテ購求
セシ物品事主乙某へ賠償ノ爲メ警察官ニ於テ下渡可然手若シ本件事主分明ナラサルト
キハ官沒ス可キ哉右差掛タル儀有之ニ付伺出候條至急伺分ノ御指揮有之度候也

兵庫縣令森岡昌純代理

明治十三年十一月二日

兵庫縣大書記官 原 安太郎

司法卿田中不二磨殿

乙號

贓金ヲ以テ購求セシ物品處分ノ儀ニ付伺

兵庫縣大書記官原安太郎ヨリ別紙ノ通盜犯其竊取シタル金ヲ以テ購求セシ物品ハ事主
アレハ警察官限リ下渡置キ事主不分明ナルトキハ官沒スヘキヤノ儀伺出候右ハ盜金ヲ
以テ購求セシ物品ハ即チ正贓現在ト同視ス可キ者ニ付事主アレハ事主ニ還給セサルヲ
得ス若シ盜犯逃亡スレハ其贓品ノミ裁判所へ送付スルニ及ハサルニ付警察官限リ假ニ

渡置キ追テ盜犯捕ニ就ク際其物品代價ヲ詳記シ盜犯始末書ト共ニ該裁判所へ送付シ若
シ事主分明ナルトキハ一年間其物品ヲ領置シ仍ホ事主知レサレハ官沒シテ可然哉右ハ
法律上成文無之ニ付此段相伺候條早々御指揮有之度候也

明治十四年一月十四日

司法卿 田中不二磨

太政大臣三條實美殿

丙號

伺ノ趣ハ三年ヲ經テ仍ホ事主知レサレハ官沒スヘシ

但罪証ニ必要ナラサル物件及ヒ久シキニ難堪モノハ時限ニ拘ハラヌ公賣シ其代
金ヲ領置スルヲ得

明治十四年四月十八日

○第二十一款 裁判費用ニ關スル諸件 明治十五年七月司法
省丙第二十六號達

大審院裁判所警視廳府縣 東京府

治罪法第三百七條第二項公訴裁判費用官ニ於テ擔當スヘキ場合該金額ハ裁判所ヨリ支
出スル儀ト心得ヘシ此旨相達候事

但從前ノ指令内訓本文ニ牴觸スル件々ハ取消候事

△明治十七年三月内務省乙第十八號(警視廳府縣 東京府)達

刑事ニ付警察官ノ處分ニ屬スル費用之儀ニ指令又ハ訓示及ヒ置キ候次第モ有之處豫
審判事ノ囑託ヲ受テ豫審處分ヲ爲シタル場合ヲ除ク外ハ起訴ノ前後ニ拘ハラス裁判費
用ニ相立タル儀ニ付之ニ矛盾スル指令及ヒ訓示ハ都テ取消候條支給方ハ明治九年第
六十三號公布ニ據ル儀ト可心得此旨相達候事

(參看)明治九年五月第六十三號布告

明治七年(七月)第七十八號同年(十一月)第二百二十七號同八年(五月)第七十四號布告
及同七年(七月)第九十一號同年(十一月)第五百五十八號達ヲ廢シ證人并無罪解放ノ者
等ノ旅費支給方ノ儀今般更ニ左ノ通相定當五月十六日ヨリ施行候條此旨布告候事

△(明治九年十月第三百二十二號第一項改正)

一罪囚ノ證人タルヘキト思料シ裁判官又ハ警察官吏ニ於テ呼出ス者探索上ニテ捕ニ
就キ及呼出ヲ受テ無罪ニ歸スルモノ人違又ハ官吏ノ其人名ヲ誤寫スル等ニテ呼
出シタル者(各官廳ヨリ呼出ス者モ亦同シ)有罪ト認メ呼出サル、者ハ附添ヲ命ス
ル者往復并滯留中左ノ通支給スヘシ

但推糾ノ爲メ手鎖繩付等ニテ護送及ヒ檻倉入圍等官費ヲ以テ任賄ノ時日ハ別ニ
給セス

金五拾錢

旅費 日當

金三拾錢

滯留 日當

一該廳ヨリ片道二里以上十里迄ハ旅費日當一日分ヲ給シ爾餘一日十里詰ヲ以テ往返
共之ヲ給シ滯在中ハ其日數ニ應シ滯留日當ヲ給スヘシ(十里以上ノ端里數一里ニ
滿タサルハ切捨トス一里以上ハ旅費日當一日分ヲ給ス)

△(明治九年八月第七號布告但書改正)

但片道二里以上滿五里迄ノ地ヲ一日間ニ往來スルトモ日當ハ一日分ノ外給セス
尤二里未滿ノ地ヨリ呼出セシモノハ辨當料金貳錢五厘ヲ給ス

△(明治九年十月第三百二十二號及同年十二月第五百五十一號布告第三項改正)

一各裁判所及ヒ警察官吏ヨリ呼出ヲ受テ無罪ニ歸スルモノ人違又ハ官吏ノ其人名ヲ
誤寫スル等ニテ呼出タルモノ旅費ハ其呼出タル應ヨリ之ヲ給ス其他ハ總テ本管廳
(寄留ノモノハ其寄留地ノ管轄廳)ヨリ給スルニ付証人及附添ヲ命スル者等ノ如キ
ハ問糺中ノ日數並ニ往復里程ヲ詳記シ其裁判官ノ証印ヲ請テ旅費請取方ヲ申請ス
ヘシ

△明治十五年七月司法省丙第二十六號達

大審院裁判所警視廳府縣
東京府
ヲ除ク

治罪法第三百七條第二項公訴裁判費用官ニ於テ擔當スヘキ場合該金額ハ裁判所ヨリ支

第六類 治罪法 裁判費用ニ關スル諸件

六百七十二

出スル儀ト心得ヘシ此旨相達候事

但從前ノ指令内訓本文ニ抵觸スル件々ハ取消候事

△明治十五年六月司法省丙第二十五號達

大審院裁判所警視廳府縣東京府ヲ除ク

刑法治罪法實施以來刑事ニ付出庭セシメタル証人鑑定人等ノ旅費日當等一時官廳ニ於テ立換渡ヲ爲シ候義モ有之候處該旅費日當等ハ則裁判費用ニシテ總テ被告人ノ擔當スヘキモノナルハ勿論ノ義ニ付自今右立換渡ヲ爲スニ不及ル儀ト心得ヘシ此旨相達候事
但從前ノ指令及ヒ内訓本文ニ抵觸スル件々ハ都テ取消候事

△明治十四年十二月司法省丁第三十一號(裁判所ヘ)達

本年(本月)甲第七號布達裁判言渡ノ賸本又ハ拔書ヲ求ムル者代價ノ儀無資力ニシテ上納スル能ハサルモノニ限り無代價ニテ下渡スモ不苦儀ト心得此旨相達候事

△明治十五年三月司法省丙第十二號(裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)ヘ)達

明治十四年(十二月)當省甲第七號布達裁判言渡ノ賸本又ハ其拔書ヲ下付スル費用ハ當分違警罪ニ限り徴收セサル様取計フヘシ此旨相達候事

(參看)明治十四年十二月司法省甲第七號布達

治罪法第三百十五條裁判言渡ノ賸本又ハ其拔書ヲ求ムル者ハ其用紙一枚金三錢ノ費

用ヲ上納スル儀ト心得此旨布達候事

△明治十八年四月内務省甲第十三號(警視廳府縣)達

輕罪ニ係ル控訴之儀ニ付本年第二號ヲ以テ公布相成候付テハ控訴裁判所管轄區域内各地方ヨリ控訴ヲ爲シタル被告人ニ係ル拘禁中ノ諸費ハ總テ最前裁判言渡アリタル地方ノ地方税ヲ以テ支辨シ其費用交付方等ハ客年當省乙第二十九號達ニ準據シ可取計此旨相達候事

但控訴裁決後已決囚ニ屬スル諸費モ本文同様可心得事

○第二十二款 書類送達ニ關スル諸件

明治十六年二月内務省乙第四號(府縣)達

刑事ニ付戸長ヲ經テ本人ヘ書類送達ノ節戸長役場費ヲ以テ使丁ヘ送達賃繰替相渡候儀自今不相成候條此旨相達候事

但從前ノ指令本文ニ抵觸ノ廉ハ取消ス

△明治十六年二月司法省丁第五號(大審院裁判所ヘ)達

刑事ニ付戸長ヲ經テ本人ヘ書類ヲ送達スヘキ際迄迄戸長ニ於テ使丁賃繰線替渡ヲ爲シ候儀モ有之候處自今繰替ヲ要スル節ハ一時裁判所ニ於テ繰替置追テ本人ヨリ償却セシムヘキ儀ト心得ヘシ此旨相達候事

但從前ノ指令内訓本文ニ抵觸スル條件ハ取消候事

△明治十六年七月司法省丙第四號(大審院裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)ヘ)達
監倉若クハ獄舎ニ在ル被告人ヘ送達スヘキ渾テノ書類ハ裁判所ヨリ監獄署ヘ送達ノ手
續ヲ囑託シ該署ニ於テハ規則ニ從ヒ本人ニ送達シ合狀ハ其正本其他ハ送達書ノ一本ヲ
裁判所ヘ返還スヘキ様取計フヘシ此旨相達候事

但從前ノ指令内訓本文ニ抵觸スル條件ハ渾テ取消候事

(參看)明治十四年九月第四十六號布告第一項抄出

書類送達ニ付治罪法第二十四條ノ制限有之候ヘトモ當分ノ内ハ不及其儀候事
右布告候事

○第二十三款 勅奏官其他犯罪處分方

明治十五年三月司
法省丙第十一號達

大審院裁判所警視廳(東京府ヲ除ク)

今般太政官ヨリ別紙ノ通御達相成候條此旨相達候事

(別紙)

司 法 省

勅任官禁錮ノ刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シ及ヒ奏任官華族帶勳有位ノ者禁錮以上ノ刑ニ該ル
ヘキ罪ヲ犯シタル時ハ當該檢察官ヨリ司法卿ニ具狀シ司法卿其事由ヲ奏聞シ處分スヘ

シ但現行犯罪ニ係ル者ハ處分シテ後ニ奏聞スルヲ得此旨相達候事

明治十五年三月二十二日

太政大臣 三 條 實 美

△明治十五年三月司法省丙第九號(大審院裁判所府縣(東京府ヲ除ク)ヘ)達
帶勳者罪ヲ犯シ公權ヲ剝奪又ハ停止スルノ言渡アリタル片ハ其罪狀并刑名宣告文ノ寫
ヲ以テ當省ヘ可届出此旨相達候事

但剝奪公權ノ者ハ勳記勳章并年金票共収奪ノ上當省ヘ差出スヘク候事

△明治十五年四月内務省戊第二號(神道副總裁神佛各管長ヘ)達
教導職ノ中犯罪處刑ノ者有之節ハ裁判宣告書寫取添速ニ當省ヘ可申出此旨相達候事
但試補ニシテ公權停止以上ノ處斷ヲ受テ候者有之候ハ直ニ差免シ其旨届出ヘシ

○第二十四款 府縣會議員犯罪拘引方

明治十二年四月内
務省乙第十八號達

東京警視本署府縣(東京府ヲ除ク)

府縣會員犯罪ノ麻有之拘引ヲ要スルモ其會場内ニアル片ハ議長ノ承諾ヲ得タル上拘引
可致此旨相達候事

○第二十五款 被告人訊問時限

明治十五年十一月
第五十三號布告

治罪法第二百六條第二百七條中二十四時内ト有之處己ムヲ得サル場合ニ於テハ當分ノ

内五日以内ニ於テスルコトヲ得

○第二十六款 豫審ヲ要セサル輕罪裁判法 明治十四年十月 第五十四號布告

刑法治罪法實施ノ儀布告候ニ付テハ當分ノ内輕罪ニシテ檢察官ニ於テ豫審ヲ要セスト見込ム者ニ限リ始審裁判所々在ノ地ヲ除クノ外治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開キ其裁判ヲ爲スコトヲ得ヘシ此旨布告候事

但本文ノ場合ニ於テ訟廷内治罪ノ手續ハ便宜可取計且其手續上ニ付テハ上訴ヲ許サス
○第二十七款 被告人訊問方 明治十四年十月 第五十九號布告

治罪法中豫審判事拘引狀ヲ發シ拘引セシメタル被告人ハ時宜ニ依リ其訊問期限四十八時間ニ在ル夜間ニ限リ裁判所又ハ最寄警察署留置場ニ入置クヘシ此旨布告候事

○第二十八款 輕罪裁判所開廳ノ事 明治十四年十二月 第七十七號布告

本年十月五十四號ヲ以テ輕罪ニシテ豫審ヲ要セサルモノニ限リ治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開クヲ得ヘシ旨布告候處當分ノ内豊岡相川洲本田邊脇田高山西郷平戸福江嚴原天草大島大曲八戸ノ各治安裁判所ニ於テハ輕罪裁判所ヲ開キ總テノ輕罪ヲ裁判スルコトヲ得ヘシ

但本文ノ場合ニ於テ訟廷内治罪ノ手續等ハ本年第五十四號布告但書ノ通タルヘシ

○第二十九款 重罪裁判所區畫 明治十六年九月 第三十三號布告

明治十四年十二月第七十八號布告ヲ廢シ自今重罪裁判所ノ管轄ハ各始審裁判所管内ヲ以テ區劃卜定メ各其地名ヲ冒シ某重罪裁判所ト名稱ス

但沖繩縣札幌縣根室縣ノ地方ハ従前ノ通

○第三十款 重罪裁判所長ヲ定ム 明治十六年一月 第三號布告

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ當分ノ内始審裁判所長ヲ以テ其裁判長ト爲スコトヲ得

但沖繩縣札幌縣根室縣ノ儀ハ従前ノ通リタルヘシ

○第三十一款 海上路程計算法 明治十五年二月 第七號布告

治罪法第十九條第二項海上路程ノ猶豫ハ陸路四里ノ割合ヲ以テ一日ヲ加フルモノトス

○第三十二款 書記ノ立會ヲ要セサル訊問 明治十六年三月 第八號布告

豫審判事裁判所ニ於テ豫審ヲ爲ス時ハ當分ノ内書記ノ立會ナクシテ被告人證人ヲ訊問スルコトヲ得ス

○第三十三款 伊豆七島裁判管轄 明治十四年十月 第五十七號布告

伊豆七島裁判事務管分該島吏へ民事ハ百圓以下及勸解並ニ刑事ハ違警罪ノ裁判ヲ委任シ民事百圓以上刑事輕罪以上ハ東京始審裁判所ノ管轄ト相定メ明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

但該島ニ於テ裁判治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

○第三十四款 司法官吏巡查兵員使用手續 明治十四年九月 第八十二號布告

司法官吏ヨリ巡查及ヒ兵員ヲ要求使用スルニハ左ノ手續ニ從フヘシ此旨相達候事
第一條 裁判官檢察官及ヒ司法警察官治罪法ニ從ヒ檢證及ヒ物件差押其他職務ヲ行フニ當リ必要ナル時ハ警察署又ハ憲兵屯營ニ照會シテ巡查又ハ憲兵卒ヲ使用スルヲ得

但時機緊急ナル時ハ直チニ之ヲ使用スルヲ得

第二條 前條ノ場合ニ於テ事緊急重要ニ涉ル時ハ直チニ鎮臺又ハ分營ニ照會シテ兵力ヲ要求スルヲ得

○第三十五款 公廷取締 明治十四年十月 第八十六號布告

治罪法實施ニ付テハ大審院其他各裁判所公廷取締ノ使用ニ供スル爲メ其院長所長ノ照會ニ應シ一名又ハ數名ノ巡查爲相詰又拘留被告人審問中ハ其護送ノ巡查或ハ押丁ヲシテ守卒トシ公廷ニ入り看護セシム可シ此旨相達候事

○第三十六款 辯護人ヲ用ヒサル辯論 明治十五年一月 第一號布告

治罪法第三百八十一條第一項ニ若シ辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ効ナカルヘシト有之候得共其裁判所々屬ノ代言人無之場所ニ於テハ當分ノ内辯護人ヲ用ヒサルモ其刑ノ言渡ハ無効ノ限リニ在ラス

○第三十七款 集治監囚人重罪犯處分方 明治十六年十一月 第三十八號布告

樺戸空知兩集治監ノ囚人 假出獄免幽 閉ノ者トモ 罪ヲ犯シ重罪ニ該ル者ハ當分ノ内札幌始審裁判所ニ於テ明治十五年六月第三十號布告ニ準シ處分スヘシ

○第三十八款 高等法院ヲ開カサル時ノ裁判方 明治十六年十二月 第四十九號布告

治罪法第八十三條ニ記載スル事件ニ付高等法院ヲ開カサル時ハ通常裁判所ニ於テ裁判スルヲ得

○第三十九款 無能力者、代人、民事擔當人、種別 明治十四年十二月 第七十三號布告

治罪法ニ於テ無能力者法律ニ定メタル代人及ヒ民事擔當人ト稱スル者ハ左ノ通
無能力者

- 一 未丁年者
 - 二 妻タル者
 - 三 白痴瘋癲人
 - 四 治産ノ禁ヲ受ケタル者
- 法律ニ定メタル代人
- 一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ親屬後見人
 - 二 夫タル者
 - 三 白痴瘋癲人ノ保管者
 - 四 治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ財産管理人
- 民事擔當人
- 一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ同居ノ親屬ニシテ監督ヲ爲ス者
 - 二 夫タル者
 - 三 白痴瘋癲人ノ保管者
 - 四 雇主

但雇人其雇主ノ命シタル事件ヲ行フ時

○第四十款 商船内犯罪取扱規則 明治十四年十二月 第六十五號布告

第一條 何人タリトモ商船内ニ於テ重罪輕罪アルコトヲ認知シ又ハ重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ船長ニ告訴告發ヲ爲スコトヲ得

第二條 船長告訴告發ヲ受ケタル時又ハ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ其事
件ニ付假ニ訊問檢證ノ處分ヲ爲シ且證憑及ヒ事實參考ト爲ルヘキ事勅ヲ集取シ調書
ヲ作ルヘシ但調書ヲ作ルコト能ハサル時ハ第三條ニ記載シタル官吏ニ其申立ヲ爲スヘ
シ

前項ノ場合ニ於テハ立會人二名以上アルヲ要ス

第三條 船長ハ證憑及ヒ事實參考ト爲ルヘキ事勅ヲ取纏メ被告人ト共ニ該船碇泊又ハ
着港ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ引渡ス可シ若シ外國ノ港埠ニ着シタル時ハ其地駐
節ノ領事ニ之ヲ引渡スヘシ

○第四十一款 裁判言渡騰本費用 明治十四年十二月 司法省甲第七號布達

治罪法第三百十五條裁判言渡ノ騰本又ハ其拔書ヲ求ムル者ハ其用紙一枚金三錢ノ費用
ヲ上納スル儀ト心得此旨布達候事

○第二章 監獄則 附追達

○第一款 監獄則 明治十四年九月 第八十一號達

明治五年達監獄則及ヒ本年(三月)第拾三号達在監人給與規則同(七月)第拾四号達在監人雇工錢規則ヲ合セテ別冊ノ通監獄則相定候條此旨相達候事

但シ明治十五年一月一日以後施行ノ刑法治罪法ニ關涉スル條件ハ同日ヨリ施行ス

監 獄 則

監獄則目錄

第一編

第一章 汎則

第二章 監署ノ規程

第三章 監獄ノ構造

第二編

第一章 役法 附時限

第二章 工錢

第三章 徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ヲ受タル囚徒押送

第四章 假出獄免幽閉ノ者ニ貸與スル屋舎

第三編

第一章 給與

第二章 疾病 附死亡

第三章 書信

第四章 接見

第五章 差入品

第四編

第一章 教誨

第二章 賞譽

第三章 懲罰

第六類 治罪法 監獄則

監獄則

第一編

第一章 汎則

第一條 監獄ヲ別テ左ノ六種ト爲ス

一 留置場 裁判所及ヒ警察署ニ屬スルモノニシテ未決者ヲ一時留置スルノ所トス
但時宜ニ由リ拘留ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘留スルコトヲ得

二 監倉 未決者ヲ拘禁スルノ所トス

三 懲治場 懲治人ヲ懲治スルノ所トス

四 拘留場 拘留ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘留スルノ所トス

五 懲役場 懲役ノ刑及ヒ禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘禁スルノ所トス

六 集治監 徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル者ヲ集治スルノ所トス

北海道ニ在ル本監ハ徒刑流刑ニ處セラレタル者ヲ集治ス

第二條 監獄ハ内務卿ノ管轄ニ屬ス但陸海軍ノ管轄ニ屬スルモノハ此限ニ在ラス

第三條 集治監ハ内務卿之ヲ直轄ス留置場監倉懲治場拘留場懲役場ハ警視總監又ハ府

知事東京府ヲ除ク縣令之ヲ管理ス

第四條 此獄則ハ特ニ陸海軍ノ獄則ヲ以テ處スヘキモノニ適用スルコトヲ得ス

第五條 内務卿ハ毎年其所屬官吏ヲシテ各監獄ヲ巡閱セシムヘシ

警視總監府知事縣令ハ毎年三四次所轄ノ監獄ヲ巡閱スヘシ

裁判官檢察官ハ時々其裁判所ニ屬スル監倉ヲ巡閱スヘシ

府縣會議員ハ臨時其府縣監獄ヲ巡閱スルコトヲ得

第六條 在監人ト稱スルハ未決已決ノ者及ヒ第十九條第三十條ニ記載シタル者ヲ云フ

第七條 在監人ヨリ司獄官吏ノ處置ニ對シ若シ情苦テ訴ヘントスルトキハ第五條第一

項第二項ニ記載シタル官吏巡閱ノ際封書又ハ口述ヲ以テ申告スルコトヲ得

第二章 監署ノ規程

第八條 司獄官吏在監人ヲ管束スルハ一ニ和平ヲ秉リ罰例ニ照シテ犯則者ヲ決責スル

ノ外恣ニ責罰スルヲ得ス

第九條 典獄看守長ハ日夜不時ニ監房ノ内外ヲ視察シ或ハ物件ヲ査閲シ其他囚徒ノ傲

情ヲ生シ脱越等ノ事ナカラシムルヲ要ス

第十條 新ニ入監スル者アルトキハ典獄先ツ拘引狀拘留狀收監狀又ハ所刑宣告書等ノ

文書ヲ査閲シテ之ヲ領シ其領收ノ證ヲ引致シ來タル者ニ交付ス其文書ナクシテ引致

セラレタル者ヲ入監スルヲ得ス

未決者ノ中共犯人アルトキハ其監房ヲ別異シ談話通聲ヲ禁シ法庭ニ引致ノ時モ同往

第六類 治罪法 監獄則

セシムルヲ得ス

已決囚ハ第十六條ニ記載シタル差別ニ從ヒ其監房ヲ別異ス

第十一條 入監ノ婦女乳兒三歲未滿ヲ携帶セント請フ者アルトキハ之ヲ許ス

第十二條 新ニ入監スル者アルトキハ名籍ノ様本ニ照シ其要項ヲ詳録シ一小房内ニ於テ通身ヲ搜檢シ利器其他ノ物件ヲ夾帶スルヲ拒クヘシ懲治人ノ監舍ニ入ルトキモ亦同シ

第十三條 總テ監房ニ入ル、物品ハ典獄一々之ヲ精檢シ其危險ノ虞アルモノハ一切之ヲ禁スヘシ

第十四條 總テ入監人ノ携有スル財貨物件ハ悉ク點檢シテ其名數ヲ簿冊ニ記載シ典獄一々證印シテ之ヲ領置シ釋放ノ時還付スヘシ但點檢ノ際隱匿セン貨物ハ沒收ス

第十五條 在監人書籍ヲ看ント請フトキハ新聞紙及ヒ時事ノ論說ヲ記載スルモノヲ除キ修シ又ハ營業ニ必要ナルモノ、ミヲ許スヘシ

第十六條 已決囚ハ各刑名ニ從テ其監房ヲ別異シ又其中ニ就テ左ニ記載シタル者ヲ別異ス

一 十六歲未滿ノ者ト滿十六歲以上ノ者

二 滿十六歲以上二十歲未滿ニシテ再犯以上ノ者ト同上ノ年齢ニシテ初犯ノ者

三 初犯ノ者ト再犯以上ノ者

第十七條 要犯疑獄ニ係ル者ヲ拘禁スル未決監ニ於テハ其氏名ヲ呼ハス番號ヲ以テ之ニ換フヘシ但着衣ノ外襟ニ白布ヲ縫着シ其番號ヲ墨書シ監房ヲ出入スル毎ニ皂布ヲ以テ覆面シ當眼ノ所ニ小孔ヲ穿テ共犯者ヲシテ共ニ拘禁ノ身タルヲ窺探スルヲ得サランシム

第十八條 放恣不良ノ者ヲ懲治場ニ入レ矯正歸善セシメント其尊屬親ヨリ願出ルトキハ第二十條第一項ノ例ニ照シテ處分スヘシ

第十九條 矯正歸善ノ爲メ懲治場ニ入ルヘキ者ノ年齢ハ滿八歲以上二十歲以下ヲ限トス

第二十條 懲治人ト稱スルハ左ニ記載シタル者ヲ云フ

一 刑法第七十九條第八十條第八十二條ニ從ヒ懲治場ニ留置スル幼年ノ者及ヒ瘡癩者

二 尊屬親ノ情願ニ由テ懲治場ニ入レタル者

第二十一條 前條第二款ニ記載シタル懲治人ハ戶長ノ證票ヲ具スルニ非レハ入場ヲ許サズ但シ在場ノ時間ハ六個月ヲ一期トシ二年ニ過ルヲ得ス入場ヲ請ヒシ尊屬親ヨリ懲治人ノ行狀ヲ試ル爲メ宅舍ニ帶往セント請フトキハ其情狀ニ由リ之ヲ許スヘシ

第二十一條 懲治人ハ左ノ年齢ニ從ヒ其居房ヲ別異ス

一 十六歳未滿ノ者ト十六歳以上ノ者

二 滿十六歳以上二十歳未滿ニシテ再ヒ懲治場ニ入シ者ト同上ノ年齢ニシテ初テ入場スル者

第二十二條 在監人ヲ他監ニ移ストキハ其名籍又ハ處刑ノ宣告書其他必用ノ文書及ヒ領致ノ貨物ヲ具シテ送致スヘシ其發遣ノ途中ニ在テノ行狀ハ押送官吏之ヲ記述シテ典獄ニ知會スヘシ

在監人ヲ裁判所又ハ他監ニ押送スルトキハ戒具ヲ用ヒ男ト女ヲ別ツヘシ但懲治人ハ戒具ヲ用ヒス

第二十三條 典獄ハ看守長及ヒ看守ヲシテ常ニ在監人ノ行狀ヲ録セシメ賞罰ヲ行フノ考據トナスヘシ

第二十四條 賞表ヲ與ヘタルトキハ賞譽簿ニ其氏名及ヒ賞詞ヲ記載シ視奪シタルトキハ之ヲ删除スヘシ但其賞罰ヲ行ヒタル旨ヲ囚徒ニ示スハ第二十六條ノ例ニ依ルヘシ

第二十五條 特赦アリタルトキハ速ニ其旨ヲ内務卿ニ申報スヘシ

第二十六條 特赦ヲ受タル者アルトキハ免役日若クハ日曜日ノ午後ニ在テ他ノ囚徒ヲ集メ其旨ヲ聽カシメ仍ホ之ヲ揭示スヘシ

第二十七條

假出獄ヲ許サレタル者ニハ證據ヲ與ヘ最近ノ警察署ヘ護送スヘシ

監署ニ領置セシ金錢ハ出獄者ニ携帶セシメス其金員ヲ録シテ居住スヘキ地ノ警察署ニ送致スヘシ(明治十七年四月第三十號達ヲ以テ本條改正)

其居住スヘキ地ノ隔遠スル者ニハ途中支用トシテ前項ノ金員若干ヲ交付スヘシ

第二十八條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者其刑期間ハ典獄ニ於テ營業ノ方法ヲ指示シ其來署ヲ要スルトキハ召喚スルコトヲ得

第二十九條 在監人中能ク獄則ヲ守ル者ヲ撰テ傳告者誘工者トナス傳告者ハ官吏ノ命令ヲ在監人ニ傳ヘシメ誘工者ハ工場ニ在テ服役者ヲ勸誘セシム但傳告者誘工者ハ滿六箇月以上其用務ヲ繼續セシムルヲ得ス

傳告者及ヒ誘工者ハ私ニ在監人ヲ使役シ若クハ凌辱スルノ所爲アルヲ許サス

第三十條 刑期滿限ノ後類ルヘキ所ナキ者ハ其情狀ニ由リ監獄中ノ別房ニ留メ生業ヲ營マシムルヲ得

第三十一條 刑期滿限ノ者ヲ解放スルハ滿期ノ翌日午前第十時ヲ過ヘカラス

第三十二條 死刑ノ執行ハ午前第十時ヲ過ルヲ得メ其執行中ハ看守ヲシテ嚴ニ刑場ノ門戸ヲ護ラシムヘシ

其遺骸ハ死相ヲ驗シタル後尙ホ二分時ヲ過サレハ埋葬若クハ下付スルヲ得ス

第三十三條 死刑者又ハ死亡者アルトキハ其年月日時ヲ記シ典獄ヨリ本籍ノ戸長及ヒ近地ノ親屬若シハ故舊ニ通知スヘシ其監署ニ領置シタル貨物ハ親屬ニ下付ス若シ親屬ナキトキハ遺骸ヲ領取シタル故舊ニ之ヲ下付ス但死者ノ身ニ纏ヒタル衣服ハ此限ニアラス

親屬遠地ニ在テ物品ヲ送付スルニ入費ヲ要スルモノハ其物品ヲ販賣シテ代價ヲ遞付スルコトヲ得但其送費ハ親屬ノ自辨トス

若シ其物件又ハ代價ヲ受クヘキ者ナキトキハ之ヲ沒収ス

第三十四條 在監人逃走スル者アル時領置ノ貨物ハ前條ノ例ニ依テ處分スヘシ但沒収ハ逃走ノ日ヨリ滿一箇年ヲ經ルノ後ニ非サレハ之ヲ處分スルコトヲ得ス

領置ノ工錢ハ第五十七條ニ照シテ處分スヘシ

第三十五條 監獄ノ近境ヨリ發火シテ罹災ノ虞アルトキハ司獄官吏其形勢ヲ量リ在監人ヲ他所ニ押送シ其災ヲ避シムヘシ

水火風震其他激甚ナル變災ニ際シ在監人ヲ押送スルノ追ナキトキハ要犯疑獄ニ係ル者ヲ除クノ外一時解放スルヲ得

第三章 監獄ノ構造

第三十六條 留置場監倉懲治場拘留場懲役場ハ每府縣ニ置キ集治監ハ適當ノ地ニ之ヲ

置クモノトス

留置場監倉懲治場拘留場懲役場一區畫内ニ在ルモノハ牆壁ヲ以テ之ヲ區畫スヘシ

第三十七條 未決監已決監及ヒ懲治場ハ男監女監ノ別ヲ嚴劃スヘシ

甲ノ監房ニ在ルモノト乙ノ監房ニ在ル者ト彼是交談シ又ハ物件ヲ交遞スルノ便ヲ得サラシムヘシ各監房ノ鑰匙ハ其製式ヲ同シク甲乙適用スルヲ要ス

第三十八條 密室ハ監倉ニ設ケ他人ト交通スルコトヲ得サラシムヘシ

閤室ハ已決監ニ設ケ暗ニ空氣ヲ通セシメ毫モ光線ヲ通セシメサルヲ要ス密室閤室ハ一室一人ヲ限トス

第三十九條 接見室ハ監舍ノ首部ニ設ケ其壁面ニ方三尺ノ口ヲ開キ之ニ縱横ノ格子ヲ嵌メ格子ヨリ三尺許ヲ距リ柵欄ヲ設ケ在監人ハ格子内ニ立シメ外人ハ格子外ノ柵欄ニ倚ラシムヘシ但懲治人ノ接見室ハ此例ヲ用ヒス

第四十條 燈火ハ監房外ニ置キ障得スルノ虞ナカラシムヘシ

第四十一條 死刑場ハ監獄ノ一隅ニ設ケ牆壁ヲ以テ外見ヲ防クヘシ

第二編

第一章 役法 附時限

第四十二條 定役ニ服スル者ノ作業ハ刑名ニ因テ之ヲ斟酌シ每囚一ノ科程ヲ定メテ

服役セシム滿十二歳以上十六歳未滿ノ者滿六十歳以上ノ者及ヒ病後ノ疲勞若クハ身體ノ虛弱ニ因リ勞作ニ勝ヘサル者ハ體力ニ應シ作業ノ科程ヲ寛恕ス

若シ己ムヲ得ス外役ニ服セシムルトキハ鐵鎖ヲ用テ二囚毎ニ聯絆シ笠ヲ用テ晴雨ヲ其面ヲ掩ハシム但外行ノ囚徒ハ一組十人以上十五人以下ト定メ看守一人押丁二人以上ヲシテ之ヲ監セシム

外役ノ囚徒道路往來スル時ハ務メテ他人通行ノ妨ト爲ラサシムルヲ要ス

第四十三條 毎日囚徒ヲシテ役ニ就カシムルニ際シ悉ク之ヲ監房外ニ整列セシメ看守長及ヒ看守點檢ヲナスヘシ歸監セシムル時モ亦同シ

第四十四條 左ニ記載シタル日ハ服役ヲ免ス父母ノ喪ニ遭フ者モ亦一日免役ス

一月一日 一月二日

元始祭 孝明天皇祭

紀元節 春季皇靈祭

神武天皇祭 秋季皇靈祭

神嘗祭 天長節

新嘗祭 十二月卅一日

第四十五條 囚徒ノ專習スヘキ工業ハ授業手若クハ工業殊等ノ囚ヲシテ之ヲ導カシム

其刑期一年以下ノ者ニハ習熟シ易キ工業ヲ授ルヲ要ス

第四十六條 定役ニ服セサル囚徒ト雖モ典獄之ヲ勸誘シテ其將來ノ生業ヲ計リ攝生又ハ親屬扶助ノ爲メ勞作セシト請フニ至ラシムルヲ要ス其工業ノ種別ヲ定ムルハ典獄ノ指示ニ依ル

未決監ニ在ル者坐作ノ業ヲ爲サント請フトキモ亦同シ

第四十七條 徳治人ニハ教誨ニ充ル爲メ服役時間表ニ準シ七時ニ過キサル時間 休憩時間ヲ附 農業若クハ工藝ヲ教ヘ力作セシムヘシ

○時限

第四十八條 未決者及ヒ定役ニ服セサル己決囚ハ毎朝日出ノ頃ニ起床シ各其監房ヲ掃除シ畢リ喫飯セシム又毎日一時間以内監房外ニ於テ運動ヲ許ス

第四十九條 定役ニ服スル者ハ毎朝日出ノ頃ニ起床シ各其監房ヲ掃除シ畢テ喫飯セシム其起床ヨリ約于一時間ヲ經テ役ニ就カシメ午前十時前後ニテ湯若クハ水ヲ與ヘ正午十二時ニ至リ休役ス飯後暫時休憩シ再ヒ就役日没前罷役セシム其時間ハ別表ニ之ヲ定ム但時宜ニ由リ其時間ヲ伸縮スルヲ得

起床還房及ヒ就役罷役其他ノ動止ヲ命スルハ鈴若クハ柝ヲ以テシ全監一齊ニ動止セシム

第五十條 科程ヲ終リタル者ハ時間ニ拘ハラス罷役セシム
午飯ニ就カシムルノ際科程ノ大半ヲ爲シ得タルヤ否ヲ驗視スヘシ若シ偷懶ニシテ怠
役スル者ハ飯後ノ休憩ヲ許サス

第二章 工錢

第五十一條 定役ニ服スル囚徒現役一百日ヲ經レハ始テ各自ノ工錢ヲ料定シ之ヲ十分
シテ重罪囚ニハ其一分輕罪囚ニハ其二分ヲ與ヘ餘分ハ之ヲ監署ニ収ム
定役ニ服セサル囚徒及ヒ未決監ニアル者並ニ第十九條第一款ニ記載シタル懲治人ニ
シテ作業スル者ノ工錢ハ十分シテ其三分ヲ監署ニ収メ其七分ヲ與テ定役ニ服スル囚
徒ニシテ當日ノ科程ヲ畢テ仍ホ作業スル者科程外ノ工錢ハ之ニ準ス(本條中圓點ノ
三十一字明治十四年十二月第九十號達追加)

第五十二條 尊屬親ノ情願ニ由テ懲治場ニ入りタル者其尊屬親ヨリ衣食費ヲ自辨スル
者ノ工錢ハ其全分ヲ與ヘ衣食費ヲ自辨スル能ハサズ者及ヒ刑期滿限ノ後頼ルヘキ所ナ
クノ監署傍ノ別房ニ留置シタル者ハ其工錢ノ内ヨリ衣食費ヲ扣除シ餘分ハ之ヲ與フ
第五十三條 在監人ニ與フヘキ工錢ハ監署ニ領置シ毎月ノ首ニ於テ其前月ノ總計金額
ヲ本人ニ知ラシムヘシ

第五十四條 各種ノ工錢ハ其地普通ノ傭工錢ヲ準トシ各自ノ技能ニ應ジ一日若干錢ト

定ムヘシ

第五十五條 監署ニ領置ノ工錢ハ本人ノ請ニ由リ親屬ニ贈與スルヲ許シ又ハ書籍其他
必用ノ物品及ヒ第六十九條ニ從ヒ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルコトヲ得
第五十六條 在監人死亡シ監署ニ領置ノ工錢アルトキハ親族ニ下付ス親族ナキトキハ
遺骸ヲ領取シタル故舊ニ下付ス若シ下付ヲ受クヘキモノナキハ之ヲ沒收ス
第五十七條 在監人若シ逃走シタル片ハ已決囚ノ工錢ハ之ヲ沒收ス未決者及懲治人ノ
工錢ハ其親屬ニ下付ス親屬無レハ之ヲ沒收ス

第三章 徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ヲ受タル囚徒押送

第五十八條 徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ヲ受タル者アルトキハ其宣告書ノ謄書ヲ具シテ内
務卿ニ申報シ其指揮ニ從ヒ警察遞傳ヲ以テ集治監ニ押送スヘシ

北海道集治監ニ於テ管束スヘキ徒流刑ノ囚徒ハ本監官吏ノ臨時派出シタル地マテ押
送スヘキモノトス

第五十九條 北海道ニ在ル集治監ハ毎歲三四次官吏ヲ派出シ前條第二款ノ例ニ從ヒ押
送シタル徒流刑ノ囚徒ヲ受取ヘシ

第六十條 徒刑流刑ノ囚徒ヲ押送スル時ハ戒具ヲ用ヒ男囚ト女囚トヲ別ツヘシ遞送中
ニ在テハ戒具ヲ用ヒサルモ妨ナシ

第四章 假出獄免幽閉ノ者ニ貸與スル屋舎

第六十一條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者其地ニ居住スヘキ家ナキトキハ屋舎ヲ貸與スヘシ

屋舎ヲ構造スルハ將來市街村落ヲ創設スルノ便ヲ計畫スルヲ要ス

第六十二條 假出獄免幽閉ヲ受ケタル徒刑流刑ノ者其配偶者又ハ其他ノ親屬ヲ招キ同居セント請フトキハ典獄將來營生ノ方法ヲ取糺シ之ヲ許否スヘシ

前項ノ請ヲ許ストキハ其配偶者又ハ其他ノ親屬現住スル地ノ戸長ニ通告スヘシ其徒刑流刑ノ者嫁娶ヲ爲サントスルトキハ監署ニ申告セシメ典獄之ヲ許否スヘシ

第三編
第一章 給與

第六十三條 己決囚ノ獄衣類ハ總テ之ヲ貸與ス

第六十四條 未決者ノ衣類ハ總テ自辨トシ臥具ハ之ヲ貸與ス若シ臥具ヲ自辨セント請フ者ハ之ヲ許ス貧困ニシテ衣類ヲ自辨スルコト能ハサル者ニハ之ヲ貸與ス

第六十五條 己決囚ノ獄衣ハ赭色トシ懲治人ノ衣服ハ淺葱色トス

第六十六條 獄衣ハ總テ筒袖トシ長短二種ニ分ツ男ノ通常服ハ長衣就役服ハ短衣トシ女服ハ總テ長衣トス

獄衣ノ外襟ニハ白布ヲ縫着シ之ニ番號ヲ墨書スヘシ
第六十七條 在監人ニ貸與スル衣類雜具

通常服

- 一 單衣
- 一 袴
- 一 綿入衣
- 一 襦袢
- 一 就役服
- 一 單短衣
- 一 袴短衣
- 一 綿入短衣
- 一 襦袢
- 一 股引
- 一 雜具
- 一 蒲團
- 一 蚊帳

- 一莞鞋
- 一枕
- 一帯長三尺
- 一褌長三尺
- 一手巾
- 一蓑
- 一笠

以上ノ貸與品ハ地方ノ便宜ニ依リ之ヲ斟酌取捨シ澁濯補綴シテ其用ニ充ルヲ得

第六十八條 在監人一人一日ノ食糧

- 一 下白米十分ノ四
- 一 挽割麥十分ノ六

強キ力業ニ服スル者

- 一 同
- 一 同
- 一 同

輕キ力業ニ服スル者

- 一 同
- 一 同

工役ニ服セサル者及ヒ

- 一 同

滿十歳以上ノ未決者

- 一 菜

十歳未滿ノ幼者

地方ノ便宜ニ依リ粟稗ノ類ヲ以テ麥ニ代用スルヲ得

第六十九條 王業ニ勉勵シテ食費ヲ償フヘキ工錢ヲ得ル者及ヒ其幾倍ヲ得ル者等ニハ

其請ニ由リ領置シタル工錢ヲ以テ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルコトヲ得但一日金三錢ヲ過ルコトヲ得ス

定役ニ服セサル者ニハ其請ニ由リ領置シタル工錢ヲ以テ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルコトヲ得但一日金五錢ヲ過ルコトヲ得ス

第七十條 在監人日用ノ雜費 澁濯補綴又ハ炊用ノ薪炭 其他一身ニ係ル日常諸費ハ一人一日金壹錢貳厘以下トス

第七十一條 監房常置ノ器具

- 一 貯水器并ニ飲器 木製
- 一 唾壺 同
- 一 便器 木製大小二種但監房ニ厠圖ノ接續スルモノニハ此器ヲ用ヒス
- 一 小箒 草ノ種類ヲ以テ製作セシ軟カナルモノ
- 一 洗手盆 木製

第七十二條 浴湯ノ定度ハ毎年六月ヨリ九月マテハ五日毎ニ一次十月ヨリ五月マテハ十日毎ニ一次トス

第七十三條 已決囚及ヒ懲治入ノ髮ハ常ニ之ヲ短薙シ髭鬚アル者ハ常ニ剃除セシム但未決者ハ此限ニ在ラズ 婦女ノ梳髮ハ膏ヲ用ヒテ裝飾スルヲ許サズ

第七十四條 衣類雜具其他ノ物品ハ種質ニ由リ時々熱湯ヲ用ヒテ之ヲ澀ヒ臭氣ヲ去リ
蟲害ヲ防クヲ要ス但病者ノ物品ト混一シテ之ヲ晒洗スヘカラス

第二章 疾病 附死亡

第七十五條 在監人疾病ニ罹レハ病狀ノ輕重ヲ料リ其監房若クハ病室ニ於テ醫療セシ
ム

懲治場ニ在ル者ハ情狀ニ由リ其親屬ニ交付スルコトヲ得

第七十六條 病者ノ攝養ニ効アル飲食物又ハ温ヲ取ル湯婆等ヲ用ルコトヲ要スルトキ
ハ醫師ヲシテ其旨ヲ證明セシメ典獄之ヲ考檢シテ許否スヘシ

第七十七條 傳染病侵襲ノ兆アルトキハ其消毒豫防ヲ慎重ニスヘシ若シ在監人中傳染
病者アルトキハ直ニ病性及ヒ感染ノ形狀ヲ詳悉シ醫師ノ診察書ヲ副ヘ各其所屬長官
ニ報告スヘシ

○死亡

第七十八條 在監人死亡スレハ典獄看守長醫師并葎テ之ヲ驗屍スヘシ

未決者又ハ已決囚ニシテ別故アリ再ヒ訊問ニ係ル者死亡シタルトキハ之ヲ其裁判所
ニ申報スヘシ

第七十九條 死者ノ親屬若クハ故舊第三十三條ニ記載シタル期限ヨリ廿四時以内ニ在

テ遺骸ヲ下付テ請フトキハ之ヲ許シ其者ヲシテ簿冊ニ署名押印又ハ花押セシムヘシ
遺骸ヲ請フ親屬故舊ナキトキハ棺ニ入テ假葬シ其上ニ氏名標ヲ建ツヘシ其標ハ約テ
面三寸長三尺五寸トス

第三章 書信

第八十條 已決囚其親屬故舊ニ信書ヲ贈ルハ六箇月間ニ一次トシ一通ニ過ルコトヲ得

ス但其他官司ノ訊問等ニ由テ書信ヲ要スルトキ又ハ親屬故舊ニ回答セント請ヒ司獄
官吏ニ於テ法律ニ觸ルコトナク且用ト認メタルトキハ此限ニ在ラス

第八十一條 未決者ニ係ル信書ハ定限ナシ但豫審判事又ハ檢事ノ檢閲ヲ經ルニ非レハ
贈答セシムルヲ得ス

第八十二條 懲治人及ヒ幼年ノ已決囚其親屬故舊ニ贈ル信書ハ一箇月一次トシ一通ニ
過ルコトヲ得ス

第八十三條 在監人ノ發スル信書ハ典獄之ヲ檢閱スヘシ若シ書中忌諱ニ涉ル等ノ文意
アルトキハ通信ヲ許サス

第八十四條 外人ヨリ在監人ニ贈リ來タル信書ハ典獄之ヲ檢閱シ適正ノ事項ヲ陳ヘ又
ハ遷善ノ諭示ヲ主トシタルモノニ限り之ヲ本人ニ付與ス若シ在監人ノ改悛ヲ妨ルモ
ノト認ルトキハ之ヲ付與セス

第八十五條 信書ヲ檢閲スルハ先ツ直行ヲ順讀シ次ニ逆讀斜讀又ハ橫讀シ嫌疑ノ文意アリヤ否ヲ詳查スヘシ

第八十六條 在監人ヨリ發スル信書ハ必ス書信紙ヲ用ヒシメ典獄之ヲ緘シ封皮ニ其受領スヘキ者ノ住所氏名ヲ書シ某監獄署ト記シテ送遞ス但郵便稅ハ自辨セシム親屬故舊若クハ辨護人ノ信書ハ監獄署ニ宛テ之ヲ差出サシムヘシ

第四章 接見

第八十七條 在監人ニ接見セント請フ者アルトキハ典獄先之ニ面接シテ其氏名族籍營業等ヲ訊ヒ其緣由ヲ詳悉シ己ムヲ得サル事狀アリテ形跡ノ疑フヘキトキハ之ヲ許シ看守長看守並掖テ面會セシム但密室ニ在ル者ハ接見ヲ許サス面會ノ時間ハ三十分時ヲ過ルヲ得ス若シ面會ヲ請ヒシ旨趣ニ違フ談話ヲナシタルトキハ直ニ之ヲ停止ス

第八十八條 死刑ノ執行及ヒ徒刑流刑禁獄ノ刑ヲ受タル囚徒ヲ集治監ニ押送ノ以前親屬故舊其囚徒ニ面會セント請フトキハ前條第一項ノ例ニ依テ之ヲ許ス但面會時間ハ五十分時ヲ過ルヲ得ス

第五章 差入品

第八十九條 未決者及ヒ懲治人ニ其親屬故舊ヨリ書籍用紙衣服臥具又飲食物炊煮ヲ要セサルモ

ノニシテ一人一ト贈テト請フトキハ之ヲ許ス但酒又ハ煙草其他攝生ニ害アルモノハ此限ニ在ラス

第九十條 己決囚ニハ書籍用紙ノ外一切差入品ヲ許サス

第九十一條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者親屬故舊ヨリ金錢衣服夜具等ノ寄贈ヲ受ケタルトキハ其旨ヲ典獄ニ申告セシムヘシ

第四編

第一章 教誨

第九十二條 己決囚及ヒ懲治人教誨ノ爲メ教誨師ヲシテ悔過遷善ノ道ヲ講セシム

第九十三條 教誨ハ免役日又ハ日曜日ノ午後ニ於テ其講席ヲ設ケモノトス

第九十四條 懲治人ニハ毎日三四時間讀書習字算術度量圖畫等ノ科目中ニ就キ之ヲ教フヘキモノトス

學科ハ懲治場ノ教場ニ於テ之ヲ研究セシメ其學業ノ進歩ヲ表スル爲メ就學ノ年月卒業ノ科目學業ノ優劣及ヒ行狀ノ良否氏名年齢等ヲ簿冊ニ記載シ巡閱官吏ノ檢閲ニ供シ又ハ其尊屬親ニ示スコトアルヘシ

第九十五條 各監房内ニ左ノ諸欸ヲ揭示シ傍訓釋義シテ解シ易カラシムヘシ若シ文字ヲ識ラサル者アレハ入監ノ時ヨリ二十四時内ニ於テ之ヲ讀ミ聽カスヘシ

揭示

- 一 在監人ハ常ニ命令ヲ謹守スヘシ
- 一 平日互ニ和順ヲ主トシ教誨聽聞ノ席ニ就ク時ハ慎テ容止ヲ正フスヘシ 未決監ニハ此款ヲ除ク
- 一 毎朝父母若クハ其墳墓所在ノ方位ニ向テ禮拜スヘシ
- 一 毎朝常用ノ諸器具ヲ清潔ニシ之ヲ排列シテ點檢ヲ受メ及ヒ席壁厠間等ヲ掃除スヘシ
- 一 窓壁若クハ物件ヲ汚損シ不淨器ノ外へ唾キ貯水ヲ濫用スルヲ禁ス
- 一 監外ニ出タル時其途上ニ於テ全往ノ者ト交談シ及ヒ手ヲ交ヘ或ハ路人ニ聲語スルヲ禁ス
- 一 夜間ハ最モ鎮靜ヲ主トシ說話或ハ發聲又ハ濫リニ起步スルヲ禁ス但晝間ト雖モ放歌喧噪又ハ高聲ニ誦讀スルヲ禁ス
- 一 許可ヲ得サル物品ヲ監房ニ置キ或ハ勝負ヲ競ヒ若クハ賭博類似ノ惡戯ヲナシ或ハ同房ノ者ニ汚辱ヲ被ラシメ猥褻ニ涉ルカ如キ所爲アルヲ禁ス
- 一 服役中其作業ニ關セサル他事ヲ交談シ及ヒ休憩ノ時間部外ノ工場ニ至ルヲ禁ス未決監ニハ此款ヲ除ク
- 一 許可ヲ得スシテ衣食其他ノ物件ヲ受與貸借スルヲ禁ス

- 一 監房ニ於テ異常ノ事ヲシハ晝夜ニ拘ラズ直ニ看守所ニ通報スルヘシ
- 一 日没後ハ發病スルモ其症急劇ナルニ非レハ翌朝ニ至テ醫檢ヲ乞フヘキモノトス若シ劇症ナルトキハ直ニ看守所ニ通報スヘシ
- 一 獨居ノ者卒カニ病ヲ發シヨルトキハ監房ヨリ看守所ニ架スル所ノ響器繩ヲ引キ以テ之ヲ報スヘシ
- 一 病者アルトキハ同房ノ者共ニ介保ニ力ヲ致スヘキハ勿論其看病人タラシムル者ハ切實ニ之ヲ看病スヘシ
- 一 水火風震等ノ際解放ニ遭フ者ハ其解放ノ時ヨリ二十四時内ニ監獄署又ハ警察署ニ其戸ヲ申出ツヘシ
- 右ノ諸款ニ違フ者及ヒ違フ者アルヲ知テ告ケサル者又ハ官吏ヨリ犯者ヲ問フニ當リ之ヲ舉ケサル者ハ其情狀ヲ量リ處分スヘキモノナリ

第二章 賞譽

某 監 獄 署

第九十六條 己決囚獄則テ謹守シ且改悛ノ行爲著キ者ト典獄ニ於テ確認スルトキハ之ヲ賞譽スヘシ

第九十七條 賞譽セシ者ニハ賞譽セシ毎ニ之ヲ表スル爲メ獄衣ノ左袖(肩臂間ノ表面)

ニ方二寸^尺曲

ノ淺葱色ノ布ヲ縫着スヘシ

第九十八條 賞表ハ假出獄免幽閉又ハ特赦ヲ具狀スルノ考據ト爲スヲ得

第九十九條 賞表ヲ得タル者ニハ二個月ニ一次親屬故舊ニ接見及ヒ通信スルヲ許ス

第百條 己決囚若シ在監人ノ逃走ヲ密告又ハ捕得シ或ハ監獄ニ係ル水火災ヲ防禦シ人

命ヲ救援シタル者アレハ金二十五錢以下ヲ賞與シ其賞金ハ監署ニ領置シ本人ノ請ニ

由リ必需品又ハ食物ヲ購求スヘシ但第九十七條ノ賞表ヲ與フルノ限ニ在ラス

第百一條 未決監ニ在ル者前條ノ勞動アルトキハ之ヲ録シテ檢察官及ヒ裁判官ノ參考

ニ供スヘシ

第百二條 懲治人第百條ニ適シタル勞動アルトキハ金二十五錢以下ヲ以テ適宜物品ヲ

購ヒ之ヲ與フヘシ

第一章 懲罰

第百三條 己決囚獄則ヲ犯ストキハ其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從テ處罰ス

一 絶信 親屬故舊ト書信接見ヲ絶ス

二 屏禁 晝夜他ノ監房又ハ工場ト隔絶シタル監房ニ獨居セシメ服役時限表ニ照シ

テ座作ノ役ヲ科ス

三 減食 常食ノ半若クハ其三分ノ二ヲ減シ鹽湯ニ品ノ外菜ヲ與ヘス

四 閤室 閤室ニ入レ常食ノ半若クハ其三分ノ二ヲ減シ鹽湯ニ品ノ外菜ヲ與ヘス仍

ホ臥具ヲ禁ス

第百四條 絶信屏禁ハ有限若クハ無限ト爲シ減食閤室ハ晝夜ヲ限トス減食閤室晝

夜ニ滿ルモ改悛ノ狀ナキトキハ一旦之ヲ免シ更ニ之ヲ科スルコトヲ得

第百五條 懲治人及十六歳未滿ノ己決囚獄則ヲ犯スルハ其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從テ處罰ス

一 獨愼 晝夜一室ニ獨居セシム

二 減食 常食ノ半以內ヲ減ス但菜ヲ減スルノ限ニ在ラス

第百六條 獨愼ハ晝夜以內減食ハ三日以內トス

第百七條 未決者及ヒ拘留ノ刑ヲ受ケシ者教令ニ順ハス或ハ同監ノ者ヲ煽惑シ又ハ其

他ノ規則ヲ犯ス時ハ所犯ノ輕重ヲ量リ第百三條第百五條ニ準擬シ減食スルコトヲ得

第百八條 賞表ヲ有スル者處罰ヲ受タルトキハ賞表一箇又ハ數箇ヲ褫奪ス

第百九條 無期徒刑ノ囚徒逃走シ若クハ獄舎獄具ヲ毀壞シ又ハ暴行脅迫ヲ爲シ其他重

罪輕罪ヲ犯シタルトキハ三月以上五年以下兩脚又ハ一脚ニ鈐ヲ施シ仍ホ鐵丸ヲ屬シ

タル鐵索ヲ其鈐ニ貫キ腰間ニ線帶セシメ線帶ノ所ニ下鍵ス但監房ニ在ルモ晝間ハ之

ヲ施スモノトス

若シ再ヒ重罪ヲ犯シタルトキハ五年以上十年以下前項ノ例ニ照シテ處罰ス

鐵丸ノ量ハ二百目以上一貫目以下トシ被罰者ノ體力ニ應シテ之ヲ施ス丸ハ索尾ニ屬シ地上ヲ轉ハス者トス其外役ニ服スルトキハ鐵丸ヲ除キ二人聯絆ノ法ニ從フ

第百十條 減食或ハ閤室ノ罰ニ處スヘキ者アルトキハ醫師ヲシテ診視セシメ身體ニ妨ナキトキヲ證シテ後之ヲ行フヘシ

第百十一條 屏禁減食閤室又ハ獨愼ノ罰ニ處シタル後ハ典獄若クハ看守長時々其動靜ヲ觀察シ狀況ニ由リ醫師及ヒ敎誨師ヲシテ之ヲ問ハシムルコトアルヘシ

第百十二條 罰則ニ處セラレタル者改悛ノ狀著ル、トキハ之ヲ免スルコトヲ得

第百十三條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者監署ノ命令ニ違背シタルトキハ七日以下之ヲ拘置スルコトヲ得

〔 〕ヲ施ス者ハ總テ朱書

〔典獄(檢印)〕

懲治人名籍

主檢

書記(氏名印)

本出生地管
 氏名籍地管
 年氏族出本
 齡名籍地管

〔國郡(町村)番地住何某(男弟女孩)〕
 〔何國郡(町村)產〕
 〔族籍〕
 〔何某〕
 某年某月某日生
 當何年何月何年何月

懲治人及ヒ屬親ノ營業	懲治人ノ營業 主願者タル尊屬親ノ營業
親屬	〔父母兄弟及配偶者等ノ有無〕
入場ノ年月日	〔明治何年何月日午(前後)第何時入場〕
入場ノ事狀	
身材	〔長何尺何寸何分肥瘠強弱〕
容貌音聲	〔面體眉毛耳目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態其他痘斑、瘰癧、黑痣、癩風、天皰、創瘻ノ類及ヒ音聲ノ高低ヲモ細緻ニ具載ス〕
教育及宗門	〔入場ノ時文字ヲ知ルヤ否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス〕 〔入場後進學ノ景況〕 〔何宗或ハ宗門不詳〕
入場中ノ賞罰	〔明治何年何月日何ノ賞罰ヲ行フ〕
書信贈答ノ月日	〔何年何月日何國郡(町村)住親屬若クハ朋友ニ書信(發來)〕
懲治場ニ留置ノ宣告ヲナセシ裁判所	〔明治何年何月何日某裁判所ニ於テ若干年月日留置ノ宣告〕

養ニ處斷ナ 時ハ其事由	事 變	放 還	〔典獄(檢印)〕 未決者名籍	本 出 生 管地籍名	年 氏 族 管地籍名	營業及ヒ親屬	乳 兒 提 携	入 監 ノ 年 月 日 時 及 ヒ 罰 件	身 材
〔犯由ノ大畧及ヒ其裁判所〕	〔明治何年月日病死或ハ變死或ハ逃走或ハ他監ニ移ス〕	〔明治何年月日某家ニ放還〕	主 檢 書記 (氏 名 印)	〔某管下國郡(町村)番地住又ハ何某子弟妻女〕 〔何國郡(町村)産〕 〔族籍〕	〔某年 月 日 某〕 〔當何年何月何年何ヶ月〕	〔營業ヲ詳記ス可シ〕 〔父母兄弟及ヒ配偶者子孫ノ有無〕	〔男或ハ女〕 〔何或ハ何〕 〔何或ハ何〕 〔何或ハ何〕	〔明治何年月日午前(後)第何時入監何罪ヲ犯ス〕	〔長何尺何寸何分瘠肥強弱〕

容 貌 音 聲	教 育 及 宗 門	入 監 中 ノ 行 狀	書 信 ノ 贈 答 ヲ 許 ス 月 日	當 該 官 ノ 氏 名	責 保 付 釋	事 變	終 結	〔典獄(檢印)〕	本 出 生 管地籍名	年 氏 族 管地籍名
〔面體眉毛耳目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態其他痘斑、瘰癧、 黑痣、癩風、天皰、創癩ノ類及ヒ音聲ノ高低ヲモ細緻ニ具辨ス〕	〔文字ヲ識ルヤ否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス〕 〔何宗或ハ宗門不詳〕		〔明治何年月日何國郡(町村)住親屬若クハ朋友ニ書信(發來)〕	〔裁判長ノ氏名死刑ハ裁判長ノ外其行刑ヲ臨監セシ官吏ノ氏名〕	〔明治何年月日保釋若クハ責付〕	〔明治何年月日病死或ハ變死或ハ脱監〕 〔明治何年月日放免若クハ刑ノ宣告執行 又ハ他監押送〕	己決囚名籍	〔某管下國郡(町村)番地住又ハ何某子弟妻女〕 〔族籍〕	〔何國郡(町村)産〕	〔某年 月 日 某〕 〔當何年何月何年何ヶ月〕

營業及ヒ親屬	〔營業ヲ詳記スヘシ〕 〔父母兄弟及ヒ配偶者子孫ノ有無〕
乳 提	〔男若クハ女〕 〔收監ノ時何歳何ヶ月〕 〔父母ニ先テテ出監シ或ハ死去シタルトキハ之ヲ詳記ス〕
刑名及ヒ宣告ノ月日裁判所ノ名稱	〔何刑若干年月日〕 〔明治何年月日何裁判所ニ於テ宣告〕
收監ノ年月日	〔明治何年月日午(前後)第何時入監〕
犯由ノ大略及ヒ犯數	〔財物ヲ窃取シ或ハ人ヲ毆傷スル等犯罪ノ大略ヲ記ス若シ再三犯ナレハ往年何罪ヲ犯シ某裁判所ニ於テ何刑ニ處セラル〕
身 材	〔長何尺何寸何分肥瘠強弱〕
容貌音聲	〔面體眉毛耳目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態其他痘斑、瘰癧、黑痣、癩風、天鰲、創瘻ノ類及ヒ音聲ノ高低ヲモ細緻ニ具載ス〕
教 育 及 宗 門	〔文字ヲ識ルルヤ否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス〕 〔何宗或ハ宗門不詳〕
入監中ノ賞罰	〔明治何年月日何ノ賞罰ヲ行フ〕
書信贈答ノ年月日	〔明治何年月日何國郡(町村)住親屬若クハ朋友ニ書信(發來)〕

假出獄免幽閉	〔明治何年月日何日假出獄或ハ免幽閉〕
事 變	〔明治何年月日病死或ハ變死或ハ脱監或ハ何罪ヲ犯シ復タ未決監ニ入ル〕
終 結	〔明治何年月日滿期放免又ハ特赦〕

假出獄ノ證票

某管下國郡村番地住又ハ何某子弟妻女

族 籍

何 某

某年某月某日生
明治何年何月何年何ヶ月

身 材

名籍ノ標本ニ倣ヒ詳記スヘシ

容 貌

土ニ全シ

罪 質 犯 數

刑 名 刑 期

第六類 治罪法 監獄則

及ヒ附加刑

何年月日某裁判所ニ於テ宣告ヲ受
タ何年月日ヨリ執行何年月日満期

一此者ハ假出獄ノ裁可アリタルヲ以テ本日出獄ヲ許シ何地ヲ通過シ居住スヘキ何
地ヘ約テ何日迄ニ到着シテ即時其地ノ警察官ニ届出テ此證書ヲ納メタル上住宅
ヲ定ムヘキ旨申渡シタル事

一此者ハ本刑期限間特別監視ニ付セラレタル事

一此者假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯スコトアルキハ直ニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數
ハ刑期ニ算入セラレサル事

一此者發病其他ノ事變ニ因テ途中ニ滞留スルトキハ滞留地ノ警察官ヨリ其證書ヲ
受ケ居住地ニ到着ノ上此證書ト共ニ居住地ノ警察官ニ差出スヘキ旨申渡シタル
事

右之通心得サセ假出獄ノ証票ヲ與フル者也

明治何年 月 日 署 某監獄署
印 朱 長官何 某印

○假出獄ヲ受ケタル者所有金アルトキハ此証票ノ裏面若クハ欄内ニ左ノ二
款ヲ附記スヘシ

- 一此者ノ所有金ハ當監署ヨリ其居住スヘキ地ノ警察官ニ送り遣シタル事
- 一警察官ヘ送り遣シタル金圓ハ其居住地ニ到着ノ後何日ニテモ受取得ヘキト雖モ
同官ニ於テ正當ノ入用ナリト認定ノ上ニ非レハ一次ニ之ヲ渡サハルヘキ事

料紙半紙

- 一在監人ヨリ其親屬故舊ニ送ル書信ハ此紙ニ書寫スヘシ
- 一書信ノ文句規則ニ背キタルトキハ其送致ヲ止メ仍ホ相當ノ罰ニ處
スルコトアルヘシ

信書人監在○署獄監[某下管何]

五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
五時一分	四時九分	四時十分	五時六分	五時八分	六時二分	六時五分	七時八分
六時一分	五時五十分	五時五十分	六時六分	六時八分	七時二分	七時五分	八時八分
第九時	第九時	第九時	第九時	第九時	第十時	第十時	第十時
十二時	十二時	十二時	十二時	十二時	十二時	十二時	十二時
五時	五時	五時	四時五十分	四時四十分	四時三十分	三時二十分	三時十分
八時五十分	八時四十分	八時三十分	九時五分	九時四分	九時三分	八時四十分	八時三十分
八時五十分	八時四十分	八時三十分	九時七分	九時四分	九時七分	八時五十分	八時三十分
八時五十分	八時四十分	八時三十分	九時七分	九時四分	九時七分	八時五十分	八時三十分

紙○明治年月日

囚徒服役時限表

月名	一月	二月	三月	四月
起床	午前七時	六時三十分	六時六分	五時三十分
就役	午前八時	七時三十分	七時六分	六時三十分
小憩	午前第十時	第十時	第十時	第九時四十分
午飯	正午十二時	十二時	十二時	十二時
罷役	午後三時	三時三十分	四時	四時十分
晚飯	一時二十分	一時三十分	一時五十分	二時五十分
還房	午後四時	五時	五時	六時
服役時間計	六時二十分	六時五十分	七時三十分	八時三十分

約子日出
ノ時刻
以テ起床
ノ時刻ト
ナス然ル
ニ早々
節ニ早晩
アリ日々
分秒ノ差
刻アリ加
フルニ東
國西國
別由テ何
ニ由テモ
レノ地方
ニ於テモ
分秒ノ差
異ナキチ
保ツ能ハ
ス故ニ月
毎ニ大約
之ニ平均
シテ姑ク
其起床時

右ノ時間
ニシテ工
器ヲ併理
及ヒ餐ノ
浴等ヲ爲
サシム
以テ入監
時刻ト
ナス

刻ヲ登載
ス各地方
司獄官此
表ノ區分
ヲ宜ク裁
酌シテ裁
ハシテ役

○第二款 別房留置者犯則處分法

明治十六年十二月第六十二號達

監獄則第三十條ニ依リ監獄中ノ別房ニ留置シタル者及ヒ刑法附則第三十二條ニ依リ別房ニ留置シタル者若シ監内ノ諸則ヲ犯ストキハ監獄則第七條ニ準擬處分ス可シ此旨相達候事

○第三款 賭博犯人服役方

明治十七年一月第十號達

本年第一號布告ニ據リ懲罰ニ處シタル賭博犯人ハ明治十四年九月第八十一號達監獄則第一條第五項禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ニ準シ服役其他ノ方法共總テ該則ニ依テ處分スヘシ此旨相達候事

○第四款 囚人護送手續

明治十五年二月第十號達

內務省開拓使警視廳府縣 東京府

明治六年(十一月)第三百九十一號并同十年(七月)第四十九號ヲ以テ囚人護送規則及ヒ遞傳方相達置候處今般更ニ別冊之通囚人護送遞傳方改正シ本年七月一日ヨリ施行候條從前達中矛盾ノ虞ハ同日限廢止ス此旨相達候事

囚人護送手續

第一條 甲廳ヨリ乙廳又ハ集治監ヘ送移スル囚人ハ囚籍及ヒ處刑宣告書所持ノ物品ヲ併セ沿道警察本分署ニ於テ遞傳護送スヘシ

但一府縣管内本支監獄ノ間ニ護送スル囚人モ其距離十里以外ニ至ルモノハ本文ニ準スルヲ得

第二條 新タニ就捕セシ犯罪人及ヒ諸令狀ニ據リ引致スル刑事被告人又ハ脫走ノ軍人軍屬ノ遞傳護送ヲ要スルモノモ前條ノ手續ニ準スヘシ

但入監後糾問等ノ爲メ所在ノ法衙ニ往復スルハ本條ノ限ニ在ラス

第三條 第一條第二條ノ護送ニ付スル囚人ノ員數及ヒ發出日時ハ其當該官吏ヨリ前以テ沿道警察本分署ヘ遞報スヘシ

第四條 護送囚人ノ數ハ一行十名以下トス護送警吏及ヒ繩取ノ人員ハ適宜タルヘシ

但便利海路ニヨルトキハ適宜囚人ヲ增加スルヲ得

第五條 遞傳護送ハ日出ヨリ日没マテヲ限リトス

第六條 警察本分署ニ於テハ護送囚人ノ郷貫氏名刑名又ハ犯罪見込書ノ要領及著發日時ヲ記載シ置クヘシ

第七條 護送ノ囚人ハ沿道警察本分署ニ宿セシムヘシ若シ支障アルトキハ該地戶長ニ照會シ宿所ヲ定メ適宜取締ヲナスヘシ

第八條 護送途中囚人發病スルトキハ沿道警察本分署ニ付シ治療スヘシ若シ死去スルトキハ該地戶長ニ埋葬ヲ囑シ(引取人アル者ハ之ニ下付ス)醫師ニ死去證書ヲ作ラシメ戶長及ヒ護送警吏連印シ書類物品ヲ併セ送達スヘキ衙署ニ遞付シ仍ホ發出衙署ニ報知スヘシ

第九條 護送途中囚人逃亡スルトキハ先ツ緝捕方ヲ最寄警察本分署ニ報告シ仍ホ發出衙署及ヒ送達スヘキ衙署ヘ報告スヘシ

但第八條及ヒ本文ノ手續ヲ爲スタメ他囚護送ヲ遅緩ス可ラス若シ速ニ手續ヲ了シ難キ場合ハ最寄警察本分署ノ助力ヲ請フコトヲ得

第六類 治罪法 囚人護送手續

第十條 遞傳護送スル警察官吏ノ旅費ハ都テ沿道地方ノ警察費ヲ以テ支辨スヘシ
但繩取ノ備給ハ第十一條第十二條ノ區別ニ依リ囚人ニ屬スル費用中ニテ支辨スヘシ

第十一條 第一條ニ掲クル囚徒ニ屬スル護送中ノ費用ハ明治十四年第十七號布告ニ依リ
リ區分シ集治監ニ送ルトキハ沿道府縣ノ仕拂ニ立テ其他ハ出發府縣ノ監獄費ヨリ支拂フヘシ

第十二條 第二條ニ掲クル各犯人ニ屬スル護送中ノ費用ハ沿道地方警察費ヲ以テ支辨スヘシ

第十三條 (明治十五年十二月第六十八號達改正)護送囚人死歿シ引取人ナキモ其所持
金錢物品(埋葬費ニ足ルモノ)アル者及陸軍下士卒海軍下士卒ノ埋葬費ハ第十一條第十二條
支辨ノ限ニアラス尤其費額ハ都テ拾圓以內タルヘシ但下士卒ノ分ハ進テ陸軍省海軍省ヨリ各自ニ拂戻スヘシ

第十四條 遞傳ニ係ル囚人犯罪人ノ賄費額ハ警察本分署ニ於テハ都テ拘留人ノ例ニ依ル
ルヘシ他ニ宿泊セシムルトキハ一宿三賄臥具點燈手數料ヲ併セテ金貳拾五錢以下一
晝食金七錢以下藥價診察料等ハ實費支辨スヘシ

○第三章 軍律

○第一款 陸軍治罪法 明治十六年八月廿四號布告

陸軍治罪法目錄

第一章 總則	自第一條 至第六條
第二章 軍法會議ノ構成	自第七條 至第十二條
第三章 軍法會議ノ權限	自第十三條 至第二十三條
第四章 陸軍檢察	自第二十四條 至第三十五條
第五章 審問	自第三十六條 至第五十四條
第六章 判決	自第五十五條 至第七十四條

陸軍治罪法

第一章 總則

第一條 陸軍軍人ノ犯シタル重罪輕罪ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス

軍法會議ハ刑事附帶ノ民事ヲ受理セス但官物ノ損害ニ係ルノ賠償ハ此限ニ在ラス

第二條 軍法會議ハ傍聽ヲ許サス但其宣告ヲ爲ス時ハ軍人ニ限リ之ヲ許ス

第三條 軍人ト稱スルハ陸軍刑法第三條第九條ニ掲クル者ヲ謂フ

第四條 司令官ト稱スルハ軍團長師團長旅團長軍管司令官營所司令官及ヒ合團ノ地ノ司令官ヲ謂フ

第五條 普通治罪法第九條第十一條第十三條第十四條第十八條第百條第百一條ノ規則ハ此治罪法ニ於テモ之ヲ適用ス

第六條 歸休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者ハ軍法會議ニ於テ審判ス可キ時ノ外軍人ノ例ニ依ルコトヲ得ズ

第二章 軍法會議ノ構成
第七條 軍法會議ハ各軍管ニ一箇若クハ數箇ヲ設ク

軍中ニ於テハ軍團師團旅團ニ軍法會議ヲ設ク合團ノ地ニモ亦軍法會議ヲ設ク

第八條 軍法會議ニハ判士長判士理事理事補審事補錄事ヲ置ク

第九條 軍法會議ハ佐官一名ヲ判士長ト爲シ尉官三名理事理事補ノ内一名ヲ以テ判士トス

但被告人准士官以上及ヒ同等以上ノ軍人ナル時ハ左ノ表ニ照シテ判士長判士ヲ更フ

判士長	判士	被告人
佐官一名	尉官三名	陸海軍少尉准士官及ヒ同等ノ軍人軍屬
佐官一名	中尉二名 少尉一名	陸海軍中尉及ヒ同等ノ軍人軍屬
中佐一名	大尉二名 中尉一名 少尉一名	陸海軍大尉及ヒ同等ノ軍人軍屬
大佐一名	中佐二名 少佐一名	陸海軍少佐及ヒ同等ノ軍人軍屬
少將一名	中佐二名 少佐一名	陸海軍中佐及ヒ同等ノ軍人軍屬
中將一名	大佐二名 少佐一名	陸海軍大佐及ヒ同等ノ軍人軍屬

中將 一名	中將 少將 二名	陸海軍少將及ヒ同等ノ軍人軍屬
大將 一名	中將 三名	陸海軍中將及ヒ同等ノ軍屬
大將 一名	大將 二名	陸海軍大將及ヒ同等ノ軍屬

第十條 將官ヲ以テ判士長判士ト爲ス時ハ陸軍卿ノ奏請ニ依リ上裁ヲ以テ之ヲ命ス
 佐官ヲ以テ判士長判士ト爲ス時ハ陸軍卿之ヲ命ス尉官ヲ以テ判士ト爲ス時モ亦同シ
 第十一條 軍團長及ヒ獨立師團長ハ部下ノ將校ニ其軍法會議ノ判士長判士ヲ命スルコ
 トヲ得又理事審事缺員スル時ハ部下ノ將校ニ命シテ其職務ヲ行ハシメ錄事缺員スル
 時ハ下士ニ命シテ其職務ヲ行ハシムルヲ得
 臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其司令官部下ノ將校若クハ其地ニ在ル將校中ヨリ撰ミ
 專任判士ヲ置キ被告人ノ官等ニ拘ハラヌ之ヲ審判セシム但將校缺乏ノ場合ニ於テハ
 他ノ官吏ヲ以テ之ヲ補充スルヲ得
 第十二條 軍管軍法會議ニ於テ判士長判士ニ充ツ可キ將校缺員スル時ハ軍管司令官ノ
 上申ニ依リ陸軍卿他ノ將校ヨリ之ヲ命シ若クハ被告人ヲ他ノ軍法會議ニ移シテ其審

判ヲ爲サシム

第三章 軍法會議ノ權限

第十三條 軍法會議ハ其軍管若クハ師管ノ所管地方ヲ以テ管轄ト爲ス
 第十四條 軍人管轄地外ニ於テ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ其地ノ軍法會議ニ於テ之ヲ審
 判スルヲ得
 第十五條 軍人數箇ノ軍法會議ノ管轄地内ニ於テ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ被告人ヲ逮
 捕シタル地ノ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス
 第十六條 軍團師團旅團軍法會議ハ其團所屬軍人ノ犯シタル重罪輕罪ヲ審判ス
 第十七條 俘虜降人ノ犯シタル重罪輕罪ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス
 第十八條 軍人任官若クハ就役ノ前罪ヲ犯シ在官現役中發覺スル者ハ軍法會議ニ於テ
 之ヲ審判ス其在官現役中罪ヲ犯シ免官若クハ免役ノ後發覺スル者ハ司法裁判ニ付ス
 歸休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者召集中罪ヲ犯シ若クハ舊罪發覺スル者ハ軍法會
 議ニ於テ之ヲ審判ス其召集中ノ犯罪解散ノ後發覺スル者ハ司法裁判ニ付ス
 第十九條 軍人二人以上共ニ重罪輕罪ヲ犯シ各其管轄ヲ異ニスル時ハ先キニ審問ニ着
 手シタル軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス海軍軍人軍屬ト共犯ニ係ル時モ亦同シ
 第二十條 軍人ト軍人ニ非サル者ト共ニ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ軍法會議ニ於テ之レ

ヲ審判ス

第二十一條 陸軍刑法ノ罪ヲ犯シタル者ハ軍人ニ非スト雖モ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス餘罪俱ニ發シタル者モ亦同シ

第二十二條 軍法會議ハ重罪輕罪ト俱ニ發シタル違警罪モ亦之ヲ審判ス

第二十三條 軍中若クハ合圍ノ地ノ軍法會議ヲ廢スルニ當リ既ニ審判ニ着手シタル者ハ陸軍卿ノ指定スル軍法會議若クハ其事件ヲ管理ス可キ官司ニ送致ス可シ

第四章 陸軍檢察

第二十四條 陸軍檢察ハ陸軍ニ關スル犯罪ヲ捜査シ證據ヲ拾收ス

第二十五條 左ニ記列スル諸官ハ司令官ノ命令ヲ受ケテ陸軍檢察ノ職務ヲ行フ
要塞副官若クハ衛戍副官
憲兵ノ將校下士
衛兵司令
砲兵工兵ノ監護

砲兵工兵ノ監護

第二十六條 要塞司令官次官衛戍司令官諸隊長分遣隊長及ヒ各諸官ノ長官ハ各其管スル所ノ事ニ就キ犯罪アルコトヲ知リタル時ハ自ラ陸軍檢察ノ處分ヲ爲シ若クハ陸軍檢察官ニ委シテ其處分ヲ爲サシムルコトヲ得

審事其職務ヲ行フノ際現行犯アルコトヲ知リタル時ハ自ラ陸軍檢察ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第二十七條 何人ヲ論セス軍人ノ犯罪ニ因リ損害セラレタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ陸軍檢察官被告人所属ノ長官隊長若クハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得

第二十八條 何人ヲ論セス軍人ノ犯罪アルコトヲ知リタル時ハ第二十七條ニ記載シタル官吏ニ告發スルコトヲ得

第二十九條 陸軍所屬ノ官吏職務ヲ行フニ因リ軍人ノ重罪輕罪ヲ犯ス者アルコトヲ知リタル時ハ其職務ヲ行フノ地ノ陸軍檢察官若クハ被告人所属ノ長官隊長ニ告發ス可シ

第三十條 軍人ノ重罪輕罪現行犯アル時ハ何人ヲ論セス直ニ之ヲ逮捕スルコトヲ得其犯罪人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ陸軍檢察官司法警察官憲兵卒若クハ巡查ニ交付ス可シ

第三十一條 司法警察官憲兵卒及ヒ巡查現行犯ノ軍人ヲ逮捕シ若クハ其交付ヲ受ケタル時ハ速ニ之ヲ陸軍檢察官ニ引致ス可シ

第三十二條 司法警察官軍人ニ係ル告訴告發ヲ受ケタル時ハ速ニ陸軍檢察官若クハ被告人所属ノ長官隊長ニ交付ス可シ

第三十三條 告訴人告發人ハ願下チ爲シ若クハ其陳述ヲ變更セシメテ請求スルコトヲ得

第三十四條 陸軍檢察官軍人ノ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ直ニ犯所ニ

臨檢シ犯罪人ヲ逮捕シ訊問ヲ爲シ其調書ヲ作ル可シ
其引致ヲ受ケタル時モ亦同シ

第三十五條 陸軍檢察官要 司令官次官衛戍司令官諸隊長分遣隊長各所管ノ長官檢察
ノ處分ヲ爲シタル時ハ調書ヲ作り証憑文書ヲ添ヘ之ヲ司令官ニ具申ス可シ
第五章 審問

第三十六條 司令官被告事件ノ具申ヲ受ケタル時ハ左ノ諸項ヲ除クノ外事件ノ難易ニ
從ヒ理事ニ下付シ審事ヲシテ其審問ヲ爲サシメ若クハ直ニ其判決ニ付ス可シ
被告人ト長官以上ナル時ハ軍管司令官ハ之ヲ陸軍卿ニ具申ス可シ
營所ニ於テ被告人士官以上ナル時ハ營所司令官之ヲ軍管司令官ニ具申ス可シ

第三十七條 陸軍卿審問ノ命令ヲ下ス時ハ其事件ヲ司令官ニ交付シ司令官ハ之ヲ理事
ニ下付ス可シ

第三十八條 臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其地ノ司令官被告人ノ官等ニ拘ハラス直ニ
其審問ノ命令ヲ下スコトヲ得

第三十九條 審事審問ヲ爲ス時ハ先ツ召喚狀ヲ發ス其被告人出廷シタル時ハ即日之ヲ
訊問ス可シ

第四十條 審事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セサル時ハ拘引狀ヲ發スルコ
トヲ得

トヲ得

第四十一條 審事ハ重罪被告人ニ對シ又ハ其他ノ被告人罪證ヲ湮滅シ若クハ逃走ノ恐
アル時若クハ未遂罪脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂クルノ恐アル時ハ直ニ拘引狀ヲ發
ス可シ

第四十二條 審事ハ召喚狀若クハ拘引狀ヲ受ケ可キ被告人遠隔ノ地ニ在ル時ハ其地ノ
陸軍檢察官若クハ審事若クハ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十三條 審事ハ召喚狀若クハ拘引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事故アリテ
令狀ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ其所在ニ就テ之ヲ訊問スルコトヲ得若
シ被告人遠隔ノ地ニ在ル時ハ其地ノ審事若クハ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコト
ヲ得

第四十四條 審事ハ被告人ノ所在ヲ覺知スルコト能ハサル時ハ理事ヲ經テ之ヲ司令官
ニ具申ス可シ

司令官ハ各軍管司令官營所司令官及ヒ各控訴裁判所ノ檢事長ニ人相書ヲ送り其逮捕
ヲ求ムヘシ

第四十五條 審事ハ被告人禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト認メタル時ハ收禁狀ヲ發スル
コトヲ得

收禁狀ヲ發シタル後若シ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非ス又其收禁ヲ要セサル者ト認メタル時ハ收禁狀ヲ解ク可シ

第四十六條 審事ハ事實審明ノ爲メ臨檢家宅搜索物件押收ノ處分ヲ爲スコトヲ得其處分ヲ爲ス時ハ錄事之ニ會同シ調書ヲ作ル可シ

若シ其場所遠隔ノ地ニ在ルトキハ其地ノ審事若シクハ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十七條 審事ハ事實審明ノ爲メ驛遞電信鐵道ノ官署及ヒ諸會社ニ事由ヲ通知シテ被告人ニ關係アル往復文書電報及ヒ物件ヲ收受開披スルコトヲ得若シ其場所遠隔ノ地ニ在ルトキハ第四十六條第二項ノ例ニ依ル

第四十八條 審事ハ證人及ヒ通事ヲ呼出スコトヲ得

證人皇族若クハ勅任官ナル時ハ審事其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ

證人疾病其他正當ノ事故アリテ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ審事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

證人若シ遠隔ノ地ニ住スル時ハ其地ノ審事若クハ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十九條 審事ハ被告人及ヒ證人ノ訊問ヲ爲ス時ハ錄事之ニ會同シ調書ヲ作り訊問

及ヒ供述ヲ錄取シ被告人若クハ證人ニ讀示セシメ其陳述シタル所ニ違ハサルヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ記スヘシ

被告人及ヒ證人ハ其陳述ヲ變更増減セントシテ請求スルコトヲ得

第五十條 審事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ要スル時ハ學術又ハ職業ニ因リ鑑定スルコトヲ得可キ者ニ命ジテ其鑑定ヲ爲サシム可シ

鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其方法結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記シ若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記シ署名捺印ス可シ

第五十一條 審事ハ證人鑑定人通事正當ノ事故ヲ證明セシメテ其呼出ニ應セサル時ハ貳圓以上拾圓以下ノ罰金ヲ科ス可シ但審事ハ其證人ニ對シ拘引狀ヲ發スルコトヲ得證人陳述ヲ肯セサル時ハ普通刑法第百八十條ニ依リ又鑑定人鑑定ヲ肯セサル時ハ普通刑法第百七十九條ニ依リ罰金ヲ科ス可シ

第五十二條 證人鑑定人通事ニ罰金ヲ科スル時ハ普通刑法第二十七條ニ從フ但罰金ヲ禁錮ニ換フル時亦審事之ヲ命ス

第五十三條 審事審問ニ於テ餘罪ヲ覺察シタル時ハ直ニ本件ト共ニ審問ス可シ共犯ヲ覺察シタル時ハ理事ヲ經テ之ヲ司令官ニ具申ス可シ

第五十四條 審事審問ヲ終リタル時ハ其報告書ヲ作り意見書ヲ添へ訴訟文書ト共ニ之

ヲ理事ニ交付シ理事ハ意見書ヲ添ヘ之ヲ司令官ニ上申スヘシ

第六章 判決

第五十五條 司令官ハ軍法會議ヲ開ク可キ命令書ヲ判士長ニ下シ其謄本ヲ訴訟文書ト共ニ理事ニ下付シ理事ハ之ヲ判士長ニ交付シ會議ノ日時ヲ判士ニ通報ス可シ

第五十六條 軍法會議ヲ開ク時ハ判士長判士録事各其席ニ著キタル後判士長被告人ヲ出廷セシム

判士長ハ先ツ被告人ノ官位勳等隊號職名氏名族籍年齢ヲ問ヒ訊問ヲ爲スノ旨ヲ告示シ録事ヲシテ審事ノ報告書ヲ朗讀セシム

其朗讀終リタルノ後判士長ハ被告事件ヲ訊問シ若クハ判士ニ命シテ其訊問ヲ爲サシム

第五十七條 判士長ハ開廷ヨリ判決ニ至ルマテ合狀ヲ發スルコトヲ得

判士長ハ法廷ニ於テ警戒ノ爲メ其處置ヲ爲スコトヲ得

法廷ニ於テ罪ヲ犯ス者アル時ハ判士長其處分ヲ爲シ若クハ判士ニ命シテ其處分ヲ爲サシム可シ

法廷ニ於テ證人鑑定人及ヒ通事ヲ要スル時ハ第五章ノ例ニ依ル

第五十八條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人出廷ノ命ニ應セサル時ハ之ヲ引致ス可シ

但疾病若クハ正當ノ事故ニ因リ出廷スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ判士長ハ其審判ヲ延期スルコトヲ得

第五十九條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人逃走シテ審判ノ日時ニ出廷セズ若クハ逃走シテ召喚狀ヲ送達スルコトヲ得サル時ハ闕席裁判ヲ爲スコシ

第六十條 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人召喚狀ヲ受ケ審判ノ日時ニ出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲スコシ

第六十一條 數人共犯ノ審判ヲ爲ス時ハ被告人中闕席シタル者アリト雖モ出廷シタル者ニ對シ審判ヲ爲スコシ

第六十二條 判士長ハ被告人ヲ訊問シタル後證人ヲ訊問シ若クハ判士ニ命シテ訊問セシム可シ

證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト認メタル時ハ判士長ハ收禁狀ヲ發シ更ニ訊問ヲ爲シ若クハ判士ニ命シテ訊問ヲ爲サシメ之ヲ司令官ニ具申ス可シ

其處分ヲ爲シタル時ハ判士長ハ本件ノ審判ヲ延期スルコトヲ得

第六十三條 法廷ニ於テ更ニ檢證ノ處分ヲ要スルコトアル時ハ判士長ハ其處分ヲ爲シ若クハ判士ニ命シテ其處分ヲ爲サシム可シ

法廷ニ於テ共犯ヲ覺舉シタル時ハ判士長ハ之ヲ司令官ニ具申ス可シ
若シ餘罪ヲ覺舉シタル時ハ本件ト共ニ其審判ヲ爲ス可シ但判士長ハ之ヲ司令官ニ具申ス可シ

第六十四條 被告人及ヒ證人ノ訊問終リタル時ハ判士長ハ更ニ被告人ニ對シ他ニ陳述ス可キ事件ナキヤ否ヲ問ヒ訊問終リタルノ旨ヲ告ク被告人ヲ退廷セシム可シ

第六十五條 判決書ハ判士事實ト法律トニ依リ左ノ條件ニ照シテ之ヲ作り判士長判士録事共ニ署名捺印シ判士長之ヲ理事ニ交付ス理事ハ訴訟文書ヲ添ヘ之ヲ司令官ニ上申ス可シ

一 有罪ノ判決書ニハ犯罪ノ證據及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ記ス

二 無罪ノ判決書ニハ被告事件罪ト成ラサルコト及ヒ其理由ヲ記シ犯罪ノ證據備ハラサル時ハ其旨ヲ記ス

三 免訴ノ判決書ニハ公訴ノ期滿免除ト爲リタルコト大赦アリタルコト法律ニ於テ其罪ヲ全免スルコト及ヒ其理由ヲ記ス

四 被告人ノ官位勳等隊號職名氏名族籍年齡住所及ヒ軍法會議判決ノ年月日ヲ記ス
第六十六條 司令官ハ左ニ記列スルノ事件ハ陸軍卿ニ上申シテ命ヲ請ヒ其他ハ之ヲ專決ス但營所司令官ハ士官以上ノ犯罪ハ軍管司令官ニ上申ス可シ

死刑

上長官以上ノ重罪輕罪

士官ノ重罪

第六十七條 司令官其判決ヲ不適當ト思量スル時其專決ノ權アル事件ハ直ニ之ヲ再議セシムルコトヲ得

其專決ノ權ナキ事件ハ意見ヲ附シテ陸軍卿ニ上申ス可シ

第六十八條 陸軍卿ハ司令官ヨリ具申スル所ノ判決ヲ不適當ト思量スル時ハ直ニ司令官ニ下シテ之ヲ再議セシムルコトヲ得

陸軍卿ハ死刑並ニ上長官以上ノ重罪輕罪及ヒ士官ノ重罪ニ係ル者ハ上奏シテ命ヲ請フヘシ

第六十九條 宣告執行ノ命令アリタル時ハ判士長判士録事法廷ニ臨ミ被告人ヲ出廷セシメテ判士長其宣告ヲ爲ス可シ

第七十條 關席裁判ニ係ル刑ノ宣告書ハ軍法會議ノ門前ニ揭示ス可シ

第七十一條 臨戰若クハ合國ノ地ニ於テハ其地ノ司令官ハ第六十六條ノ權限ニ拘ハラズ直ニ其宣告執行ノ命令ヲ下ス可シ

第七十二條 軍團師團旅團ヲ長若クハ合國ノ地ノ司令官ハ輕罪ノ刑ノ宣告ヲ受ケタル

者ニ戴罪服務ヲ命スルコトヲ得

但戴罪服務ノ日數ハ刑期ニ算入セス

其戴罪服務中功績アル者ハ司令官其刑ヲ減免スルコトヲ得

第七十三條 行刑ニ關スル方法ハ陸軍卿別ニ之ヲ定ム

第七十四條 臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其地ノ司令官ハ時宜ニ依リ此治罪法ノ條目ヲ省略執行セシムルコトヲ得

○第二款 海軍治罪法 明治十七年三月

第八號布告

海軍治罪法目錄

第一章 總則	自第一條 至第六條
第二章 軍法會議ノ構成	自第七條 至第十二條
第三章 軍法會議ノ權限	自第十三條 至第二十三條
第四章 海軍檢察	自第二十四條 至第二十五條
第五章 審問	自第二十六條 至第五十六條

第六章 判決

第七章 軍中處分

自第五十七條
自第七十八條
自第七十九條
至第八十四條

海軍治罪法

第一章 總則

第一條 海軍軍人ノ犯シタル重罪輕罪ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス軍法會議ハ刑事附帶ノ民事ヲ受理セス

第二條 軍法會議ハ傍聽ヲ許サス但其宣告ヲ爲ス時ハ軍人ニ限リ之ヲ許ス

第三條 軍人ト稱スルハ海軍刑法第五十條第五十一條ニ掲グル者ヲ謂フ

第四條 司令官ト稱スルハ艦隊司令官分遣艦隊司令官及ヒ合圍ノ地ノ司令官ヲ謂フ

第五條 普通治罪法第九條第十一條第十三條第十四條第十八條第百條第百一條ノ規則ハ此治罪法ニ於テモ之ヲ適用ス

第六條 歸休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者ハ軍法會議ニ於テ審判ス可キ時ノ外軍人ノ例ニ依ルコトヲ得ス

第二章 軍法會議ノ構成

第六類 治罪法 海軍治罪法

第七條 軍法會議ヲ別テ四ト爲ス

- 一 東京軍法會議
 - 二 鎮守府軍法會議
 - 三 艦隊軍法會議
 - 四 合圍軍法會議
- 東京軍法會議及ヒ鎮守府軍法會議ハ常設ト爲シ艦隊軍法會議ハ臨時艦内ニ之ヲ設ケ合圍軍法會議ハ合圍尙之ヲ設ケ

第八條 軍法會議ハ判士長一名判士四名主理録事各一名若クハ數名ヲ以テ之ヲ開ク判士長ハ佐官ヲ以テシ判士ハ尉官主理ハ奏任官録事ハ七等官以下ヲ以テス若シ被告人陸海軍中尉以上及ヒ同等以上ノ軍人軍屬ナル時ハ左ノ表ニ照シテ判士長判士ヲ更フ

一 被告人陸海軍少將以上及ヒ同等以上ノ軍人軍屬ナル時ハ勅任官ノ主理ヲシテ其職ヲ掌ラシム

判士長	判士	被告	人
佐官 一名	大尉二名若クハ中尉二名若クハ	陸海軍中尉及ヒ同等	軍人
大佐若クハ中佐 一名	少佐二名若クハ大尉二名若クハ	陸海軍大尉及ヒ同等	軍人
大佐 一名	中佐二名若クハ少佐二名若クハ	陸海軍少佐及ヒ同等	軍人

少將 一名	大佐二名若クハ中佐二名若クハ	陸海軍中佐及ヒ同等	軍人
中將 一名	少將二名若クハ大佐二名若クハ	陸海軍大佐及ヒ同等	軍人
中將 一名	中將二名若クハ少將二名若クハ	陸海軍少將及ヒ同等	軍人
大將 一名	中將三名若クハ少將一名若クハ	陸海軍中將及ヒ同等	軍屬
大將 一名	大將 一名	陸海軍大將及ヒ同等	軍屬

第九條 軍人ニ非サル勅任官ヲ審判スル時ノ軍法會議ハ將官ヲ審判スルノ例ニ從フ

第十條 外國又ハ戰地ヘ數隻ノ艦艇ヲ差遣スル時ハ海軍卿ヨリ其先任艦長ニ艦隊軍法會議ヲ開クノ權ヲ付與スルコトアル可シ此場合ニ於テハ此權限司令官ニ同シ

第十一條 將官ヲ以テ判士長判士ト爲ス時ハ海軍卿ノ奏請ニ依リ上裁ヲ以テ之ヲ命ス勅任官ニ主理ヲ命スル時モ亦同シ

佐官ヲ以テ判士長判士ト爲シ尉官ヲ以テ判士ト爲シ奏任官ヲ以テ主理若クハ録事ト爲ス時東京並鎮守府ニ於テハ海軍卿之ヲ命シ艦内ニ於テハ司令官之ヲ命ス可シ但檢察官若クハ審問委員タリシ者ハ其事件ノ判士ニ加フルコトナシ

第十二條 艦隊軍法會議ニ於テ判士長判士ニ充ツ可キ將校缺乏スル時ハ司令官ノ上申

ニ依リ海軍卿他ノ將校ヨリ之ヲ命シ若シハ被告人ヲ他ノ軍法會議ニ移シテ其審判ヲ爲サシム但外國ニ在テハ司令官他ノ官吏ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得

第三章 軍法會議ノ權限

第十三條 東京軍法會議ハ左ニ記列スル者ヲ審判ス

一 鎮守府軍法會議若クハ艦隊軍法會議ノ權限ニ屬セサル軍人其他海軍ノ用ニ供スル船舶ノ乘員重罪輕罪ヲ犯シタル者、二 鎮守府軍法會議若クハ艦隊軍法會議ノ權限ニ屬セス海軍刑法第三條第四條ニ依リ處斷ス可キ者、三 鎮守府軍法會議若クハ艦隊軍法會議ノ權限ニ屬セサル海軍監獄ニ在ル未決既決ノ囚人ノ重罪輕罪ヲ犯シタル者

第十四條 鎮守府軍法會議ハ左ニ記列スル者ヲ審判ス

一 鎮守府長官ノ麾下ニ屬スル軍人其他鎮守府ノ用ニ供スル船舶ノ乘員重罪輕罪ヲ犯シタル者、二 鎮守府ノ所管ニ係リ海軍刑法第三條第四條ニ依リ處斷ス可キ者、三 鎮守府所管ノ監獄ニ在ル未決既決ノ囚人重罪輕罪ヲ犯シタル者

第十五條 艦隊軍法會議ハ左ニ記列スル者ヲ審判ス

一 司令官ノ麾下ニ屬スル軍人其他從軍諸員及ヒ艦隊ノ用ニ供スル船舶ノ乘員重罪輕罪ヲ犯シタル者、二 司令官ノ所管ニ係リ海軍刑法第三條第四條ニ依リ處斷ス可キ者、三 艦隊内ニ在ル未決既決ノ囚人重罪輕罪ヲ犯シタル者

第十六條 艦隊若クハ數隻ノ艦船外國へ出發ノ後其軍法會議ノ權限ニ屬スル者内國ニ在テ犯罪發覺シタル時ハ鎮守府軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス可シ

第十七條 海軍卿ハ時宜ニ依リ甲軍法會議ノ權限ニ屬スル事件ヲ乙軍法會議ニ移シ其審判ヲ爲サシムルヲ得

第十八條 軍人任官若クハ就役前罪ヲ犯シ在官現役中發覺シタル者ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス其在官現役中罪ヲ犯シ免官若クハ免役ノ後發覺シタル者ハ司法裁判ニ付ス歸休兵及豫備後備ノ軍籍ニ在ル者召集中罪ヲ犯シ若クハ舊罪發覺シタル者ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス其召集中ノ犯罪解散ノ後發覺シタル者ハ司法裁判ニ付ス

第十九條 軍人二名以上共ニ重罪輕罪ヲ犯シ各其管轄ヲ異ニスル時ハ先キニ審問ニ着手シタル軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス

第二十條 軍人ト軍人ニ非サル者ト共ニ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス但陸軍々人軍屬ト共犯ニ係ル時ハ第十九條ノ例ニ從フ

第二十一條 海軍刑法ノ罪ヲ犯シタル者ハ軍人ニ非スト雖モ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス餘罪俱ニ發シタル者モ亦同シ

第二十二條 重罪輕罪ト俱ニ發シタル違警罪モ亦軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス

第二十三條 俘虜降人ノ犯シタル重罪輕罪ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス

第四章 海軍檢察

第二十四條 海軍檢察ハ海軍ニ關スル犯罪ヲ捜査シ證據ヲ拾收ス

第二十五條 左ニ記列スルモノハ所管長官若クハ所屬長ノ命令ヲ受テ海軍檢察ノ職務ヲ行フ

東京軍法會議及ヒ鎮守府軍法會議ノ主理。鎮守府及艦艇營ノ士官。學校監事

第二十六條 海軍檢察ノ職務ヲ行フ者現行犯アルコトヲ知リタル時ハ時宜ニ因リ犯所ニ臨檢シ犯罪人ヲ逮捕シ訊問ヲ爲シ其調書ヲ作ルコトヲ得

第二十七條 各廳長及ヒ艦艇營長ハ各其管スル所ノ事ニ就キ犯罪アルコトヲ知リタル時ハ自ラ海軍檢察ノ處分ヲ爲シ又ハ第二十五條ニ記載シタル諸官ニ命シ若クハ委シテ其處分ヲ爲サシムルコトヲ得

第二十八條 何人ヲ論セス軍人ノ犯罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ被告人ノ所屬長東京軍法會議若クハ鎮守府軍法會議ノ主理又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得

第二十九條 何人ヲ論セス軍人ノ犯罪アルコトヲ知タル時ハ第二十八條ニ記載シタル官吏ニ告發スルコトヲ得

第三十條 軍人其職務ヲ行フニ因リ重罪輕罪ヲ犯タル者アルコトヲ知タル時ハ東京軍法會議若クハ鎮守府軍法會議ノ主理又ハ被告人ノ所屬長ニ告發ス可シ

第三十一條 軍人ノ重罪輕罪現行犯アル時ハ何人ヲ論セス直ニ之ヲ逮捕スルコトヲ得

其犯罪人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ被告人ノ所屬長又ハ東京軍法會議若クハ鎮守府軍法會議ノ主理司法警察官憲兵若クハ巡查ニ交付ス可シ

第三十二條 司法警察官憲兵及巡查現行犯ノ軍人ヲ逮捕シ若クハ其交付ヲ受ケタル時ハ速ニ之ヲ被告人ノ所屬長又ハ東京軍法會議若クハ鎮守府軍法會議ノ主理ニ引致ス可シ

第三十三條 司法警察官軍人ニ係ル告訴告發ヲ受ケタル時ハ速ニ被告人ノ所屬長又ハ東京軍法會議若クハ鎮守府軍法會議ノ主理ニ交付ス可シ

第三十四條 告訴人告發人ハ願下ヲ爲シ若クハ其陳述ヲ變更セシムルコトヲ請求スルコトヲ得

第三十五條 第二十五條ニ記載シタル諸官海軍檢察ノ處分ヲ爲シタル時ハ調書ヲ作り證據文書ヲ添テ各其所管長官若クハ所屬長又ハ委託ヲ受ケタル各廳長ニ具申ス可シ

第五章 審問

第三十六條 鎮守府長官司官被告事件ノ具申ヲ受ケタル時ハ速ニ左ノ處分ヲ爲ス可シ

被告人上長官以上及同等以上ノ軍人ナル時ハ之ヲ海軍卿ニ具申ス可シ

第六類 治罪法 海軍治罪法

鎮守府長官ハ判士ニ司令官ハ麾下ノ將校ニ審問委員ヲ命シテ審問ヲ爲サシメ若クハ直ニ判決ニ付ス可シ

第三十七條 各廳長被告事件ノ具申ヲ受ケ若クハ自ラ檢察ノ處分ヲ爲シタル時ハ速ニ其事件ヲ東京軍法會議ノ主理ニ移シ主理ハ之ヲ判士長ニ交付ス可シ

第三十八條 東京軍法會議ノ判士長主理ヨリ被告事件ノ交付ヲ受ケタル時ハ速ニ左ノ處分ヲ爲ス可シ

被告人准士官以上及ヒ同等以上ノ軍人ナル時ハ之ヲ海軍卿ニ具申ス可シ

被告人下士以下及同等以下ノ軍人若クハ其他ノ諸人ナル時ハ其事件ノ難易ニ從ヒ判士ニ審問委員ヲ命シテ審問ヲ爲サシメ若クハ直ニ判決ニ付ス可シ

第三十九條 海軍卿被告事件ノ具申ヲ受タル時ハ其事件ノ難易ニ從ヒ審問若クハ判決ニ付スルノ命令ヲ下ス可シ其命令ヲ受タル鎮守府長官司令官若クハ判士長ハ審問委員ヲ命シテ審問ヲ爲サシメ又ハ直ニ判決ニ付ス可シ

第四十條 審問委員審問ヲ爲ス時ハ先ツ召喚狀ヲ發ス其被告人出廷シタル時ハ即日之ヲ訊問ス可シ

第四十一條 審問委員ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人遠隔ノ地ニ在ル時ハ其地ノ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルヲ得

第四十二條 審問委員ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セサル時ハ勾引狀ヲ發スルヲ得

第四十三條 審問委員ハ重罪被告人ニ對シ又ハ其他ノ被告人罪證ヲ湮滅シ若クハ逃走スルノ恐アル時若クハ未遂罪脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂クルノ恐アル時ハ直ニ勾引狀ヲ發ス可シ

第四十四條 審問委員ハ勾引狀ヲ受ク可キ被告人遠隔ノ地ニ在ル時ハ其地ノ司法警察官ニ委シテ之ヲ執行スルコトヲ得

第四十五條 審問委員ハ召喚狀若クハ勾引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事故アリテ令狀ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ其所在ニ就テ之ヲ訊問スルコトヲ得若シ被告人遠隔ノ地ニ在ル時ハ其地ノ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十六條 審問委員ハ被告人ノ所在ヲ覺知スルコト能ハサル時ハ鎮守府長官司令官若クハ東京軍法會議ノ判士長ニ具申ス可シ

鎮守府長官司令官若クハ東京軍法會議ノ判士長ハ各控訴裁判所ノ檢事長ニ人相書ヲ送り其逮捕ヲ求ム可シ

司令官外國ニ在テハ領事若クハ公使ニ人相書ヲ送り其逮捕ヲ求ム可シ

スルコトヲ得

收禁狀ヲ發シタル後若シ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非ラズ
又其收禁ヲ要セサル者ト認メタル時ハ收禁狀ヲ解ク可シ

第四十八條 審問委員ハ事實審明ノ爲メ臨檢家宅搜索物件押收ノ處分ヲ爲スコトヲ得
其處分ヲ爲ズ時ハ錄事之ニ會同シ調書ヲ作ル可シ

其場所遠隔ノ地ニ在ル時ハ其地ノ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十九條 審問委員ハ事實審明ノ爲メ驛遞電信鐵道ノ官署及ヒ諸會社ニ事由ヲ通知
シテ被告人ニ關係アル往復文書電報及ヒ物件ヲ收受開披スルコトヲ得
其場所遠隔ノ地ニ在ル時ハ第四十八條第二項ノ例ニ依ル

第五十條 審問委員ハ證人及ヒ通事ヲ呼出スコトヲ得

證人皇族若クハ勅任官ナル時ハ其所在ニ就テ陳述ヲ聽クヘシ

證人疾病其他正當ノ事故アリテ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ其所在
ニ就テ之ヲ訊問スルコトヲ得

證人遠隔ノ地ニ住スル時ハ第四十八條第二項ノ例ニ依ル

第五十一條 審問委員ハ被告人及ヒ證人ノ訊問ヲ爲ス時ハ錄事之ニ會同シ調書ヲ作り
訊問及ヒ供述ヲ錄取シ被告人若クハ證人ニ讀示セシメ其陳述シタル所ニ違ハサルヤ

否ヲ問ヒ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ記ス可シ

被告人及ヒ證人ハ其陳述ヲ變更増減セシムコトヲ請求スルコトヲ得

第五十二條 審問委員ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ要ス

ル時ハ學術又ハ職業ニ因リ鑑定スルヲ得可キ者ニ命シテ其鑑定ヲ爲サシム可シ

鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其方法結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記シ若シ結果ヲ得サ
ル時ハ其推測スル所ヲ記シ署名捺印ス可シ

第五十三條 審問委員ハ証人鑑定人通事正當ノ事故ヲ證明セシメテ其呼出ニ應セサル
時ハ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ科ス可シ但其證人ニ對シ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

證人陳述ヲ肯セサル時ハ普通刑法第百八十條ニ依リ又鑑定人鑑定ヲ肯セサル時ハ普
通刑法第百七十九條ニ依リ罰金ヲ科ス可シ

第五十四條 證人鑑定人通事ニ罰金ヲ科スル時ハ普通刑法第二十七條ニ從フ但罰金ヲ
禁錮ニ換フル時モ亦審問委員之ヲ命ス

第五十五條 審問委員ハ審問ニ於テ餘罪ヲ覺察シタル時ハ直ニ本件ト共ニ審問ス可シ
共犯ヲ覺察シタル時ハ之ヲ鎮守府長官司官若クハ東京軍法會議ノ判士長ニ具申ス

可シ

第五十六條 審問委員ハ審問終リタル時ハ其報告書ヲ作り意見書ヲ添へ訴訟文書ト共

ニ之ヲ鎮守府長官司令官若クハ東京軍法會議ノ判士長ニ具申ス可シ
第六章 判決

第五十七條 鎮守府長官若クハ司令官審問事件ノ具申ヲ受テ被告人上長官以上及ヒ同等以上ノ軍人ナル時ハ之ヲ海軍卿ニ具申シ其他ノ者ナル時ハ直ニ判決ニ付ス可シ
東京軍法會議ノ判士長審問事件ノ具申ヲ受テ被告人准士官以上及ヒ同等以上ノ軍人ナル時ハ之ヲ海軍卿ニ具申シ其他ノ者ナル時ハ直ニ判決ニ付ス可シ

第五十八條 海軍卿審問事件ノ具申ヲ受ケタル時ハ軍法會議ヲ開ク可キ命令書ヲ鎮守府長官司令官若クハ東京軍法會議ノ判士長ニ下ス可シ

第五十九條 鎮守府長官若クハ司令官軍法會議ヲ開ク時ハ其命令書ヲ判士長ニ下シ其原本ヲ訴訟文書ト共ニ主理ニ下付シ主理ハ之ヲ判士長ニ交付シ會議ノ日時ヲ判士ニ通報ス可シ

東京軍法會議ノ判士長軍法會議ヲ開ク時ハ之ヲ主理ニ通知シ主理ハ會議ノ日時ヲ判士ニ通報ス可シ

第六十條 軍法會議ヲ開ク時ハ判士長判士主理録事各其席ニ就キタル後判士長被告人ヲ出廷セシム

判士長ハ先ツ被告人ノ官位勲等職名氏名族籍年齢住所ヲ問ヒ訊問ヲ爲スノ旨ヲ告示

シ録事ヲシテ審問委員ノ報告書ヲ朗讀セシム

其朗讀終リタルノ後判士長ハ報告事件ヲ訊問シ若クハ判士ニ命シテ其訊問ヲ爲サシム

第六十一條 判士長ハ開廷ヨリ判決ニ至ルマテ令狀ヲ發スルコトヲ得

判士長ハ法廷ニ於テ警戒ノ爲メ其處置ヲ爲スコトヲ得法廷ニ於テ罪ヲ犯ス者アル時ハ判士長其處分ヲ爲シ若クハ判士ニ命シテ其處分ヲ爲サシム可シ

法廷ニ於テ証人鑑定人及ヒ通事ヲ要スル時ハ第五章ノ例ニ依ル

第六十二條 判士長ハ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人出廷ノ命ニ應セサル時ハ之ヲ引致ス可シ但疾病其他正當ノ事故ニ因リ出廷スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ其審判ヲ延期スルコトヲ得

第六十三條 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人召喚狀ヲ受テ審判ノ日時ニ出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可シ

第六十四條 被告人逃走シテ審判ノ日時ニ出廷セス又ハ召喚狀ヲ送達スルコトヲ得サル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可シ

第六十五條 數人共犯ノ審判ヲ爲ス時被告人中闕席シタル者アリト雖モ出廷シタル者ニ對シ審判ヲ爲ス可シ

第六十六條 判士長ハ被告人ヲ訊問シタル後證人ヲ訊問シ若クハ判士ニ命シテ訊問セシム可シ

第六十七條 判士長ハ證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト認メタル時ハ收禁狀ヲ發シ更ニ訊問ヲ爲シ若クハ判士ニ命シテ訊問ヲ爲サシメ鎮守府軍法會議若クハ艦隊軍法會議ノ判士長ハ各其所管長官ニ具申シ東京軍法會議ノ判士長ハ其證人准士官以上及ヒ同等以上ノ軍人ナル時ハ海軍卿ニ具申ス可シ其處分ヲ爲シタル時ハ判士長ハ本件ノ審判ヲ延期スルコトヲ得

第六十八條 判士長ハ法廷ニ於テ更ニ檢証ノ處分ヲ要スルコトアル時ハ其處分ヲ爲シ若クハ判士ニ命シテ其處分ヲ爲サシム可シ
法廷ニ於テ共犯ヲ覺舉シタル時ハ第六十七條ノ例ニ從ヒ具申ス可シ
若シ餘罪ヲ覺舉シタル時ハ本件ト共ニ其審判ヲ爲ス可シ

第六十九條 判士長ハ被告人及ヒ證人ノ訊問終リタル時ハ更ニ被告人ニ對シ他ニ陳述ス可キ事件ナキヤ否ヲ問ヒ審問終リタルノ旨ヲ告テ被告人ヲ退廷セシム可シ

第七十條 判決書ハ判士事實ト法律トニ依リ左ノ條件ニ照シ之ヲ作り判士長判士錄事署名捺印ス可シ

一有罪ノ判決書ニハ犯罪ノ證憑及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ詔ス。二無罪ノ判

決書ニハ被告事件罪トナラサルコト及ヒ其理由ヲ記シ犯罪ノ證憑備ハラサル時ハ其旨ヲ記ス。三免訴ノ判決書ニハ公訴ノ期滿免除ト爲リタルコト大赦アリタルコト法律ニ於テ其罪ヲ全免スルコト及ヒ其理由ヲ記ス。四被告人ノ官位勳等職名氏族籍年齡住所及ヒ軍法會議判決ノ年月日ヲ記ス

第七十一條 鎮守府軍法會議若クハ艦隊軍法會議ノ判士長ハ判決書ニ訴訟文書ヲ添ヘ各其所管長官ニ具申ス可シ

第七十二條 鎮守府長官司令官ハ左ニ記載スル事件ハ海軍卿ニ上申シテ命ヲ請ヒ其他ハ之ヲ專決ス

死刑。上長官及ヒ同等以上軍人ノ重罪輕罪。士官准士官及ヒ同等軍人ノ重罪

第七十三條 東京軍法會議ノ判士長ハ判決書ニ訴訟文書ヲ添ヘ海軍卿ニ上申シテ命ヲ請フ可シ

第七十四條 鎮守府長官司令官ハ其判決ヲ不適當ト思量スル時ハ其專決ノ權アル事件ハ直ニ之ヲ再議セシムルコトヲ得
其專決ノ權ナキ事件ハ意見ヲ附シテ海軍卿ニ上申ス可シ

第七十五條 海軍卿ハ其判決ヲ不適當ト思量スル時ハ直ニ其具申スル所ノ鎮守府長官司令官若クハ東京軍法會議ノ判士長ニ下シテ之ヲ再議セシムルコトヲ得

海軍卿ハ死刑並ニ上長官以上及ヒ同等以上軍人ノ重罪輕罪並士官及ヒ同等奏任官軍人ノ重罪ニ係ルモノハ上奏シテ命ヲ請フ可シ

第七十六條 宣告執行ノ命令アリタル時ハ判士長判士主理録事法廷ニ臨ミ被告人ヲ出廷セシメ判士長其宣告ヲ爲ス可シ

第七十七條 外國若クハ航海中ニ於テ司令官又ハ艦長ハ輕罪ノ刑ノ宣告ヲ受ケタル者ニ戴罪服務ヲ命スルコトヲ得但戴罪服務ノ日數ハ刑期ニ算入セス

第七十八條 行刑ニ關スル方法ハ海軍卿別ニ之ヲ定ム

第七章 軍中處分

第七十九條 臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其司令官麾下ノ將校若クハ其地ニ在ル將校中ヨリ撰ミ專任判士ヲ置キ被告人ノ官等ニ拘ハラヌ之ヲ審判セシム但將校缺乏ノ場合ニ於テハ他ノ官吏ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得

第八十條 合圍ノ地ニ於テハ第十三條第十四條第十五條ニ記載シタル者ハ合圍軍法會議ノ權限ニ屬ス

第八十一條 臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其司令官被告人ノ官等ニ拘ハラヌ直ニ審判及ヒ其宣告執行ノ命令ヲ下スコトヲ得

第八十二條 臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其司令官又ハ艦長ハ輕罪ノ刑ノ宣告ヲ受ケ

タル者ニ戴罪服務ヲ命スルコトヲ得但戴罪服務ノ日數ハ刑期ニ算入セス其戴罪服務中功績アル者ハ司令官其刑ヲ減免スルコトヲ得

第八十三條 臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其司令官時宜ニ因リ此治罪法ノ條目ヲ省略處分セシムルコトヲ得

第八十四條 合圍軍法會議ヲ廢スルニ當リ既ニ審判ニ着手シタル者ハ海軍卿ノ指定スル軍法會議若クハ其事件ヲ管理ス可キ官司ニ送致ス可シ

八十三號 銀行ノ下(品又ハ何)ヲ脱ス
 何種何ノ下(品又ハ何)ヲ脱ス
 何日ノ下(付)ヲ脱ス
 紙幣頭ノ下(之ヲ)ヲ脱ス
 而シテノ下(若シ)ヲ脱ス
 資本金ノ下(入金)ヲ脱ス
 十分ノ二五(二、五)ノ誤
 捨置ノ下(又ハ)ヲ脱ス
 銀行ノ下(紙幣)全十二行聽斷ノ下(主任)ヲ脱ス
 發行ノ下(紙幣)全十五行謀リノ下(テ)ヲ脱ス
 處分ヲノ下(以テ)ヲ脱ス
 正寫ノノ下(與)ヲ脱ス
 請取ノ下(證)ヲ脱ス
 ナルハ(ナキ)ノ誤
 仲買人ノ下(ノ)ヲ脱ス
 十五年ノ下(十)ヲ脱ス

○下卷 正誤

四十六丁 二行
 四十七丁 七行
 八十四丁 八行
 八十五丁 九行
 八十七丁 四行
 九十六丁 六行
 九十八丁 十三行
 百六丁 九行
 百八丁 八行
 百九丁 四行
 百二十七丁 四行
 百三十八丁 初行
 百五十三丁 初行
 百七十二丁 五行
 百八十九丁 八行

何種何ノ下(品又ハ何)ヲ脱ス
 何日ノ下(付)ヲ脱ス
 紙幣頭ノ下(之ヲ)ヲ脱ス
 而シテノ下(若シ)ヲ脱ス
 資本金ノ下(入金)ヲ脱ス
 十分ノ二五(二、五)ノ誤
 捨置ノ下(又ハ)ヲ脱ス
 銀行ノ下(紙幣)全十二行聽斷ノ下(主任)ヲ脱ス
 發行ノ下(紙幣)全十五行謀リノ下(テ)ヲ脱ス
 處分ヲノ下(以テ)ヲ脱ス
 正寫ノノ下(與)ヲ脱ス
 請取ノ下(證)ヲ脱ス
 ナルハ(ナキ)ノ誤
 仲買人ノ下(ノ)ヲ脱ス
 十五年ノ下(十)ヲ脱ス

再校正誤

二百二十七丁	七行	トキハノ下(税則)ヲ脱ス
三百一丁	十三行	上告ノ下(狀)ヲ脱ス
四百六十七丁	九行	者ノ下(ハ)ヲ脱ス
五百三十五丁	六行	供スルノ下(ノ)ヲ脱ス
五百四十六丁	三行	犯ノ下(罪)ハ衍
同	十四行	犯ノ下(罪)ハ衍
六百三十三丁	十行	被告ノ下(人)ヲ脱ス
六百五十五丁	四行	若シ以下一行ハ三行得スノ下へ接スヘキノ誤
六百七十九丁	四行	以テノ下(一)ヲ脱ス
六百八十九丁	九行	以上ノ下(滿)ヲ脱ス
六百九十丁	二行	者トノ下(滿)ヲ脱ス
六百九十三丁	五行	同シクノ下(シ)ヲ脱ス

明治十八年十月廿四日出版御届
同 年十一月 出 版

定價金貳圓九拾錢

編輯兼出版人

梶原猪之松

岐阜縣下美濃國厚見郡
今泉村泉町五番地寄留

發兌書肆

啓文社支局

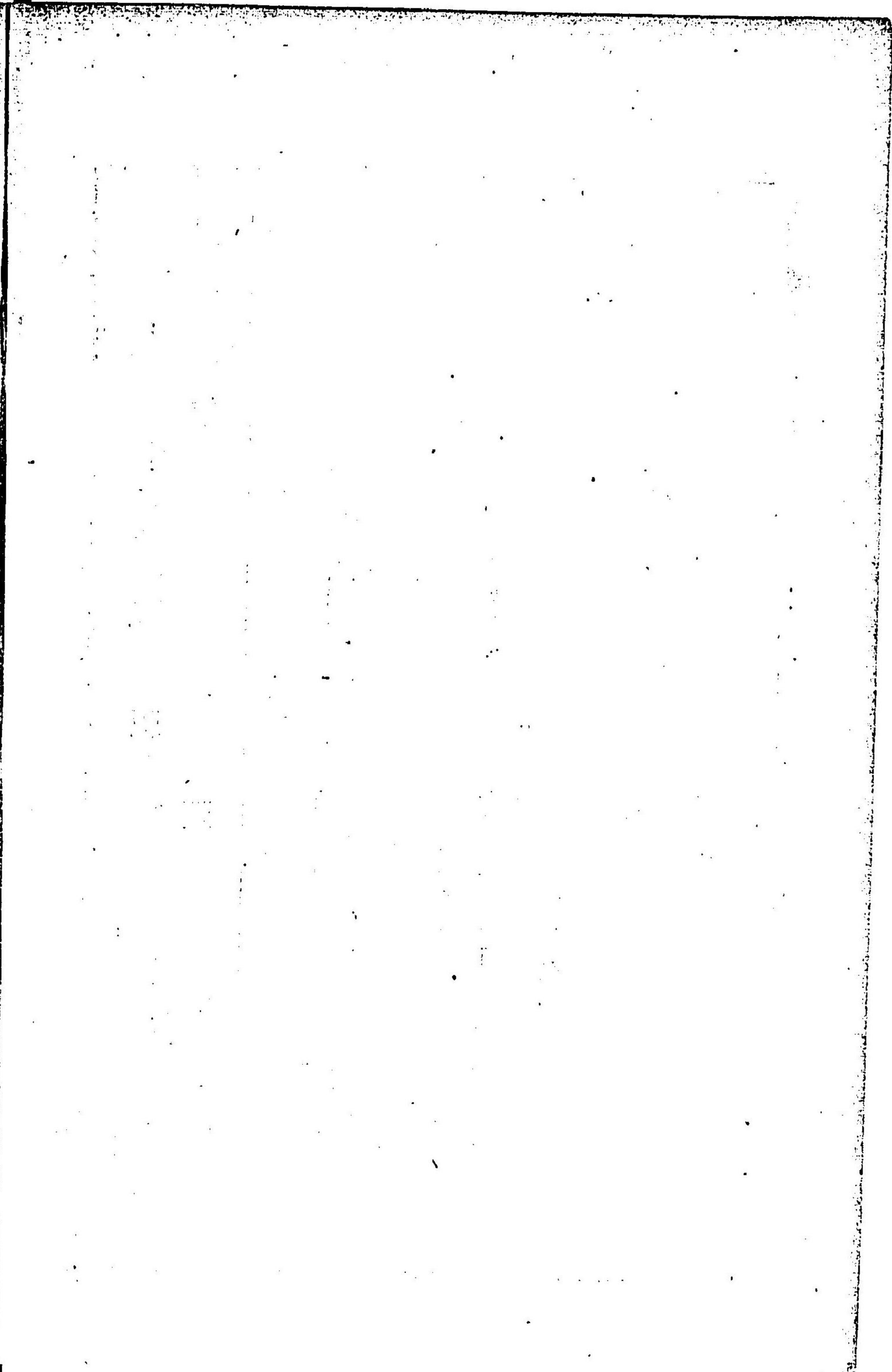
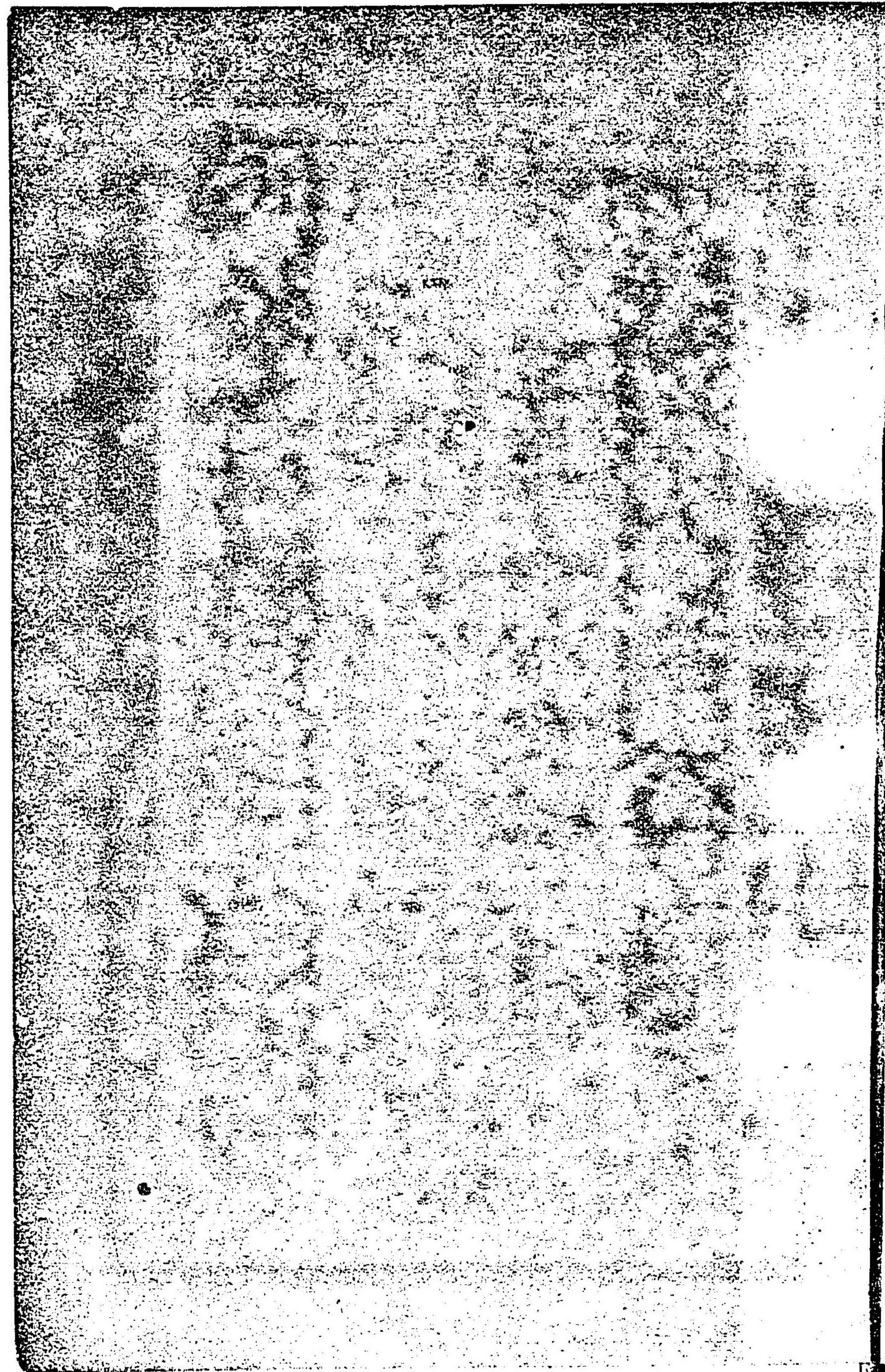
愛知縣下名古屋區關鍛冶町
四丁目百十五番地

同

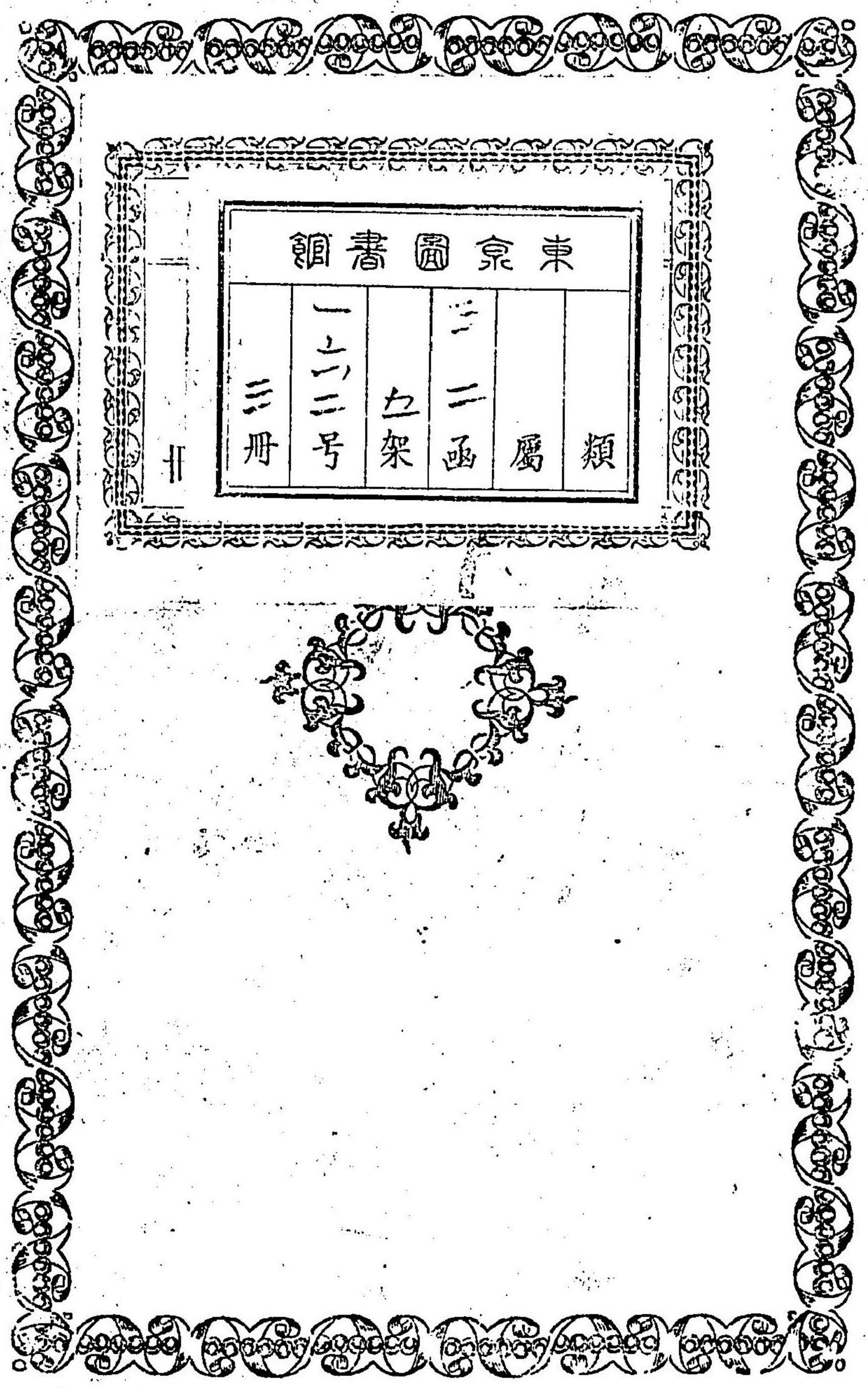
啓文社支店

東京銀座二丁目十三番地

愛媛縣平民



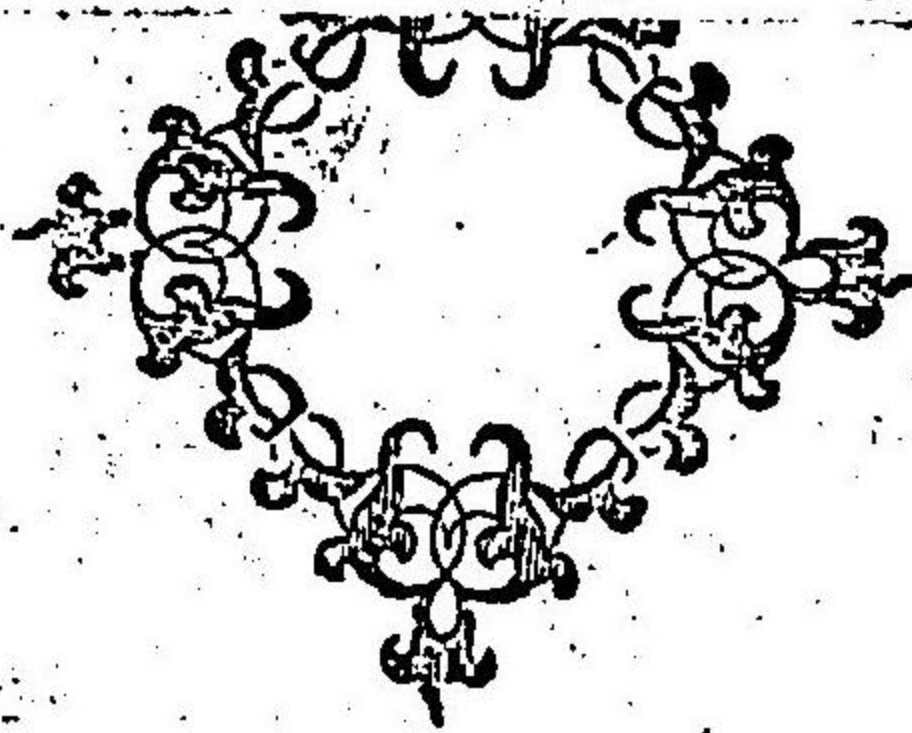
32
162



東 京 圖 書 館

三	一 二 号	五 架	三 二 函	屬	類
---	-------------	--------	-------------	---	---

廿



32
162

禁電子式複写

031120-003-4

CZ-5-07

法律規則全書

梶原 猪之松 / 編

M18

BBC-0942

